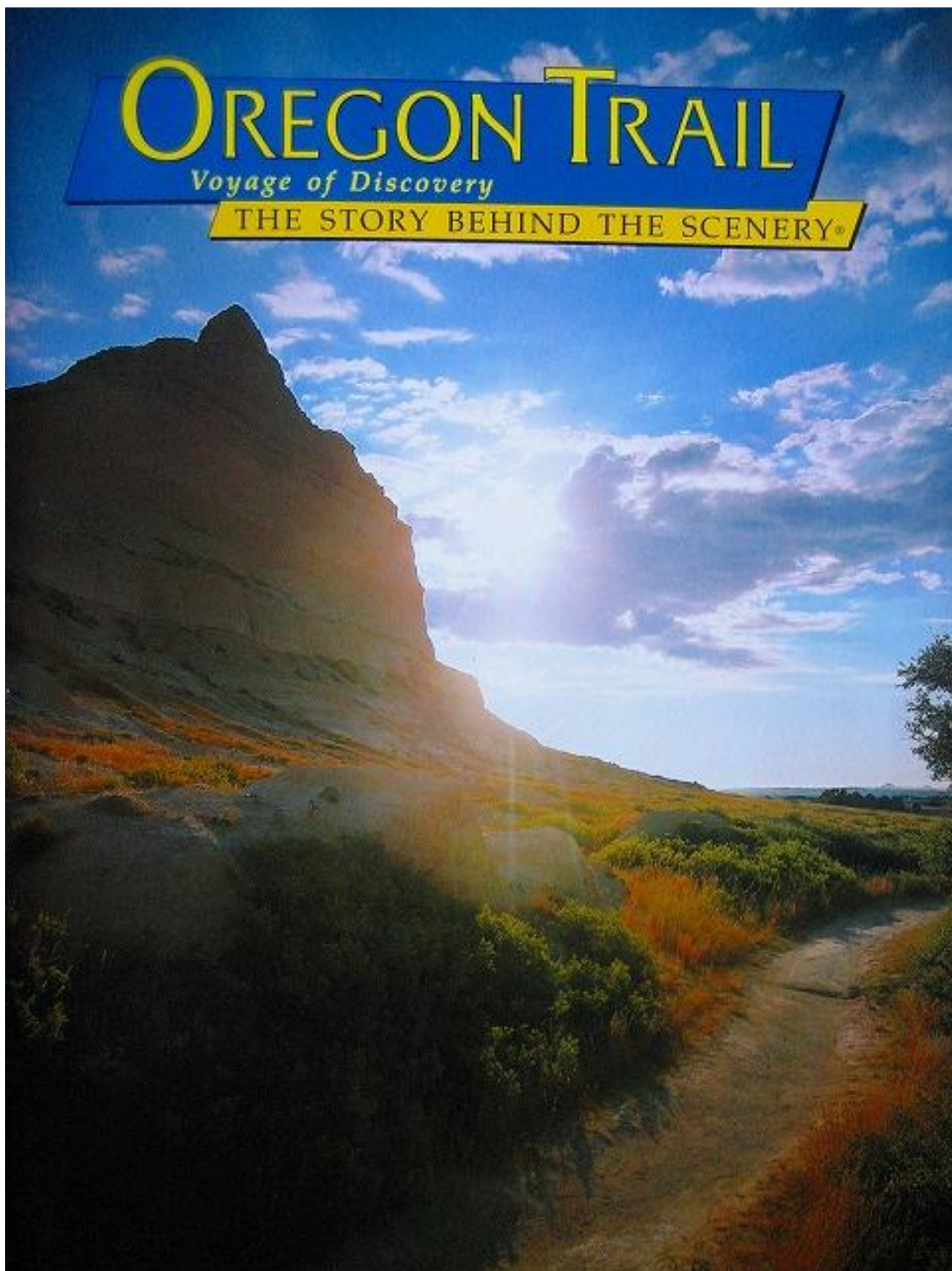
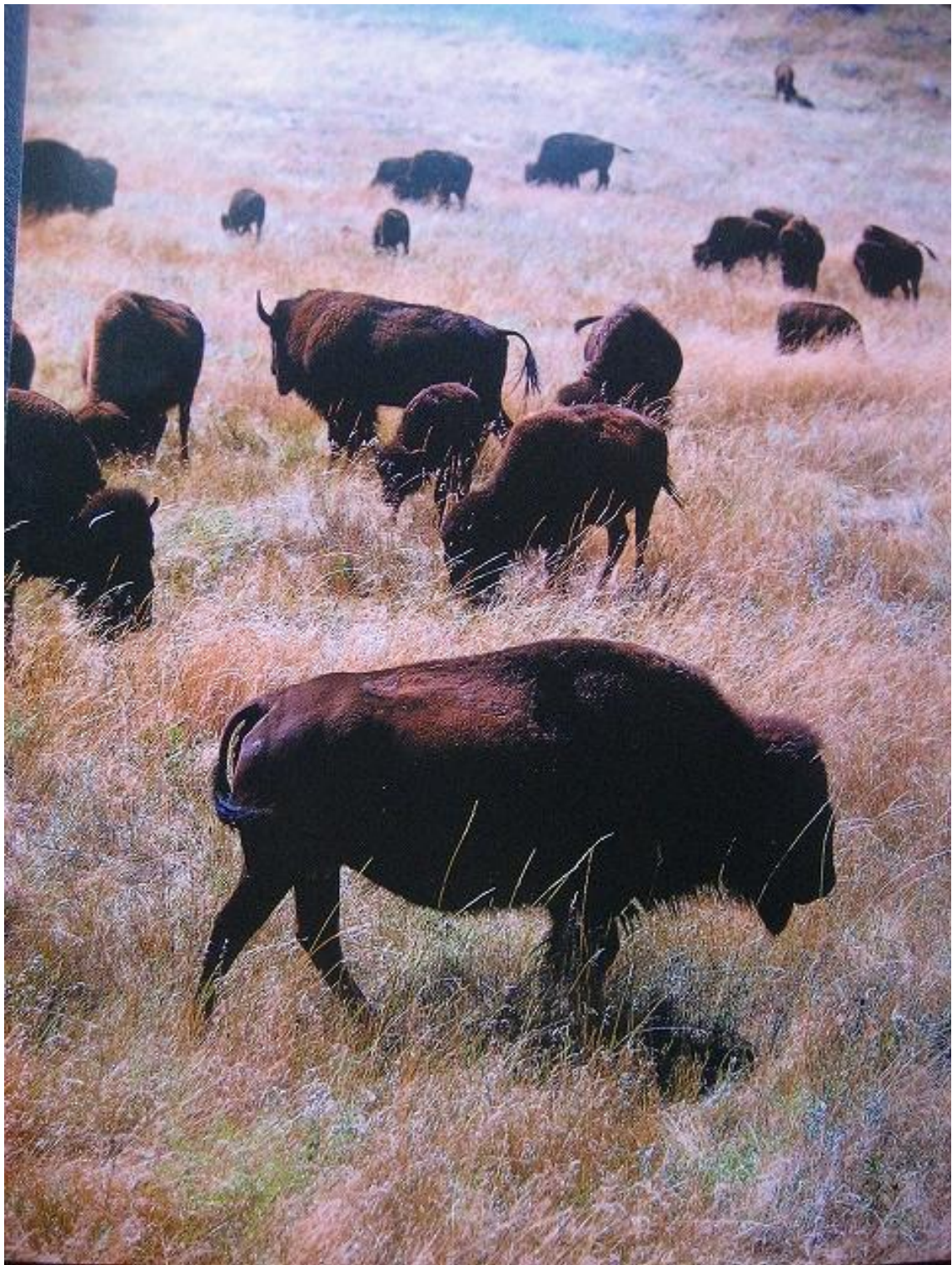


OREGON TRAIL

Voyage of Discovery

THE STORY BEHIND THE SCENERY®





Oregon Trail

未知への旅

景観の裏に隠された物語

新しいものを発見するという唯一真実の旅は、新しい大地を求めるということだけでなく、新しいものを見る目を持つということからなりたっているのである。

Marcel Proust

解説

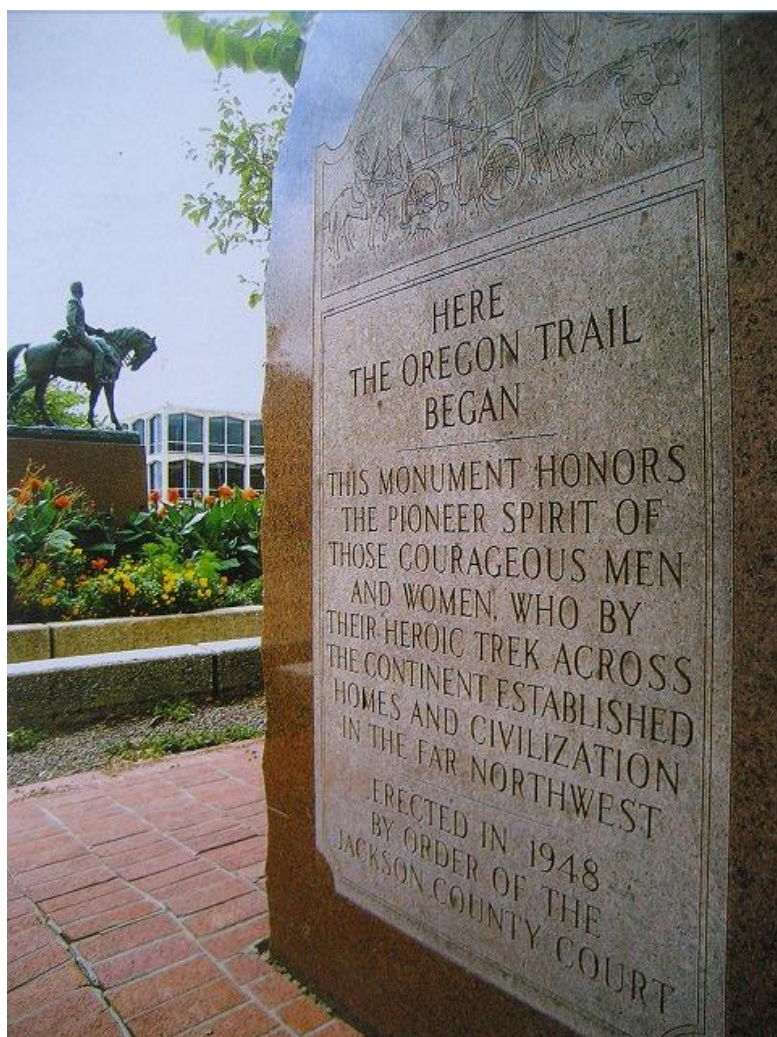
Dan Murphy

写真

Gary Ladd

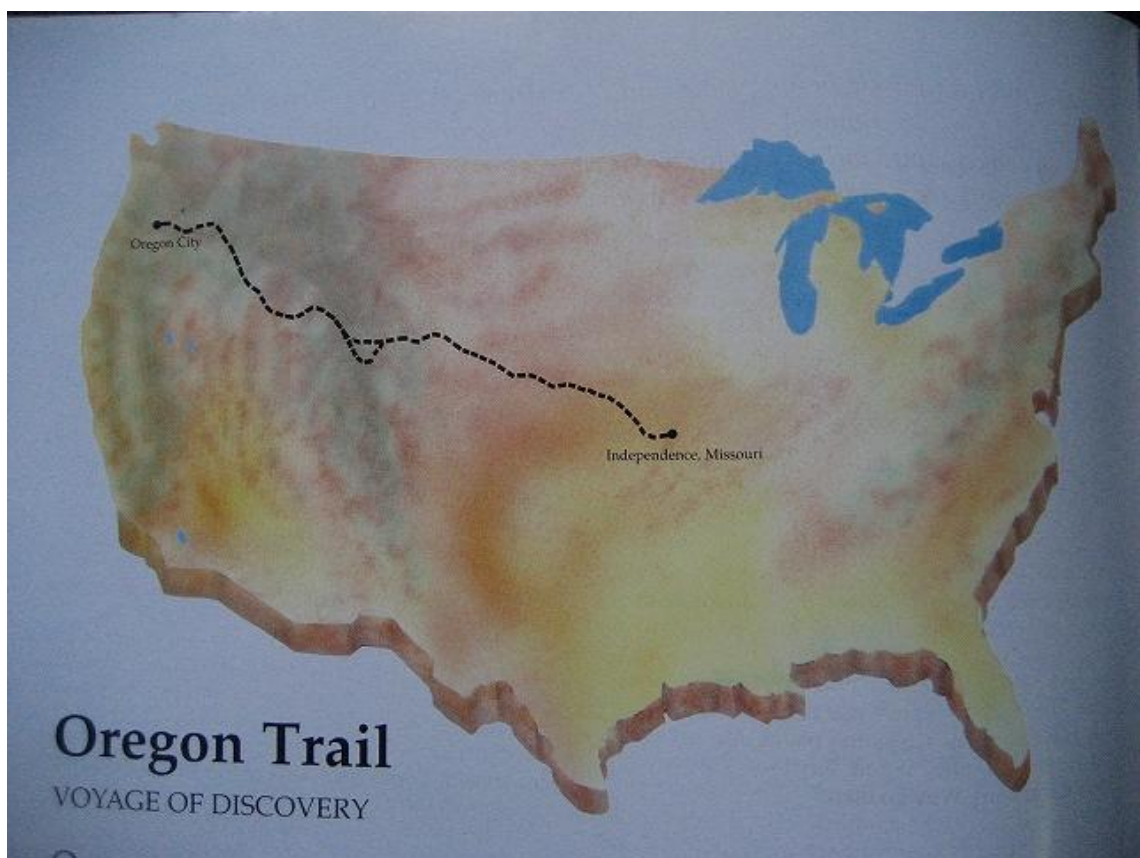
DAN MURPHY は、今はナショナルパークサービスを退官していますが、“それでも、他の人たちが以前に探索した場所を、さらに探索する一歴史的な足跡を辿る、自由な時間を持っているのです。” DAN は、かつて“Voyage of Discovery”のシリーズの中で、Lewis and Clark and John Wesley Powell.についての本も執筆しています。

GARY LADD は、15年の経歴をもつプロの写真家で、映画に使うオレゴン・トレイル物語の重要な情報を収集するためにミズーリからオレゴンにいたる“開拓者達”の足跡を辿りました。



“それから、彼は、目を輝かしながら、こういったのです。‘紳士諸君、彼らは言うはずですが、オレゴンでは、豚たちが大きなどんぐりの木の下で走り回り、丸々と太って、そして、もう、料理さえされ、この肉にはナイフやフォークが刺さっており、あなた方が、お腹がすいていれば、何時だってその一切れを切り取ることが出来るのです、と。’・・・父は、彼の名前をサインした最初の人でした。”

Peter Burnett, 1843 後のカリフォルニアの州知



オレゴン・トレイル

未知への旅

オレゴン！ その感嘆符は、造りつけのものであった。1840年代にインディアン農民が、西に行こうということを話している時に、その中にこの言葉を聞いただろう。こうした言葉は、ちょうど一世代前に、最初にあったもとの森から切り開かれた農場に、

いまだ、根株の端が立ち残っていた、ミシシッピーの谷間でささやかれていたのだ。しかし、オレゴン！に、すでに料理され、ナイフやフォークが突き刺さっているという豚についての古い物語は、少々ひどすぎる。なお、農民は誰も、西に行けばある、というエデンの園についての噂のなかに何か真実があると信じていたのである。そして、それは、確かにあったのだ。

しかし、オレゴン！とは一体どこなのか？ そこは誰の領地なのか？ 応えは、まことにおぼろげなものであった。調査は、いつも明確でなかったし、ヨーロッパ人たちがこの新しい世界に分け入ろうと競争したときには、いつも、主張のし合い、論争の対象となり、外交的なやりとりや、地図作りに没頭させられていたのである。当初、スペインは、ニューメキシコとカリフォルニアに植民地を開いた。イギリスの入植者達は、独立する以前は、新大陸の東の沿岸地域を支配していたが、独立を勝ち取り、その後は、強力な権力をもつ新しいアメリカ合衆国となった。

この大陸の太平洋の海岸地帯は、沢山の国が統治権を主張しながらも、以前として、殆どがヨーロッパ人による殖民の行われないうまま残っていた。オレゴンの場合には、イギリスが自分たちの船がたどり着いたということで、この領域の主権を主張していたが、一方、アメリカもこの地域の主権を主張していたが、それは、ルイスとクラークが、1805年に合衆国からこの領域にいたる大陸横断探検の完遂を根拠にしたものだった。ロシアやスペインによる主張のあと、取引により入植が為されていたとは言え、イギリスとアメリカの双方から主張された、残された広大なオレゴンからすれば、その名前の由来となった現在の州はわずかに小さなものとなった。

詳細は依然として不明であるが、しかし、オレゴン領域というのは、おおよそロッキー山脈の峰々から太平洋に至るまで、そして、今日のカリフォルニアの先端から荒らすかの南端部まで広がっていた。それは、現在のワシントン、アイダホ、モンタナ、ワイオミング、ユタ、そして、オレゴンの全部もしくはその一部、また、殆どのブリティッシュ・コロンビアを含んだものであった。なおも、その慮秋は、何処からもずっと離れた場所であり、それぞれの地域には、事実、わずかに手に数えられるほどのわな猟師や商人たちがそこに住んでいるに過ぎなかった。1812年に戦争が終結し、平和条約が結ばれて、合衆国とイギリスは極めて特殊な提案に同意した。彼らは、この領域をお互いに合同で占有し、後にそれを維持し続けたものにその所有権を認めるというものであった。

事実、オレゴン領域は、何処からも遠い土地であったのだ。広大で、しかも、全くと言ってよいほど太平洋の航海は脅威に満ちていたし、一方、ミシシッピー川から、山自身が陰しく、しかも延々と連なるロッキー山脈までの広大な平原とにより、オレゴン合宿国から遠く隔離されていた状態だった。

ヨーロッパ人たちのビーバーの毛皮を使った帽子の流行が、一儲けをしようという罫猟師たちをこの西部の大自然のなかに取り付かせた。数年の間、伝説的な“山男達”が、谷や峠を見つめながら、山々に分けいつていった。現実的なオレゴン街道に沢山の足跡を

残したのは1人の毛皮の商人で、Missouri Gazette が、彼の報告書を出版していた：“……北アメリカの大陸を横断する旅が、多分、幌馬車で実施されるだろう……”。誰かが、それに耳を傾けていた、そして、1830年に、何人かの毛皮商人が沢山の荷物と取引用の商品を積んで、セント・ルイスから大平原を横切り、とにかく山奥まで幌馬車を仕立てて入っていった。セント・ルイスにビーバーの毛皮という幸運をもたらすような罫猟師たちと出会いに期待して。

この毛皮の取引は、流行、とりわけ、悪名高き移り気なものにより引き起こされたものでした。帽子のスタイルが変わると、この毛皮の取引が破産してしまったのです。しかし、こうした、山男達は、一つの仕事を成し遂げていました。彼らは、この大陸のまさに半分を流れ下る、ビーバーたちが生息することの出来るすべての川についての探検をしたのです。彼らこそ、彼らの次に続く人たちの道しるべとなったのです。

こうして、1841年までに、合衆国の活発な人たちは、依然として、まだほんのわずかの情報しかなかったのですが、彼らは、その大平原と大山脈を乗り越えてオレゴンの領域に続く経路が実際にあることを知ったのです。しかし、彼らは、また、それがどれだけの苦難を伴うものであったかも知っていました。どうして、そんなところに行くのでしょうか？

最初、それは、宣教師達であった。彼らの偉大な探求は、アメリカの西に行こうという物語の中での全く分かった偶然の出来事によってもたらされたものであった。彼らの誰一人として、4人のインディアンのリーダー達、彼らは白人達によって必然的に“酋長”と思い込まれていたが、彼らが、1831年の秋にセント・ルイスに現れたときには、彼らの気持ちのうちの何であるかということを実際知るものはいなかった。1人は、フラットヘッドのものであり、残りの三人はネスペレス族であったが、彼らは、メリウェザー・ルイスとともに、四半世紀前に彼らの住んでいた地域をとおり、完遂した偉大なる探検隊を指揮したウィリアム・クラーク、当時、彼はセント・ルイスに住んでいたのだが、その彼のことを思い出し、尋ねてきたのであった。彼らは、今、まさに、猜疑心、否、それは多分要望であったのであろうが、それとともに幾つもの山々を超えて旅をして来たのだった。彼らは、白人の薬、その薬が彼を非常に強力な力の持ち主にしているのだが、その薬の何がしかを手にするにはどうすることが出来たのだろうか。彼らは事実、この望みのない相互の文化の交流の中で何を意図していようが、それは、頼りない通訳のおかげで失われてしまったのだ。にもかかわらず、その物語がメゾディストのキリスト教主張者達のなかに姿を現すときまで、それは、宣教師達のための忍耐に満ちた嘆願書であり、神学的な言葉に満ち満ちたもので、おそらくは、インディアン達から来たものであったのだと思われるが、彼らの悲惨さを嘆き悲しむものであり、そして、白人の男の救済に望みを託しているものであった。

たとえ治療された種でも、肥沃な大地に落ちることが出来る。東部の教会に次ぐ教会の中で、お金が現代のマケドニア人と読んでいる人たちのために入ってきた。この時だけ、

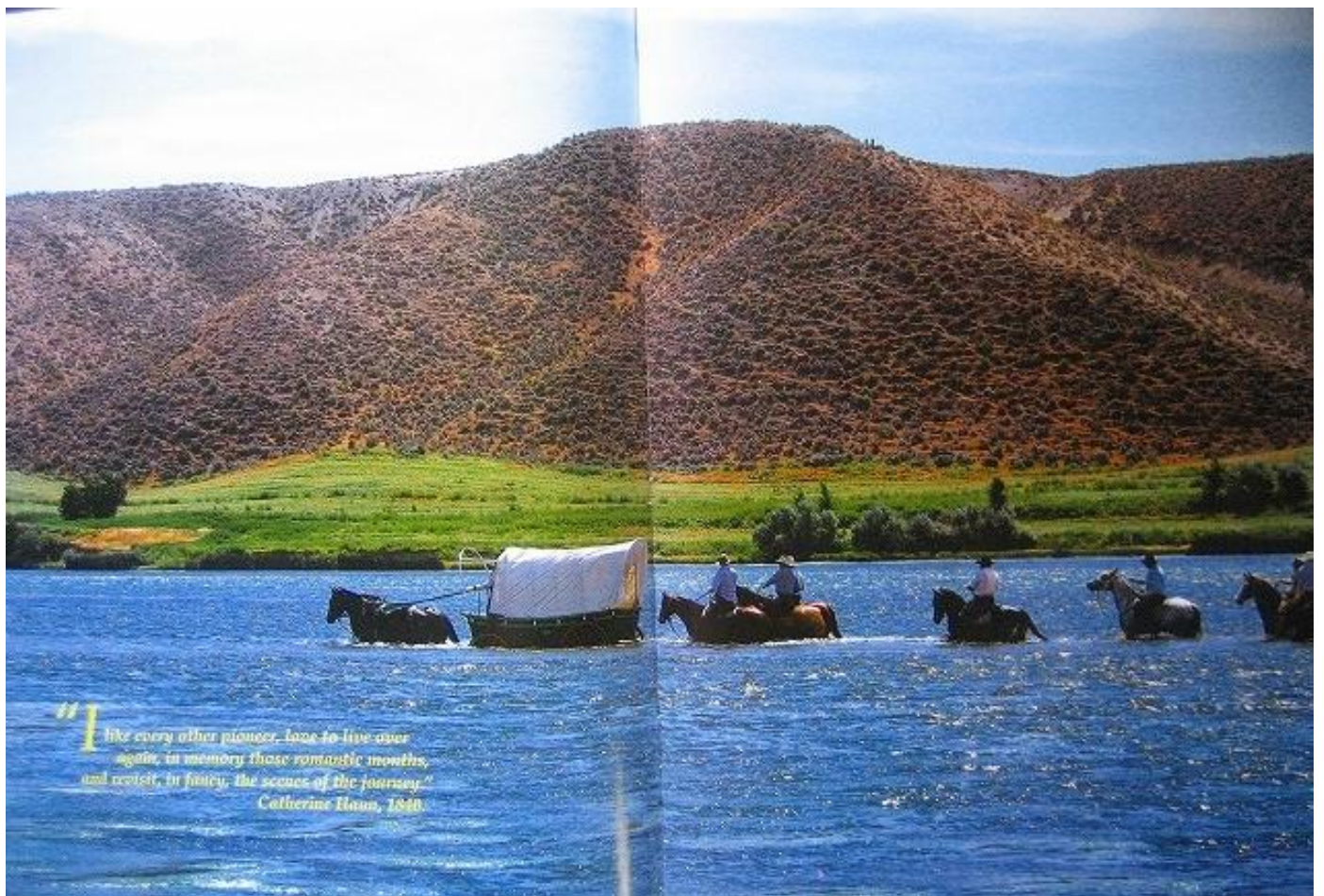
マケドニアは、オレゴンの中にあったのだ。そして、男達はこれに応え、また、インディアン達を改宗させようと情熱に燃えていた。メソジスト派の宣教師である **Jason Le** は、毛皮取引企業と手を組み、大平原を越えて、そして、ついに、ロッキーの山のなかでブラックフィート族に会った—そして、そのままオレゴンまで到達したのだった。 **Lee** は、東部の教会でパレードをするために沢山のインディアンをつれてきた。そして、もっと沢山の宣教師達が署名をした。その中の1人が、**Marcus Whitman, M.D.** で、彼は、長老派教会の宣教師でもあり、且つ又、医者でもあった。そして、彼の名前は、数年の間にオレゴン街道に來た開拓者達により、あがめられるようになった。

別の宣教師の **Samuel Parker** も、**Whitman** と一緒に旅をした。彼は、オレゴン領域に入ったあと、帰還して、オレゴンの素晴らしさを褒め称え、どうすればそこにたどり着くことが出来るかを解説したガイドブックを書いた。何度も重ねた会合ののちに、新聞の記事やチラシのなかで、教会の代理人たちが、オレゴンについての記述をした。彼らは、インディアン達のことについても話題にあげたが、農民や商人たちは、その季候や土地、そして、森林などのことについて気を使っていた。

当時の合衆国の状況は 1830 年代の終わりにはとても厳しいものであった。というのは、1837 年に経済的なパニックが起こり、それ以後、不景気が続いていたからであった。そして、農民や商人たちは、広大な農地や天候が良くて、皮が流れ、そして、狩猟の動物達に溢れた西部のことを耳にしていた。誰かが、西部に行くことを言い出すと、たちまちその考えが広まっていった。その中には開拓農民の子供達がいたし、その考えは決して違和感のあるものではなかった。そして、なんと行っても、土地は、ほしだけ手に入るということであった——あなたは、今こそ、そこを目指してゆくべきなのだ、というわけである。

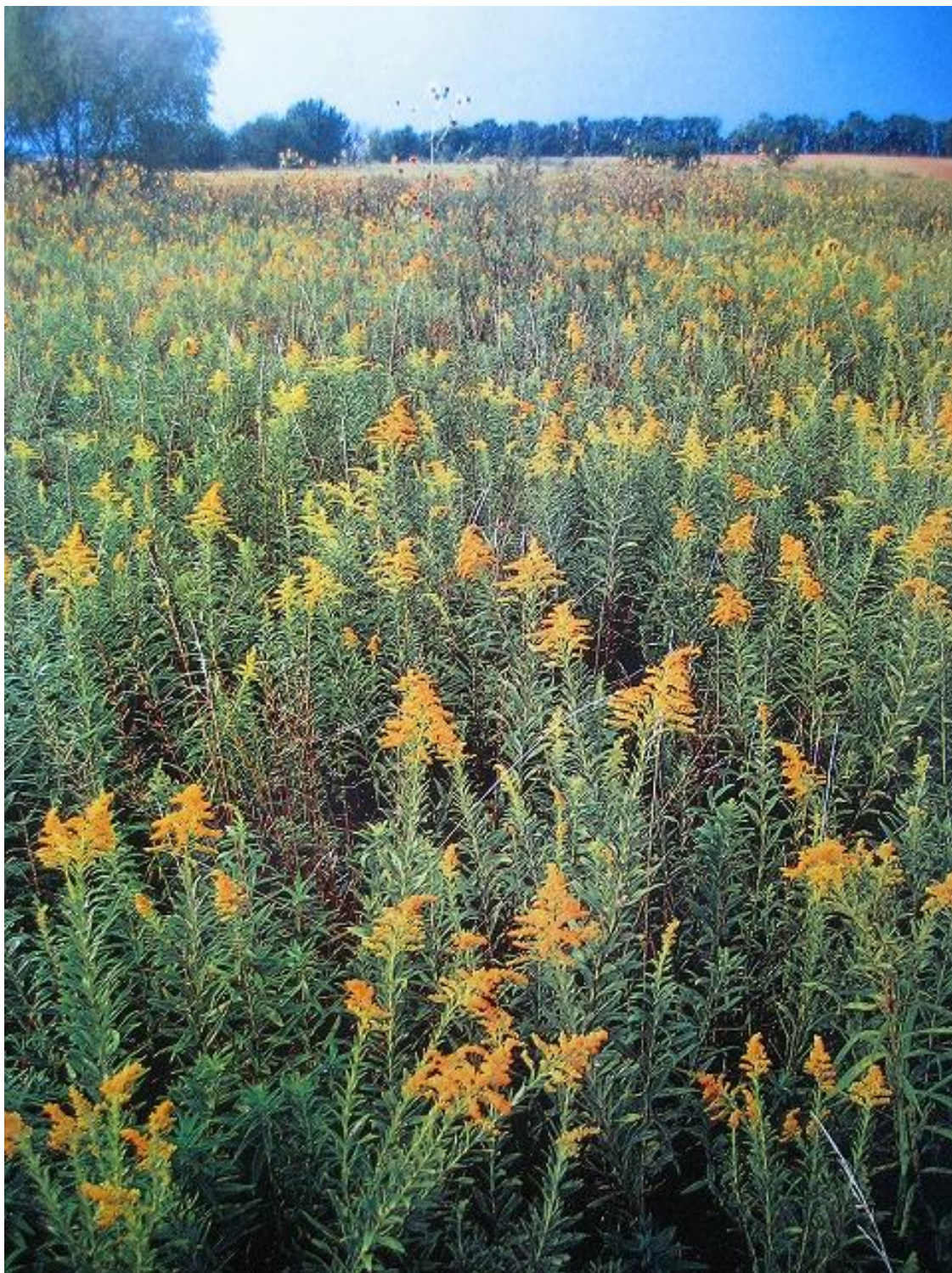
誰もが、西へのあらゆる点での出発点となった、ミズーリの **Linn** 上院議員が、オレゴンに入植する人たちに土地を与えるために証書を導入したことを知っている。イギリスは、その容認を快く思わなかったが、しかし、その証書は、遅かれ早かれ浸透していったであろう。中西部の川底に地道に生活をしていたいなかのものの集まりで、農民の家族は、自分自身に同じような問いかけをしていた。われわれは、古びた農機の幌馬車をたたんで、もっといい土地に行ったほうがいいのか？ オレゴンや、そして、**Willamette** 溪谷、この言葉は、とても素敵な響きを持っていたが、そう呼ばれている土地に行くべきではないのか？ そして、たとえ、罾猟師たちが通った道より遠くたって、あの **Marcus Whitman** 宣教師にそこに辿りつくまでのすべての行程を、ワゴンを引っ張っていかせるべきではないのではないのか？われわれがちょっと努力しさえすれば、必ず、そこまで行けるはずだ。もっとはっきりしていることは: **Whitman** は、彼の妻の **Narcissa** を連れてさえ行ったのだ。そして、彼女の郷里に送った良く知られて手紙は、熱狂的なものであったのだ。(後に分かったことだが、それは、まさに **Narcissa** 自身の自然の喜びの横溢であった。彼女は、初期西部史のなかで誰もがあってみたいと思う人たちの1人なのである。)

やっぱり、あなた方は、そこを目指さなくてはならないのです。2000 マイルもの大平原、幾つもの川を渡り、嵐や、労苦、インディアン達、それに、険しい山々を超えて行くべきなのです。この行程こそが、オレゴン街道となったのです。これは、単なる経路ではなかったのです。その体験がオレゴンの一部になったのです；それは、絶えることのない躍動、ギャンブル、骨身を削る奮闘、沢山の悲劇、そして、結末などなど。こうしたすべてのものが、草が緑になるように、当初はめぐりまわって渦を巻いていたのです。そして、決意を持った開拓者達の大群衆が大平原のはずれに集まって来たのです。すべてのものを引っさげて、彼らはオレゴン！を目指していたのです。



“私は、あの夢のような数ヶ月の中の記憶のなかで、他のすべての開拓者が、生き延びようという愛が、そして、空想のなかで、あの旅の光景をもう一度訪れることが好きなのです。”

Catherine Haun, 1840



最初の三日間は、ミズーリ川とカンザスをとおり、旧サンタ・フェ・トレイルの道筋を進む快適なものであった。この行程では、これという場所はなかったが、それでも移住者達は、自分たちの道に間違いはないと思っていた；ここは、サンタ・フェとオレゴンへの分かれ道であった。サンタ・フェに向かう運送会社の重い荷物を積んだ幌馬車は、南西に向かうのに対し、移住者達は、大陸を横断するために、真っ直ぐと西に進んでいった。

“荒涼とした未開地の大平原を超え、インディアン達以外に人の住んでない(原文のまま)土地を横断してゆく長い旅路を目指してミズーリ川を後にした。われわれが、川底を渡り、崖を上りきると、そこからの景色は、とても素晴らしいものであった！・・・素晴らしい勇気とそして、なんの後悔のため息もなく、私は子馬にまたがって・・・それから、ほんの2マイルほど進むと、情景は、太陽の光り輝く天気から猛烈な土砂降りの雨に変わった・・・”

Lydia Allen Rudd, 1852.



Lydia Rudd が言っているように、最初は、大体希望に満ち、あわただしく、そして、それまで言われているようなものであるが一しかし、その後は、しばしば、不幸となっている。

このオレゴンに向かう出発点となる場所、そして、その時期でさえも、ちょっとばかり気まぐれなものであるようだ。その道筋は、ちょうど、合衆国とオレゴン領域を繋いでいる一本の長い紐のようなものであったが、しかし、その

紐は、両端が擦り切れていたのだ。人々は、それぞれ違った場所から出発し、そして、彼らはオレゴンにたどり着くとそれぞれが散り散りばらばらになっていった。こうした旅のそれぞれが、ウィスコンシンやミズーリ、そして、イリノイ州といった地域の台所のテーブル、そこで、家族は、ろうそくの火のまわりに集まり、それからの偉大な飛躍を決意したのだが、そこを出発点として旅を始めた。

おそらく彼らは一冊のガイドブックを持っていただろう—それらの多くは、当時のベストセラーとなっていたものではないか。もし、それが、Ware の *Emigrant's Guide to California* であるなら、そこには、彼らが、自分たちのワゴンをしっかりしたものにするように、そして、予備の馬具一式と様々な部品と一緒に、少なくとも、六匹の馬を用意するように説明していた。食料;必要とするものは、コーヒー、マメ類、ベーコン(時には、一バーレルのトウモロコシの粉に中に入れて)、香辛料、小麦粉、砂糖に果物などなど。Emigrant Joel Palmer's journal、これは、よく、ガイドとして使われていたものであるで、非常によく出来たものであるが、そこには、さらに、：“こうしたものに加えて、手にして持っていけるものであれば、出来るだけのものを携えていくのがよいだろう”と、書かれていた。(実は、途中で沢山の荷物が捨てられていたことから分かるように、これは誤った認識だったのが。)

家族は、旅に悲痛なものだけではなく、彼らが、新しい生活を始めるのに必要なものすべてを選択しなければならなかった：学校で使う教科書、バターの攪拌器、農場で使う小道具、家具などなどである。こうしたもののすべてが、幌馬車に積み込まれ、そして、

大陸を横断していった。なんと、夢見る者達のなんとたくましいことか！

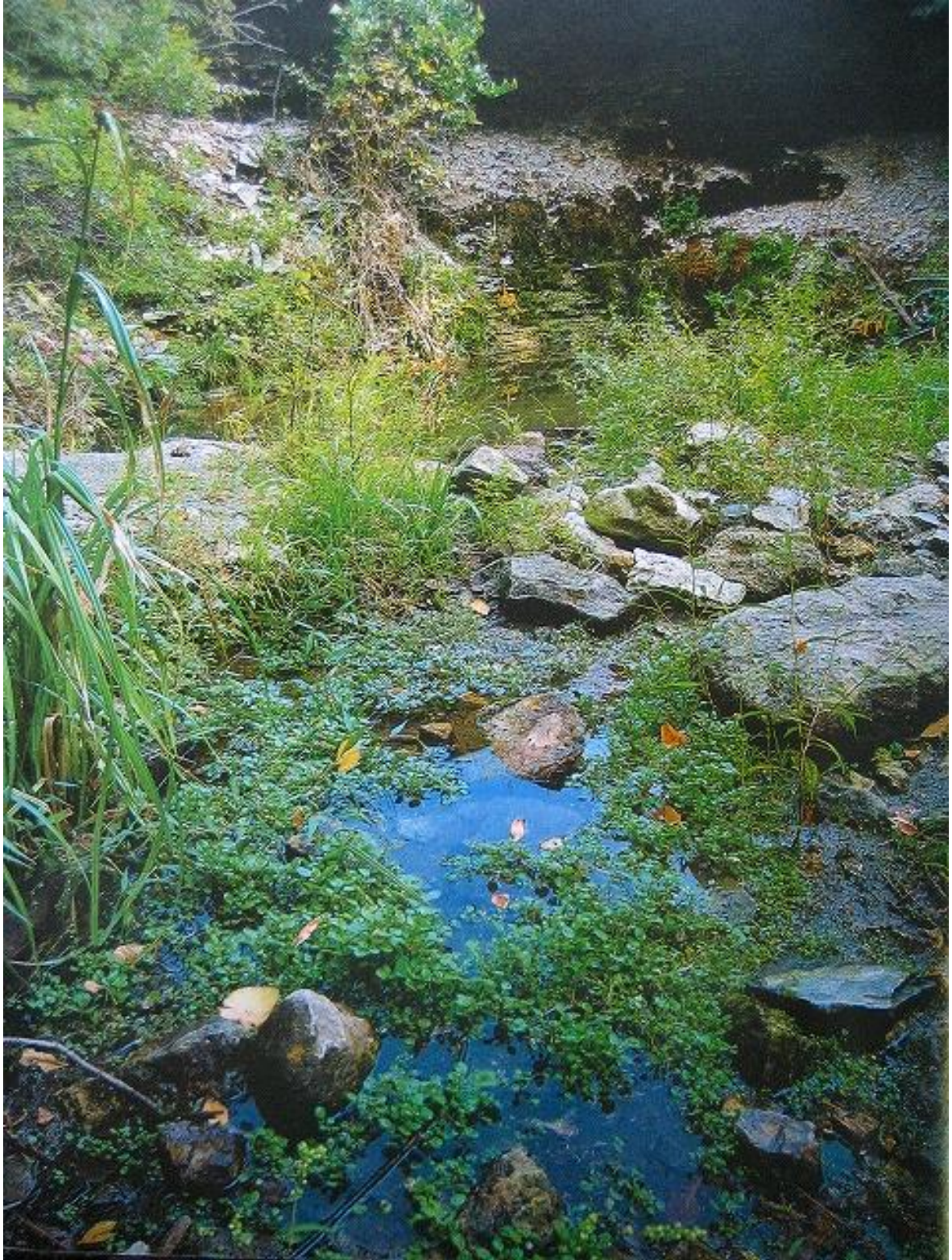
彼らは、別れの言葉を述べ、それぞれの農場、そして、村を跡にし、他の移住者達と道々、或いは、波止場で合流し、大平原のはずれに集合した。彼らは、“勢いよく出発”のは、自分たちの一番都合のよいところであったが、しかし、後に、幌馬車隊が、様々な準備をするのに、都合の良い場所が次第に絞られていった。よく移住者達は、セント・ルイスで蒸気船の乗船券を購入し、その偉大なるミズーリ川が自分たちの目指す方角にいけるところまで遡っていった。そして、やがて彼らは荷物を降ろすと、今度は、船に積んでいた幌馬車に車輪を取り付け、これから必要と考えられるものなど、いよいよ最後の購入と、修繕をした。

ミズーリのインデペンデンスは、大平原への旅の出発点として発達した川岸にできた波止場の一つであった。数年の間、メキシコと取引をしているサンタ・フェの伐採した材木を運ぶ馬車が、このインデペンデンスから出発しており、1840 年台のはじめには、人口が 500 人ほどの大変にぎやかな町となった。町には、馬具をそろえた店、車大工、そして、鉄砲鍛冶など、ここで最後のたびの準備をする人たちのための店が開かれていた。多分、ここで、もっと大切であったのは、ここにはいつも、もっと西の地域に住んでいた人間がうろついていたこと、かれらは、よそ者が立った一杯の酒をおごるなら、只で様々な情報を提供してくれたのだ。最も、そうした話しのなかで、本当の情報とほら話とを区別するのは、聞き手の側の責任であったのだが。

彼らは、春の初めに若葉が吹くころ、これは、現代の人に不可欠なガソリンスタンドと同じように、旅人にも、そして、馬にとっても必要なものであったが、この時期に大平原のはずれに集まってきた。1841 年には、まだ、それはほんの少しばかりの流れのようなものだったが、1842 年には、一つの流れになり、そして、1843 年には、洪水のごとく人々がうごめき出していた。オレゴンへの道は開かれたのだ。



最初に渡らなければならない大きな川は、今日の **Topeka** の近くのカンザス川であった。ここは、沢山の人たちが彼ら自身でいかだを作ったところだが、後に、ただでフェリーが移住者達を運ぶようになった。



Alcove Spring は、オレゴン街道の前半部でのとても素晴らしい場所だ。澄み切った水が、10 フートの高さで流れ落ち、旅人に喜びと安堵を与えていた。しかし、直ぐ近くには、忍耐を強いる Big Blue River の危険な渡河をしなければならなかった。当初、そこは、“Independence Ford” と増水している時には、幌馬車隊は足止めされ、いかだを作らなければならなかった。

“われわれのキャンプから 3/4 マイルほど行ったところで、まるで、今、氷が融けたばかりのような冷たく、綺麗な水の湧き出る大きな泉を見つけた。それは、岩の割れ目から勢いよく流れ出てきていた・・・湧き出る場所は瑞々しく茂る小枝が沢山とその上を覆っていた・・・われわれは、その泉に ‘Alcove Spring’ と名づけた”

Edwin Bryant, 1846, 不幸に見舞われた Donner Party の一員



最初の数日間は、移住者達と彼らの農業用の幌馬車は、伐採した材木を怪物のように積んだ荷車が、ぎしぎし音を立ててサンタ・フェのほうに向かう地点まで、この貨物と荷車隊と同じ道を辿っていた。毎年、メキシコ相手に商売をしているサンタ・フェ街道を走らせている荷車を操っている、その専門家の御者達と違い、オレゴンの街道を行く幌馬車隊は、見るからにこれが彼

らの最初で、かつ、唯一回の旅であった。それはあたかも、道に迷った動物達の回転しているようなものであり、ただ、やたらに“手綱を引っ張っている”だけであり、そして、道具が壊れてばかりいた集団であったが、それでも、このよそ者達は、次第に落ち着きを取り戻していた。彼らは、自分たちが泊まるときには直ぐに、シチュー用の圧鍋を何処に置いたらよいかを学習したし、どうすれば、雨が凌げるように巻き布団をセットできるかを知るようになった。

幌馬車隊のリーダーは、最初の時点で選出されたのであるが、彼は、自分たちが決断すべき方向がどちらにあるかを感じ取っていた。何処にわれわれはキャンプを張ればよいのか？ 十分な薪は手に入るのか？（こうした平地や森の地帯では、薪や水は十分に手に入れることができた；しかし、あとで、子供達は、薪の代わりに燃やすものとして“バッファローの糞”を集めなければならなかったということを思い出すだろう。）われわれは、今晚のうちにこの川を渡るべきなのか、それとも、明日の朝まで待ったほうがよいのか？（夜のうちにそれはやりなさい。水は、次の日の朝になると、川が増水しているかも知れないし、さらに、荷役用の動物達は、興奮して落ち着きがなく、扱いが難しくなるのだから）幌馬車の弱ったところとか、壊れた道具はどんどん捨てられ、一国でも早く、よいものを見つけることが先であった。

野外で眠ることは、最初は冒険のようなもので、夜は満点の星の下でオレゴンのことを話して過ごした。しかし、後になると、疲労で、彼らは横になるとたちまちのうち

に寝入ってしまい、そして、巻き布団は、家で寝ているのと同じように一当たり前の感覚に変わった。

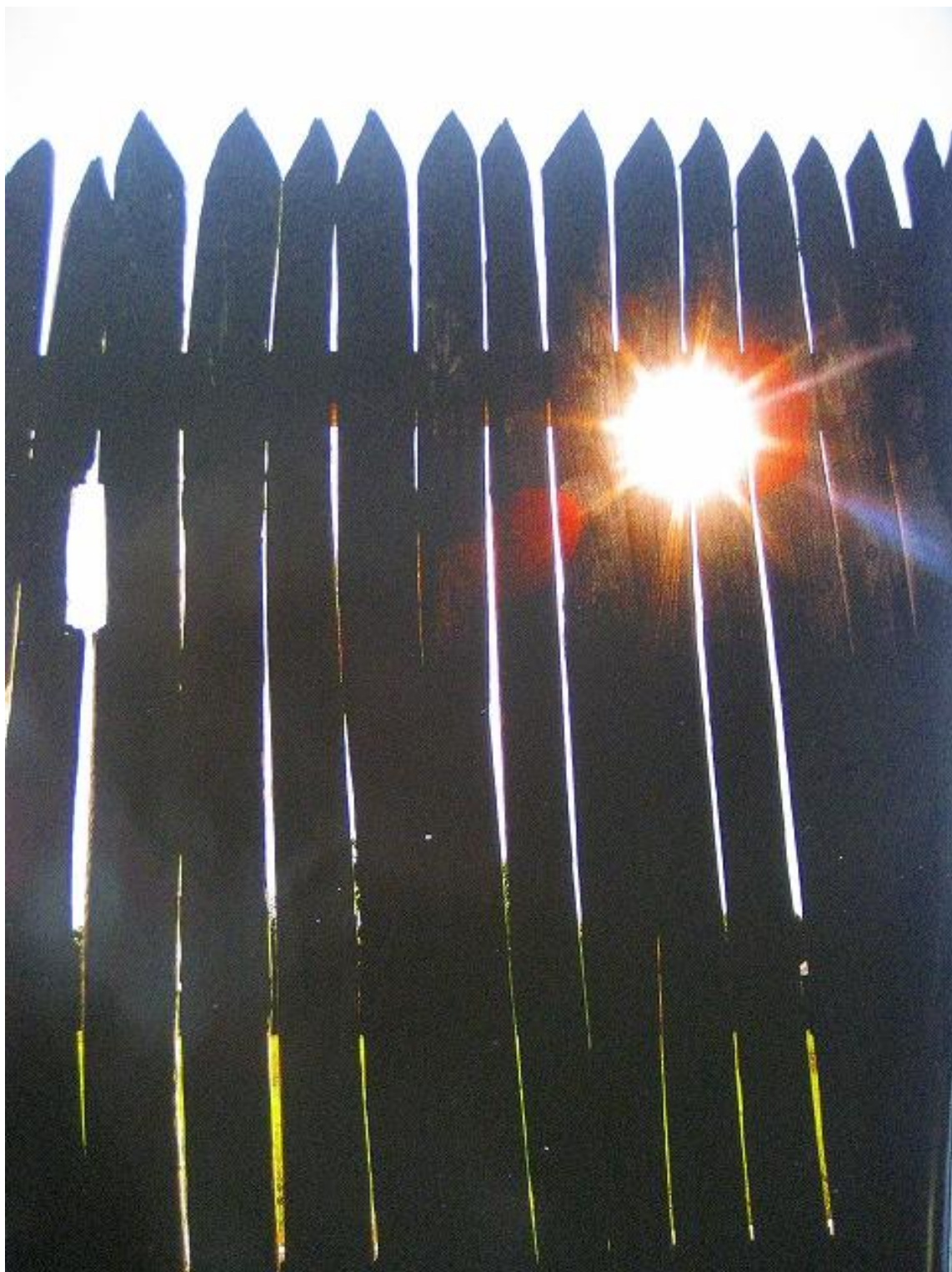
あるところに豊富な水があった。Alcove Spring の澄み切った、冷たい水は素晴らしいものだったが、しかし、そのすぐあとには、Big Blue River を渡らなければならないという大変に危険が差し迫っていた。1846 年に Donner Party がここに到着したときには、川は、気品が高く、そして、春の草花は満開であった。そして、ほんの二・三ヶ月の間に、彼らは、山の中に閉じ込めてしまうような猛烈な嵐に見舞われ、飢餓に陥り、死者がでて、ついには、人肉を食べるという非道に陥った、西部への移住の最も悲惨な幌馬車隊となったのだ。

Alcove Spring に居たときにはその前兆があった。James Reed、彼は幌馬車隊の一員であったが、Patty という八歳の子供も含め、子供達と妻とともにさらに義理の母の Sarah Keyes をつれて旅をしていた。この Keyes 婆さんは、男達が川を渡るためにいかだを組み立てているときに死んだ。そこで、彼女をここに埋葬し、彼女の髪の毛だけを切り取り、これを持って旅をした。意外なことに、この髪の毛は、渡河にも、そして、山々での厳しい試練にも生き延びた。なんと、山の中で立ち往生しているこの幌馬車隊のところに救助隊が到達し、雪に埋もれた洞穴から助け出したときに、その髪の毛は、

Patty の手にしっかりと握られていたのである。



Donner Partyとともに旅をしたおばあさんの Sarah Keyes の記念碑。彼女は、1846 年の 5 月の終わりに、幌馬車隊が Big Blue River を渡る準備をしているときに亡くなり、ここに埋葬された：しかし、実際の場所は知られていない。



Platte River に到着すると、旅人は、Fort Kearny を見つけた。ここは、オレゴン街道の安全を確保するために最初に作られた砦であった。軍隊の任務は、移住者達をインディアン達から守るというものであったが、そうした問題は殆どなかった。もっと重要なのは、日常生活品や、修繕屋の仕事であった。この街道がにぎやかになると、直ぐに、民間の店も見られるようになったが、結局、Fort Kearny は殖民地となったが、それときから、(“e” の一文字が付け加えられて) Fort Kearney の町となった。

“ちょうど今、一時です；角笛が響いて、キャラバンは、また、西への旅を始めるところです・・・明らかに眠りが男達や動物達を襲ってきています；御者は、彼らの御者台で居眠りをしていますし、また、横を歩いていてさえもです。そして、隊を追い立てる言葉が、女達の優しい歌声や子供たちの吹く高い笛の音の中で、ゆっくりとだらだら荷物を引いている牛たちに向けられているのです・・・”

Jesse Applegate, 1843,



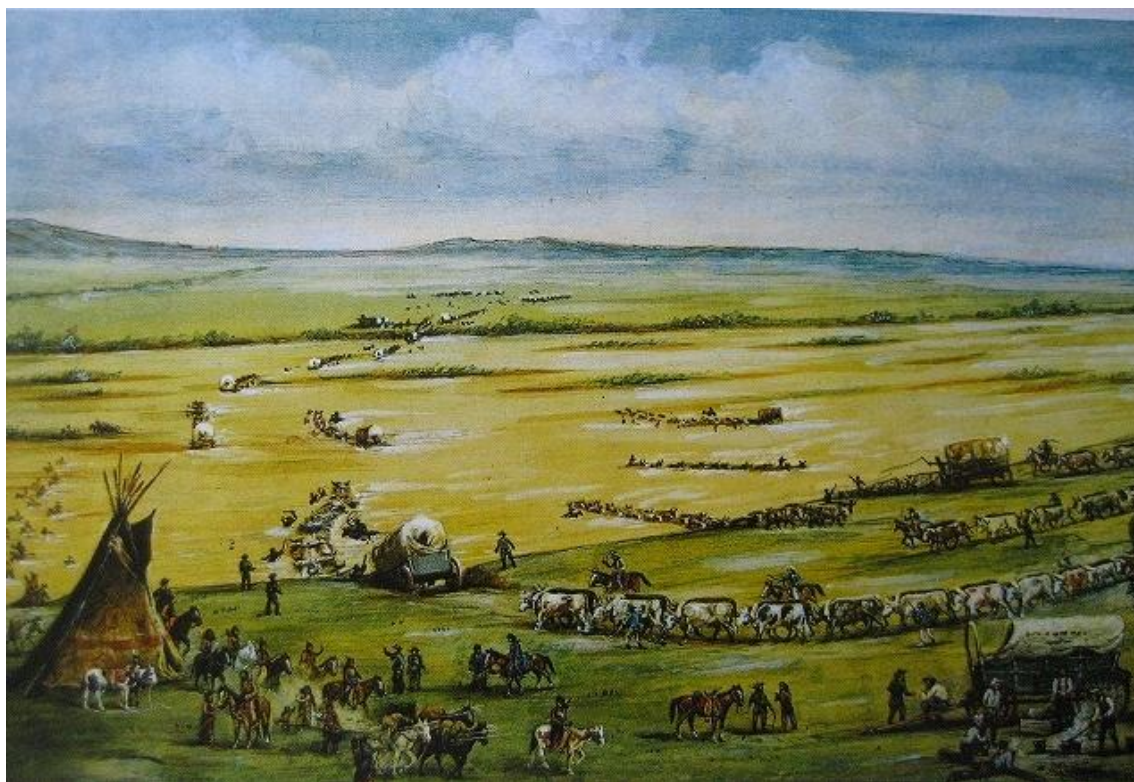
一行は、Little Blue のところまでやってきましたが、ここは渡河をする必要がありませんでした。この穏やかな川は、北西の方角から流れていました。そして、ネブラスカに向かい谷のなかに注いでいたのです。ここは、まだ、旅の初期の段階でしたし、幌馬車には、未だ一杯の家族の貴重品が積み込まれていました。後にこうしたものはことごとく捨てられたのですが、しかし、この時には、幌馬車には、訓練された雄牛たちが Little Blue に沿って引っ張っていくのにだらだらとするほど、沢山の重い荷物でした。一行が、沢山の川筋の間の高く、乾いた草の茂みに到達した時には、移住者達は、実に広大に広がる大平原を始めて経験することになりました。それは、やがて来る数週間が、すべてを圧倒し、飽き飽きするほどの空間と広がりという感じのものでした。

Little Blue が、ネブラスカにいたる彼らのルートであるように、P'latte は、彼らが山に入っていくその道しるべのようなものだったのでしょうか。“Platte” と言うのは、“平らな” と言う意味で、また、実にそのとおりだったのです：大地は、旅人達が遠くの緑のリボンの筋になったようなものを見渡せる限り遠くまで広がっていたし、その中間には、だらだらとしたうねりのようなものとか、狭い谷が連なっていたのです・そして、1848 年には、旅人達は、ここで、Fort Kearny を見ることになりました。

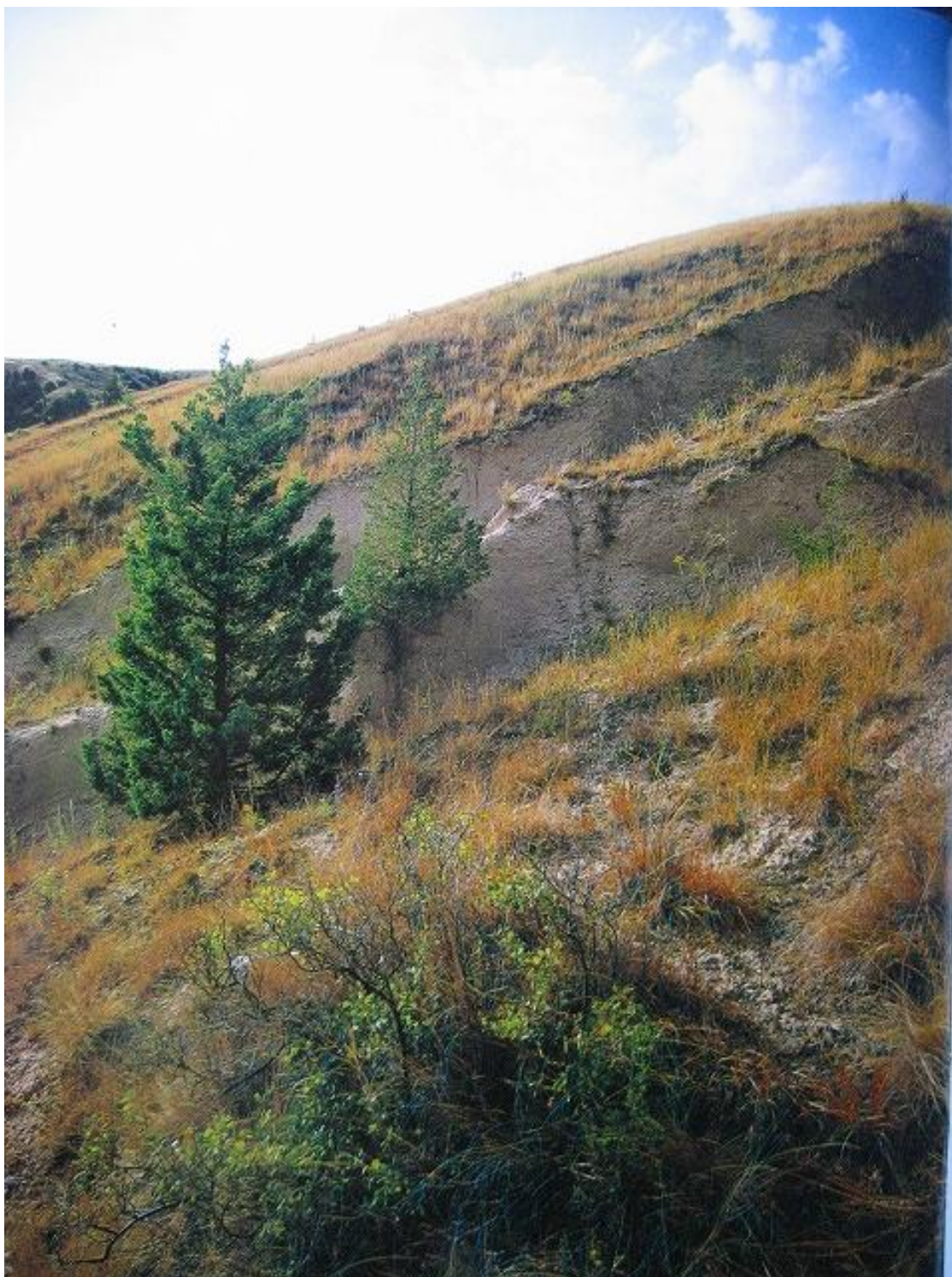
Fort Kearny は、オレゴン街道の移り変わりの一つでもありました。ずっとずっと沢山のアメリカ人が西に向かって来るようになると、彼を保護するための圧力が議会を動かししました。そして、Fort Kearny が移住者達の幌馬車隊を助けるために設立されたのでした。そして、ここ、Platte の土手の上こそ、まさにその場所でした。こうして、ついに、街道の幾つもの道筋が、西に向かう自然ルートとしてここで一緒になったというわけです。アイオワとかウィスコンシンを横切ってきた幌馬車が、移住者達の流れとしてここに集まり、そして、キャンプファイヤーのまわりで、北からやってきた者達の早口の話しと、南から来た男達のだらだらとした話とごちゃ混ぜになった会話、西に向かうすべてのアメリカ人

の話を聞いていました。Fort Kearny の警備隊は、インディアン達に対する安全を確実なものにしました、(この砦に関係するような顕著な諍いはなかったのですが) しかし、もっと重要なことは、軍隊が、移住者達に非常時の価格で生活用品を販売することが正式に認められたことでした。

Fort Kearny を出ると、広く、そして、川の左側は砂道になり、ここは“Great Platte River Road”と呼ばれたのですが、開拓者達は、ここから 100 マイル以上も重い足取りでとぼとぼと歩く旅をしたのです。コレラが流行する数年前に、ここは、だるくゆっくりと進む場所だったに違いありませんが、しかし、また、ここで彼らは、とてつもなく大きな雹の嵐にも見舞われたのです。彼らは、二つの支流がちょうど、“Y” の字のような形で合流している地点を通り、その後、South Platte のほうにあがっていき、浅瀬の場所にやってきました。そこでは、ちょっとした苦難ですんだのです—川幅は、1 マイル以上もあったのです！—が、その代わり、深さは、1 フートか 2 フート程度だったのです。誰かが、今でもネブラスカで聞くことができますが、こんなことを言い出しました。“川が逆流しているよ。”



South Platte の横断： “川幅が 1 マイル、深さは、1 フートほど。” William H. Jackson の描いたもの。Jackson は、後に素晴らしい探検写真家となったが、彼は、1866 年にここを横断した幌馬車隊に居たときには、御者として働いていた。



オレゴン街道が、North Platte の溪谷に下っていく Windlass Hill には、侵食がわだちをより深いものにしていた。そのおかげで、沢山の幌馬車がここで破壊されてしまった。そして、その幌馬車が修理できないときには、移住者達は窮地に落ち込まれ、通常は、無念の放棄をしたあと、自分たちの生活必需品だけをもっていけるように、別の荷車を見つけようと必死になった。場合によっては破損した馬車を一輪車に仕立て直すこともできたし、男達は一度ならず、何度もこの一輪車づくりをし、そして、西へ西へと旅を続けた。

“... 擦れたロープが切れてしまい、幌馬車が滑り落ちた、と言うより、もっと的確には馬車を引いている馬の上に倒れこみ、覆いかぶさってその中の一匹を殺してしまった。そして、御者の首の骨を痛め、かなりひどい傷を負わせてしまった；馬車の先が壊れて、積荷が急な坂道に散らばってしまった。それでも、幌馬車は奇跡的に動けなくなるほどの損傷はなく、うまいこと、また、荷を積み込むことができ、たいした時間を取ることもなく、また前進することができた。さらにちょっとゆるやかな下り坂が二つほどあり、やがて、われわれは快適な林になった谷にたどり着いた。”

William Kelly, 1849, Windlass Hill



大分なれたと感じられるようになると、開拓者達は乾燥した、細かく分断する溝があちこちにある平らな大地を North Platte に向かって、ここで彼らは、またしても彼らを川から遠ざけている険しい崖のあることをしるのだが、ここに向かって横断していった。故郷では馬車の取り扱いになれていた農民達でさえも、自分たちの荷馬車がうまくいくように大変な労苦をしなければならなかった。オレゴン街道とい

うのは、まさしく、古い時代の農民達の生活手段から、あたらしい studebakers への、馬車の取り扱いの見世物行進、そのものであった。ガイドブックに書かれていることは、ちょうど、今の時代のドライバーが自動車の広告見ているようにとても身近に感じられるものばかりだった。“柱は、猟犬が入ってこられるような継ぎ目がなくてははいけないとか・・・御者台とか、そのつなぎ目は、取り外しが出来たり、動くようになっていなければいけない・・・などなど。”

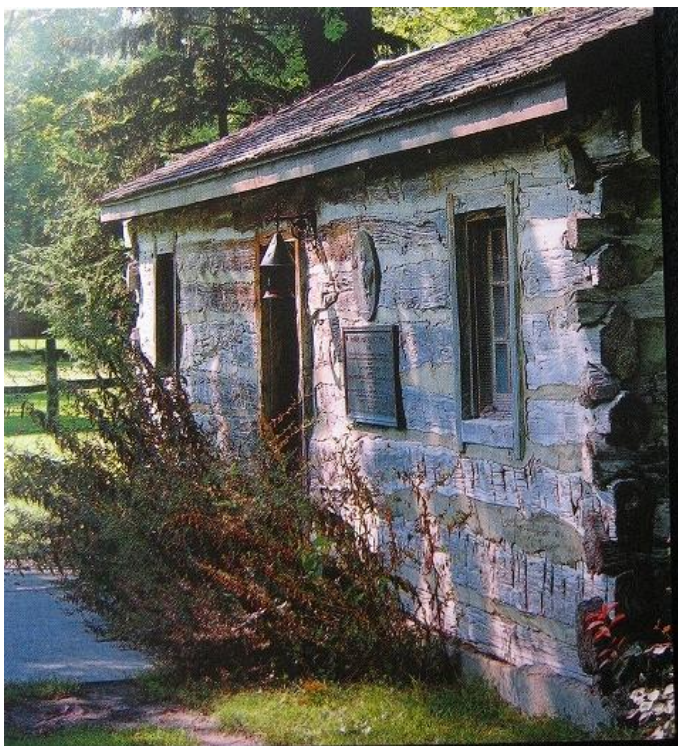
事実、時々、道路の状態はとても悪かった。Windlass Hill では、沢山の幌馬車が上で述べられているようになった。しかし、かといって、また東部に戻る道も決して良くはなかった。明らかに、どの満ちもみなどろどろで、オレゴン街道といえるものではなかった。沢山の雑誌の最初には、街道の道はどんなにか素晴らしいかと言うことで始まっていて、何処でも、“オレゴンに続く道”と呼ばれていたのだが・・・。

現実的な問題は非常に感想した気候であった。彼らがミズーリを出発して以来、基本的には高原を旅していたのであり、ここでは、空気が薄く、乾燥していて、これが御者達の唇をからからに乾燥させていた。そして、木製の幌馬車は収縮し、いたるところに割れ目

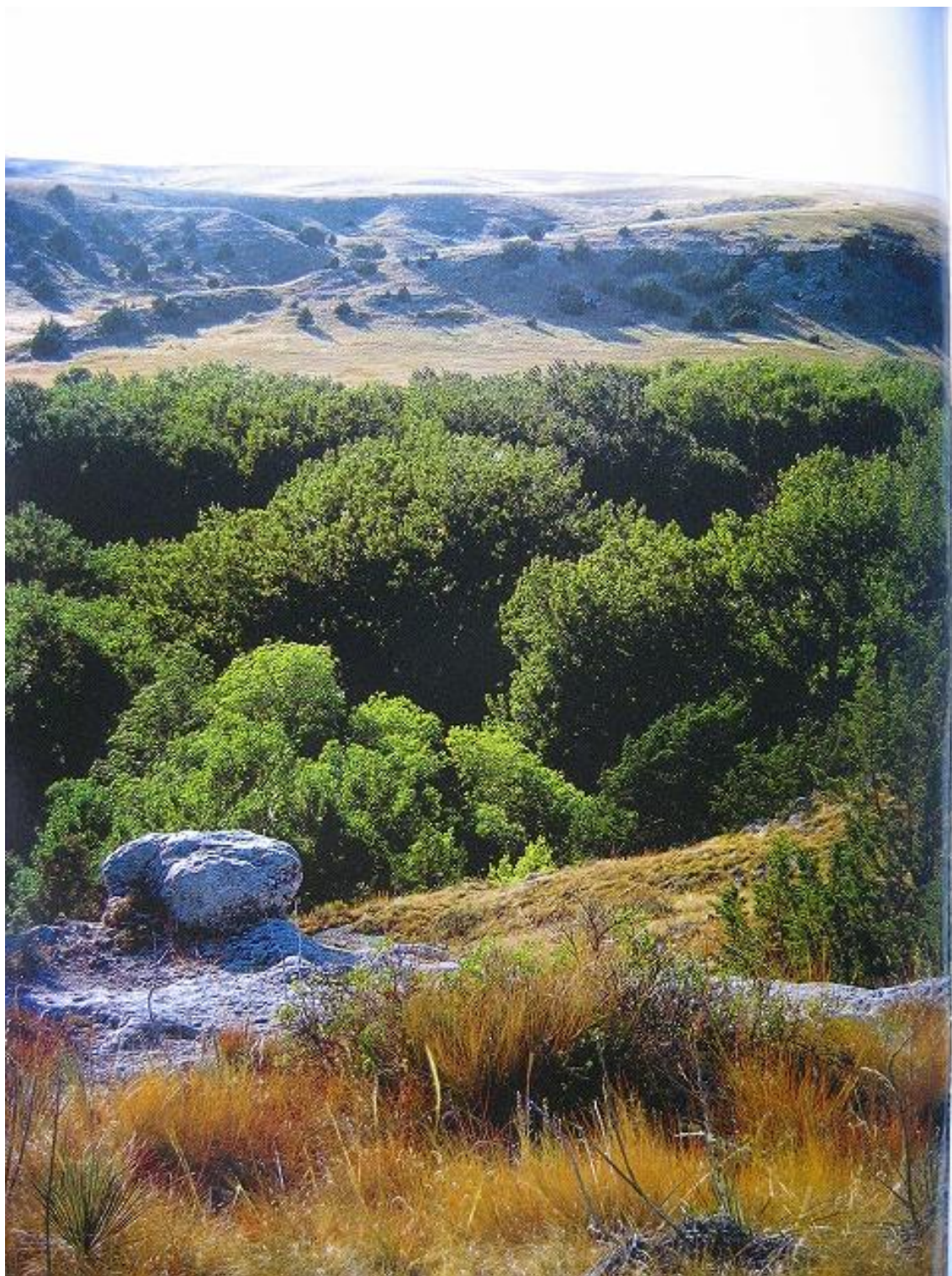
ができ始めていたのだ。

幌馬車の車輪は、“外輪”を支えるように木製のスポークが放射線状に出ていて、これが車輪を丸くしていた。さらに、それに鉄製の外周縁が取り付けられていたのだ。決まった点検作業は、その外周縁が緩んでいないかを調べるというものであった。楔のようなもので一時的に補修することは出来たが、しかし、しっかりと修繕するときには、（多分、積荷は降ろしてから）幌馬車を押し上げ、そして、車輪を取り外しておこなった。まず、鉄製の外周縁を取り外し、木で出来た車輪を（できれば）一晩中、小川につけておき、もう一度、膨潤させるのだ。場合によっては、元に戻して取り付けられるように、鉄の外枠を真っ赤に焼くのだ。こうして、膨張した鉄の外枠を木製の車輪にはめ込み、そして、車輪全体を水のなかにつけて、激しく蒸気をたてると、鉄の外周縁が収縮して、がっちりと車輪に食い込むというものであった。この仕事は非常に繊細なもので、鉄の外周縁を冷ましすぎると入らないし、また、逆、熱しすぎると今度は、車輪を焦げ付かせてしまうという問題があった。

よく、車輪が岩や根株にあたって車軸が折れることがあったが、こうして“ぶつつけた”という言葉が生まれたほどである。ポプラの木で代わりがうまく出来ないときには、旅人達は、硬い木の予備の車軸を携えていった。馬の引き具が壊れたり、リベットが外れて落ちたり、横板が剥がれ落ちたり、嵐で幌が破れたりなど日常茶飯事であった。Windlass Hill で、彼らが、幌馬車がうまく下るように滑車を取り付けたりしたという話がある。もっと、仕切りに行われたのは、ブレーキを取り付けたり、ひっくり返られないように車輪に鎖を結んだり、小さな丸太を切ってきて、これを“引っ張る”ために幌馬車の後ろに取り付け、幌馬車をゆっくりと滑らしてゆくように、自分たちの将来の生活のためにロープを懸命に引っ張っていた。こうしたことが彼らの毎日の労働となっていったのだ。



街道は当初はそれほど混んではいなかった。この建物は、ネブラスカの Gothenburg と言うところに建っているものであるが、ここは、最初は、ポニーエクスプレスのステーションであったが、その後、幌馬車の停車場になり、そして、そのあとは牧場の建物になった。



オレゴン街道が、North Platte の溪谷に下っていく Windlass Hill には、侵食がわだちをより深いものにしていて。そのおかげで、沢山の幌馬車がここで破壊されてしまった。そして、その幌馬車が修理できないときには、移住者達は窮地に落ち込まれ、通常は、無念の放棄をしたあと、自分たちの生活必需品だけをもっていけるように、別の荷車を見つけようと必死になった。場合によっては破損した馬車を一輪車に仕立て直すこともできたし、男達は一度ならず、何度もこの一輪車づくりをし、そして、西へ西へと旅を続けた。

“この日の夕方は、われわれのキャンプはこれまでの中でも一番楽しいひと時となった。われわれの回りに数マイルも広がっている大平原は、600頭とも700頭とも言えるほどの牛のグループがいる・・・そして、数え切れないほどの白いテントと馬車の幌があり、その前にはキャンプファイヤーが煌々とたかれ、まるで、田舎の村のようである；その回りで、男達も、女達も、そして、子供達もみな、語らい、遊びを楽しみ、歌を歌っている・・・・。私がこうして記録を残しているあいだ、キャンプの下の方の端にいるグループは、賛美歌や聖歌を熱心に歌っている。”

不詳の移住者



いらいら させるような Windlass Hill の坂を下っていくと、そこは Ash Hollow と呼ばれているとても素晴らしい場所に着いた。この広い台地、ここは、街道が North Platte に到達したという場所なのだが、40年代の初めの頃に、幌馬車隊がこの地に入っていくというのは、まさにエデンの園に到達したということであった。冷たくて、沢山の泉が湧いており、日陰を作ってくれたり、或いは、薪になるような木があちこちに生えていて――

これは、まさに移住者達が、太陽がてりつける何の日陰もない大平原を、幌馬車の脇でキーキーしむ音を聞きながらとぼとぼ歩いているときに夢見たものであった。

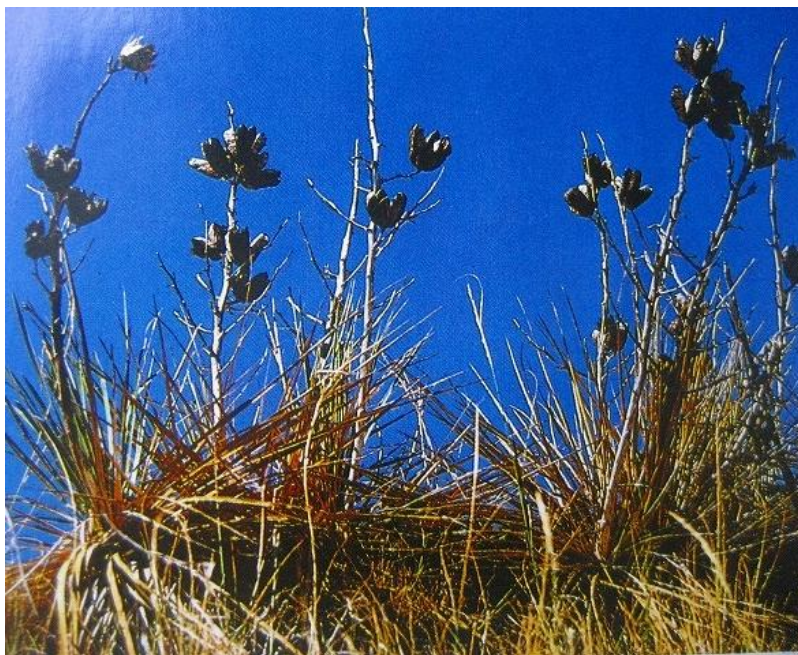
たまに、何の事故や馬車のトラブルのないような、長い昼下がりには、時間と動きは、まるで止まっているようであった。一步一步の行進は、何の変化もなく、；丸くなった草原の草のくぼみ、照りける太陽はじっとして、何の動きもなかった。そのあと、こうして、Ash Hollow に辿り着き、ここには、日陰があり、尽きることのない水があった。多くの幌馬車隊は、ここで数日間の滞在をした。勿論、その間に必要があれば、Windlass Hill を越える間にこうむった破損箇所を修繕した。他の者達は休息をとり、そして、選択をし、移動の間にたまった沢山の仕事を処理していた。

Ash Hollow は、とても素晴らしいキャンプ地で、街道に沢山の人が居たときには、大変混んでいたに違いない。あまりの混みようで、Bennett Clark が、“キャンプする場所が全く見つからず、断念する” ほどだったのは、1849年のことである。夜になるとこの谷間には、数百ものキャンプファイヤーが炊かれていた。1850年には、George Read、彼は、移住するパーティの識者であった医者であるが、こんな風に報告していた。

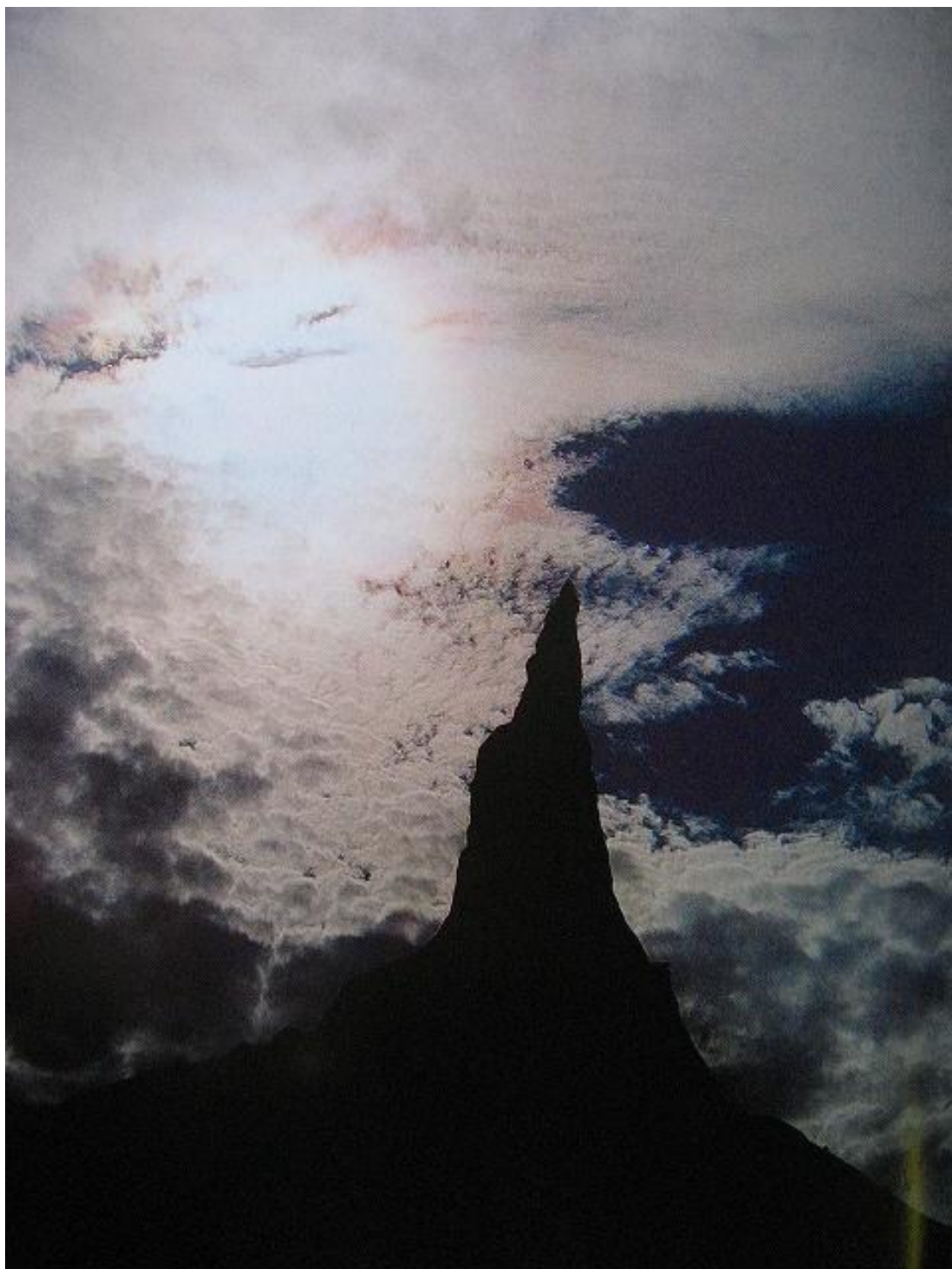
“私達の周りは何処をみても移住者のキャンプだらけだ。また、なかには、インディアンもキャンプをしていたが、彼らは、この西部の地域の森林地帯や草原で生活している住人達で、その数は、50人くらい居たのではないか”と。インディアン達は、移住者達から物乞いをしたり、物々交換のためにここに来ていたが、彼らは、こうした、“移動する集団でできた街”に頼っていかざるを得ないような状態だった。

沢山の日誌は、壊れたケースの中から取り出したフィドラーの演奏、キャンプファイヤーのまわりで踊りまわる夜のことを記録に残している。幌馬車の陰では、インディアナから来た百姓が、アーカンソーから来た屠殺人と賭けをして、トランプのゲームを楽しんでおり、；彼らは、オレゴンでは隣同士になるのであろうが。女達は、料理の献立の情報を交換し、シチュウ用の深鍋の扱いの秘密を会得したりしていた；男達は、小道具について話しをしたり、この旅には、牛のほうがいいのか、それとも馬のほうが有利か、或いは、オレゴンのことについて彼らが聞いたことなどを議論していた。

彼らは、様々の年の人、そして、いろいろな環境の人、すべからく一緒に旅を続ける仲間たちであり、時に旅の途中でロマンスが花咲いても、それは、決してびっくりするようなことではなかった。なかには、両親が賛成せずに、ある母親の話しのなかに、厳しい書き出しになっているものもあるが；しかし、時に、こうしたロマンスが実を結んだこともあった。そして、そんな時には、結婚式には、伝統的な“なべ釜を激しくたたいてお祝いをする”ような催しが為された。1850年に、Rebecca Woodson がこんな記録を残していた。“David Parker と Catherine Hickman が結婚した・・・どんな騒ぎをするかで、まず気をつけることは、この集団の男達と女達がとらえる時であった・・・それから、馬車を大平原に半マイル送り出した。そして、大騒ぎが始まった！ 鉄砲で缶を射撃する音ががんと鳴り響き、といった具合である。その馬鹿騒ぎは、その幸せなカップルを、次の日に、大喝采と祝福の真っ最中のキャンプまで戻って来る、その朝まで静かに休ませてあげようと大草原の中に残して、それぞれの居場所に戻っていく真夜中まで続いた。”



Yuccaの花は、インディアン達にとっては、花のすべてがいろいろな用途に役に立つ、材料の貯蔵庫のようなものであった。一方、開拓者達にとっては、この砂漠の植物は、高原台地の不毛の象徴でもあった。



North Platte River の辺にある Chimney Rock は、500 フートの高さがあり、移住者達はそんなものを自分たちの故郷で見ることはなかったから、これは様々な印象を与えた：“避雷針—ジャガイモの丘—煙突—筒—ベーコンの丘”といった具合である。しかし、山男の **Jim Bridger** は、それを“見た目はお前さんの指ほどもない、古く乾燥した古株のようなものさ”と、実にうまい表現をしていた。

“・・・ミズーリとは全く異なる地域を越えて旅を続け、・・・私達は、**ChimneyRock** に到着しました・・・ここは、私達が、ただ唯一説明できるなら、それは、ちょうど天辺に何か煙突のような形をした岩の柱が突き刺さった大きな甘藷のようにも見える、誰にとっても奇怪としか言いようのない光景です。”

S.E.Hardy, 1850



現代の読者達は、North Platte River に沿って姿をあらわした自然の造詣についてのオレゴン街道日誌に大げさに記述されたものに少なからず途方にくれている。おそらく、われわれは、ナショナルパークのすぐそばにある西部の光景のうちの、最も野生的な大自然の映画や、その中を快適に走りぬけていく自動車旅行の休暇により、うんざりとさせられている。オレゴンに行こうということ

でなくても、旅行はどんなものでも、19世紀の初頭には、大変な困難を伴っていた。大統領や巡礼者の移動のスピードは、馬の歩くペースにより制限されていたし、一日以上のたびは、竈で料理をした晚餐と、星々の下での夜を過ごすことを意味していた。

多くの移住者達は、彼らの育った農場の近くで、温和な気候と、なだらかなうねりの林のある田舎で生活をしていた。ところが、今は、彼らは、ロッキー山脈から東に広がる、事実、これらの山の岩くずの一部がゆっくりと海に向かって移動しているのであるが、そのなだらかな傾斜の広大な大平原の真っ只中に置かれているのだった。高原台地は、起伏が激しく、そして、作物のない荒涼としたところで、従って、雨が降ると、これが、一気にむき出しの大地を力強く削り取っていくのであった。

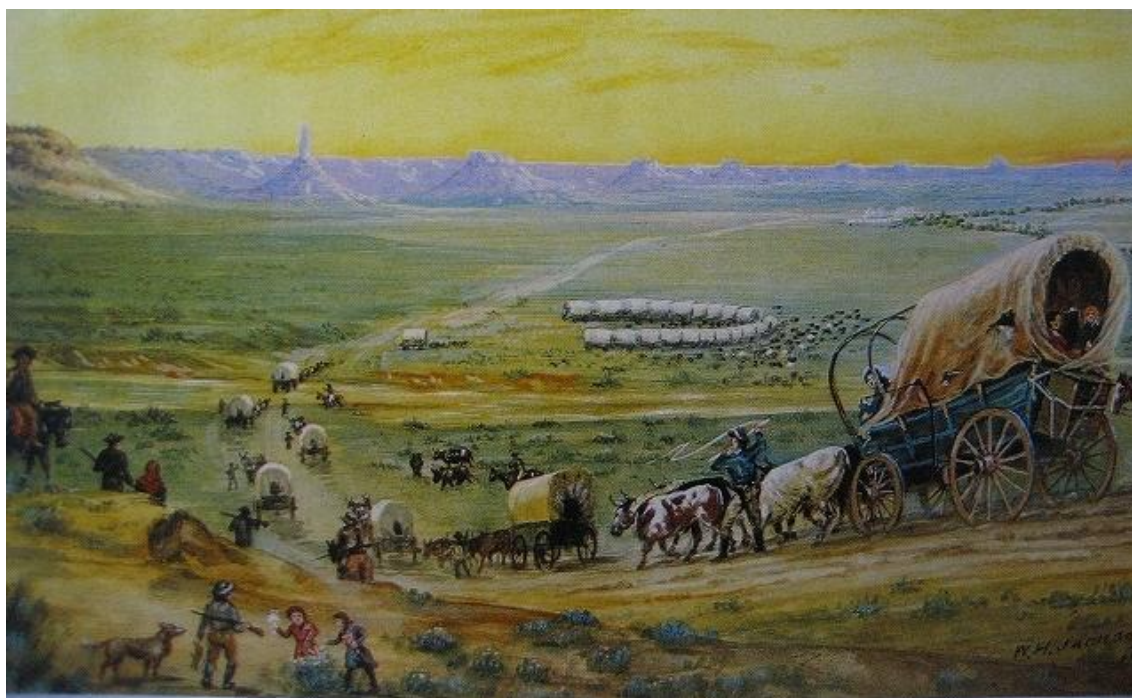
移住者達の殆どのものは、それまでこうした非常に厳しい、むき出しの自然を見たことがなかった。そして、直ぐに彼らは、こうしたものにその名前をつけた：**Chimney Rock**, **Courthouse Rock**, **Jailhouse Rock** といった具合である。こうした表現は直ぐに、ライン川の辺の城から避雷針の先まで、全域に広がって言った。それぞれの名前の由来の物語、そして、その意味するところは、いろいろであったようだ。その近くでキャンプをするようなときには、ちょっとばかり冒険心のある者達が、そうした自然の造形物の周りを探索して回った；ある移住者の報告によれば、**Chimney Rock** の麓の一周は、10,400 歩だったということであった。

こうしたドラマに付け加えて、これらの自然の造形物は、彼らがそれまで経験したこ

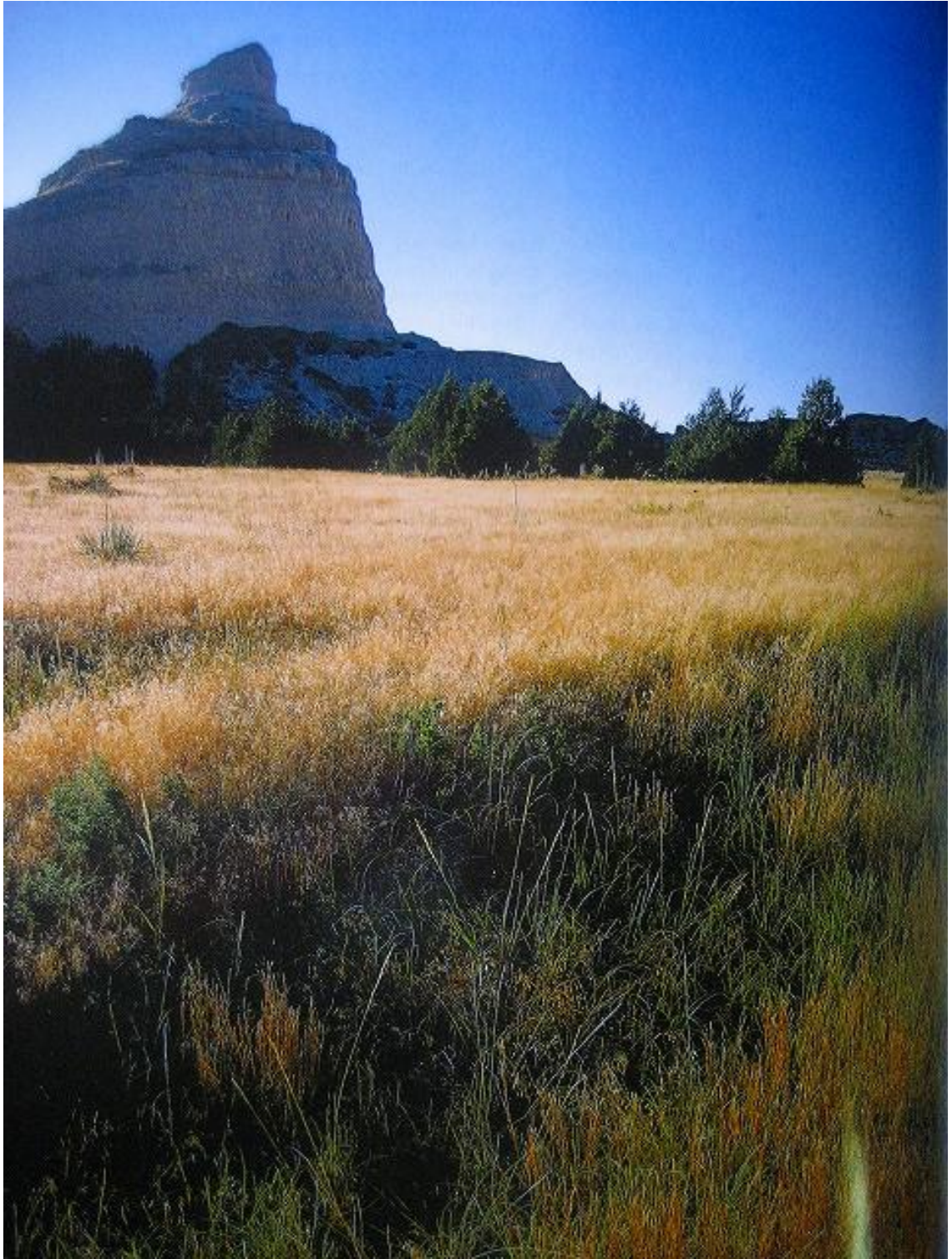
とのないような、殆どだっ広く開けた平原の上に、突如として反りあがっていた。日誌には、旅行者達は、この大平原に始めて訪れた旅人達をしばしば圧倒するような、恐れ多い感じの場所と何もない空間にしばし唖然としていた。この光景は、果てしなく広がり、そして、すべてのものは小さく縮んでいるように思われ、幌馬車はこの何処までも続く草原のうねりの中のほんの小さなしみのようなものであった。

現代の人たちが、見るとするならほんの数分であるような車で旅行するのとは異なり、Chimney Rock は、その平らなところを幌馬車が通り過ぎてゆくのに、一日、もしくは、それ以上の日数を要した。彼らは、それを、そのまえに位置する太陽とともに見て、そして、その後ろにある太陽とともに見ていた。だから、その岩を、夕陽の中に見たのだった。そして、次の日の足には、まだ、そこにその岩があったのだ。馬車の移動の速さだと、こうした自然の姿を記述する時間が十分にあったということである。

すべての移住者達が決して畏敬の念を抱いていたというわけではない。Samuel Parker 彼は、1845 年にアイオワから来たオレゴンへの旅をしていたものであるが、滑稽なことに、彼は、Chimney Rock の天辺で射撃をした。彼らは、土産にそこの意思のかけらを持っていったのだが、しかし、その先に展開するこの旅の厳しさからすると、彼らがその土産の石をオレゴンまで持っていったかどうかは疑わしい。



Chimney Rock(ちょうど左の遠方に見える)と North Platte の谷。William H. Jackson に
より描かれたもので、彼の一段が 1866 年にこの Chimney Rock の近くでキャンプを張った。
この岩は、オレゴン街道の道標となった。この絵は、今、幌馬車隊が停泊のためのイブニン
グサークルという体系にならべられてゆくところを描いたものである。



Scotts Bluff ここは、とても素晴らしい道標であり、かつ、畏れ師の山男達や開拓者達にとっても、取って置きのキャンプ地であった。その威容ともいえる光景にぎょっとされられて、画家の **Alfred J. Miller** は“軍備のそろった要塞、銃眼付きの城壁、沢山の銃眼、急な斜面の内堀と、外堀”と思った。後に、ここに取引所が設けられ、オレゴンの開拓者達に、入植が始まって時以来、現在に至るまで、便宜を図っている。

“・・・それは、私の馬を恐怖に陥れるようなバッファローたちの光景であった。そして、彼が走り出すと、その速さはもうどうしようもないほどのものであった。丘の天辺に上がると、バッファローの姿はもうそこにはなかった；彼らは、その丘とか窪みの中のごちゃごちゃしたとどこかに姿を消してしまったのだ。・・・私はどれだけ走ったことか、一体、どちらの方角に走ったのだろうか、とても信じられないことであった。”

Francis Parkman, 1846.



バッファロー！、東部から来た人たちの目には、この高原台地の黄褐色をした草は、枯れているように見えたが、しかし、それは有り余るほど茂っており、そして、体の大きな動物達のびっくりするほどの群れを養っていたのだ。オレゴン街道の初期の頃には、その数はとても数え切れないほどのものであった。信頼できる筋による報告では、こうした大群を通り抜けるのに二日を

要したとある。殆どの移住者達は、彼らが来た田舎で、食料として鹿などを撃っていた猟師の経験を持っていた。しかし、その数が違う！次から次へとだ。最初にバッファローとであったものは、まさしく、非常識な追い掛け回しをはじめた。

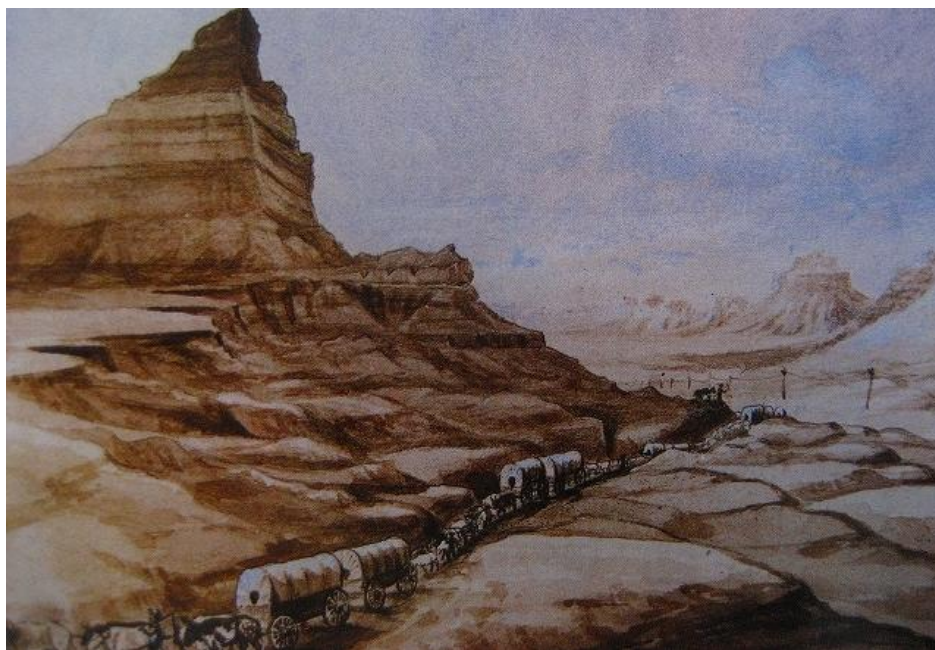
‘46年に Francis Parkman が、彼の馬がどれほどびっくりしたかを、そして、その中に入ってゆくのに、まるで狂ったように興奮していたと書いていた。Parkman 自身もそうであったようだ。そして、そのほかの新参者と同じように、その群れが走り出すと、その埃がおさまり、興奮していた馬の動きがゆっくりとなったが、Parkman 自身は、自分が進んできた道が全く分からなくなり、大草原の中で迷ってしまったのだ。彼は、間違っ、道を進んでいたのだ。そこで彼は、深くなったバッファローの通りの道跡をつけて、川まで下り、無事、自分たちのパーティの居る場所に戻ることができた。

当初は、バッファローの数はとても数え切れないほどのもので、かれらの通った跡が、草のなかにくっきりと線が引かれているようであった。しかし、毎年毎年、開拓者の数が増加していった。そして、この群れは、その轍が深くなるにつれどこかに居なくなってしまった。沢山のバッファローが猟師達により殺されたが、しかし、もっと単純に言うと、この賑わいの前から、どこかに移動してその姿を消したのだ。

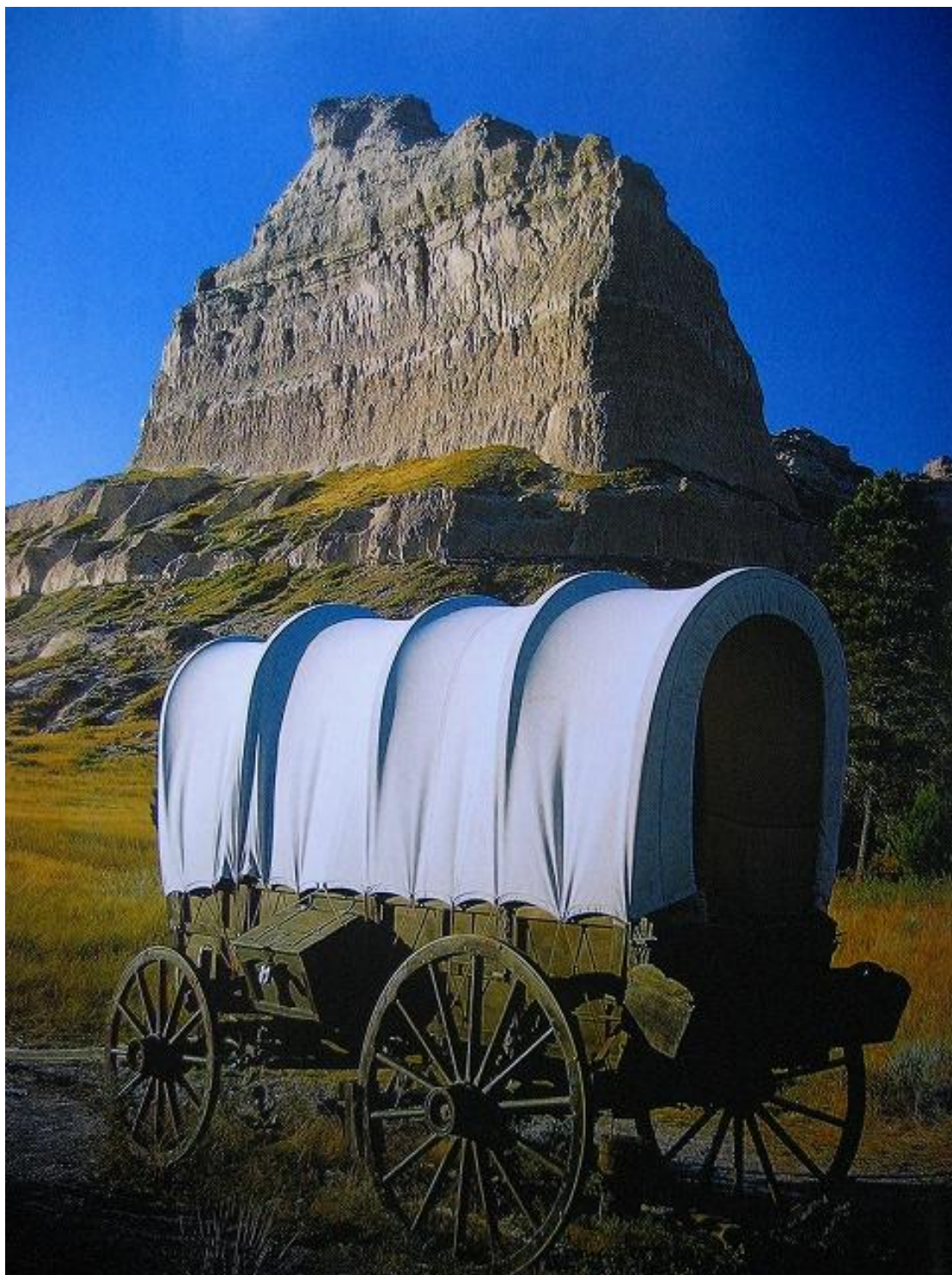
殆どの幌馬車隊は、最後には、たまにしかバッファローと遭遇しなくなったが、それ

でも、朝になると一団の牛達の群れと一緒に草を食んでいるバッファローを見たという記述もある。

Courthouse Rock と Chimney Rock を通り過ぎると、幌馬車隊は、Scotts Bluff—これらのものはみんな、North Platte に沿った丘の同じ侵食の連なりにできた、巨大な地理学的な“名残”であるが—ここに向かって這い上がっていった。Scotts Bluff は中でも一番大きなもので、ここには、沢山の川が集まってきていたが、幌馬車隊は、川から極端に離れた方角に向きを変えなければならなかった。そして、川に辿りつくには、とても危険な山の背を越えて馬車を引っ張っていかなければならなかった。開拓者達は、毛皮取引の時代にまで遡る、この崖の名前の由来についてとても心をひかれた。どうやら、Hiram Scott、彼は毛皮商人であったが、彼は、病気になり旅がこれ以上続けられなくなったときに、仲間達から見捨てられた。後に彼の遺骨がこの場所で発見されて、その後、彼の仲間達がこの崖に彼の名前をつけた。ともかくも、彼は、病気で死ぬ前に、60 マイルも旅をしていたのであった。こうして、この物語は、危険を確かに実感している移住者達の間で、いろいろな形で語り継がれてきた。Scotts Bluff は、Robidoux 峠(これは、別の毛皮商人の名前が付けられたものである)を越えて山越えをするのに非常に厳しい労働を強いた場所であったが、後には、軍が切り開いた、川の近い Mitchell 峠を通るようになった；しかし、ここには、沢山の林がありそして、水と草が豊富であった。キャンプ地としてはもってこいの場所であったのだ。



William H. Jackson が描いた Scotts Bluff と Mitchell 峠。電信の線がちょうど、Jackson が 1866 年にここを馬車で通るときに敷設され、それを遠くに見ることが出来る。Jackson は、この峠を下っていくときに、団員たちから支持を失い、かろうじて、その惨事を免れることが出来た。



Scotts Bluffにある Eagle Rock. これはオレゴン街道で使われたワゴンの一種である。西部劇の映画でお馴染みの、膨れたほろを被った、丸い形をした底の大きな幌馬車は、もっと移動が楽な Santa Fe 街道をよく使われていたもので、実際には荷物の運搬用であった。開拓者のなかには、これを中で生活できるように作り直しているものもあった。もっと頻繁に行われていたのは、家族は、テントのなかで睡眠をする一方、馬車は、旅での必需品と、オレゴンでの農場生活を始める時に必要なものを満載していた。

“・・・私のドレスの裾が、車軸のハンドルに引っかかり、私は、車輪の下に落ちてしまい、お父さんが牛を止める前に、車輪は私の上を乗り越えてしまった・・・お父さんが私を抱き上げ、・・・空中でブラブラ垂れ下がっている私の足を一目見て、急に走り出し、凄い声で絶叫した、‘かわいい娘よ、お前の足が粉々に折れてしまったよ’”

Catherine Sager, 1844.



死は、オレゴン街道では日常茶飯事であつた。日誌は、あたかも、もうこれ以上触れたくないように、次第に抑制をし、なぜか隠すような風になった。数千とは言わないまでも、数百のここで言うようなことが書かれている：“私達は、今日、オハイオから来たという男の新しい墓の横を通り過ぎた。はた、この朝、死んだ妻を埋葬して、戻るところだという男にも出会った。彼女は、はしかで死んだとのことだった。

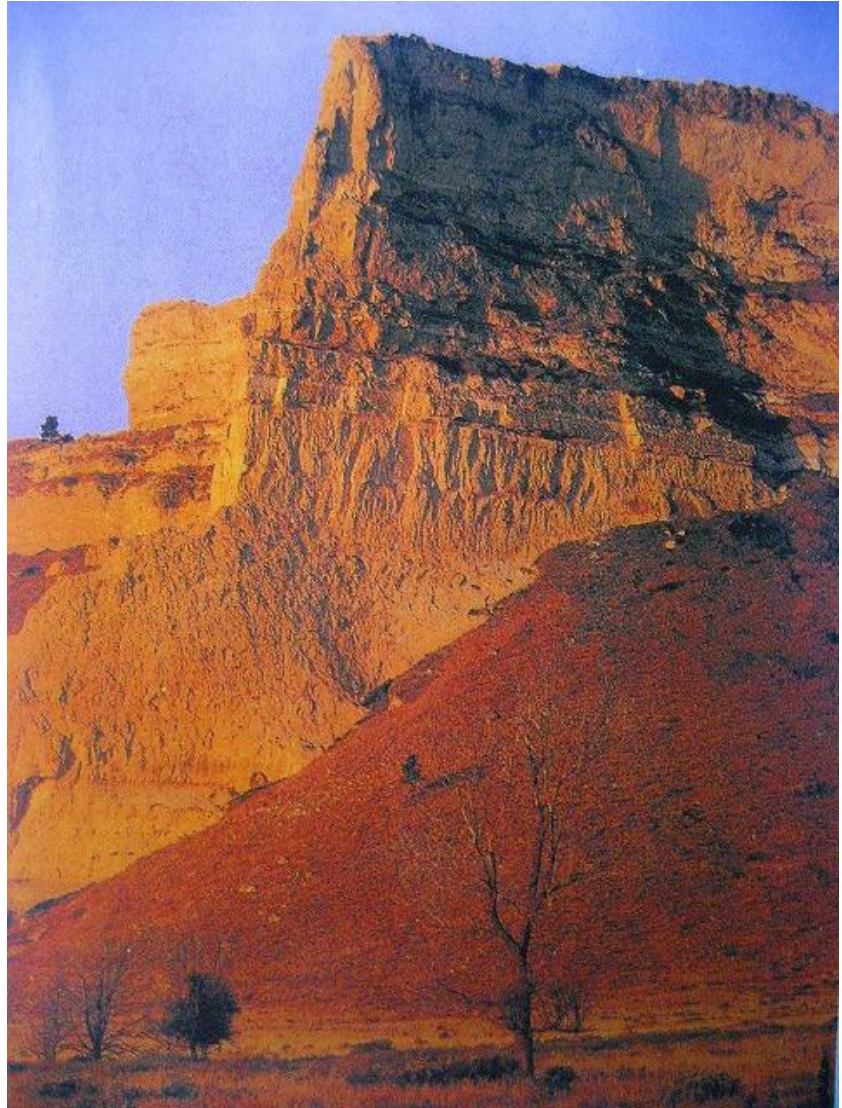
われわれは、今日 10 マイルほど前進し、Vermilion クリークの森と呼ばれ、水が豊富にある小さな小川の辺でキャンプを張った。”（Lydia Allen Rudd, May 9, 1852）

こうした人たちが、彼らが旅の計画をしたふるさとの農場に戻ったときは、彼らの大きな心配の種の一つはインディアンであつた—確かに、子供達はそうなることを望んだ。しかし、それはもっと残酷だった。通常インディアンとの接触は、入植者達が物乞いと呼んでいるものだったが、その物乞いは、戦士達が彼らの敵のインディアンの頭皮を見せ付けて行われるものであつた。しかし、それは、もっと別の意味があつたもののようだ。否、本当の旅の間の危険は、別のところにあつた：それは、事故と病気だった。

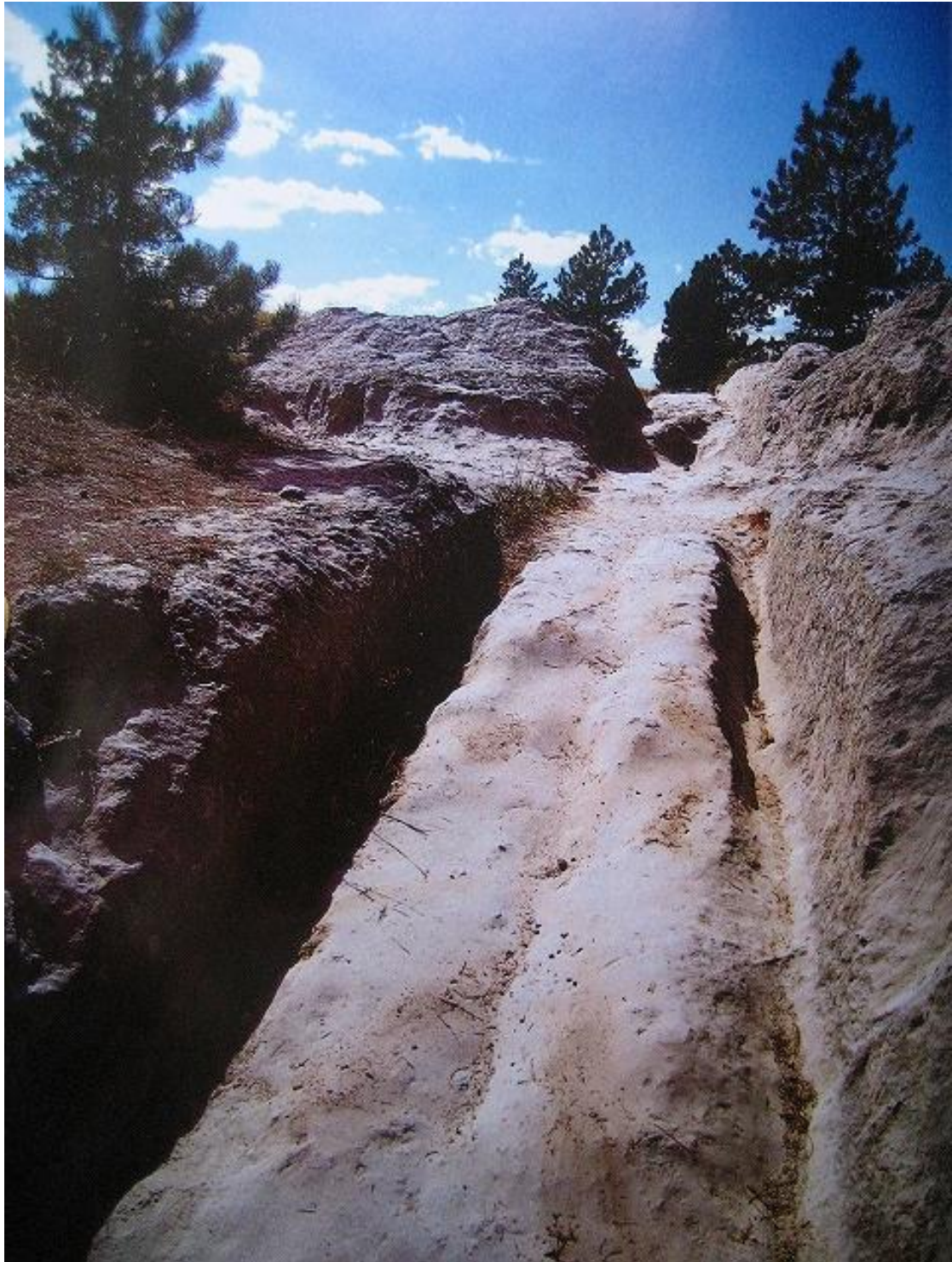
鉄砲の事故により、非常に沢山の人が亡くなっているが、これはすこし奇妙な気がする。おそらく、沢山の鉄砲が、オレゴンでの農場を始めるときに使うため、そして、狩猟をするために、一緒に持っていかれたのであろうが、これがよく事故を起こした。こうした鉄砲の事故と同じようによくおきたのが、溺死である。事実、川を渡るときにはいつでも、いろんな状況で命を奪った。日誌のなかには、よく、子供達が沢山の荷物を積んだ馬車の車輪の下に落ちたこと、彼らがあえて、馬車の長柄の上に立って乗っていたことなどが書かれていた。事例はなおも沢山続けられている。家畜たちとともに働くことは危険であつたし、木を切ることですら、その代金をとった。バッファローが何かに驚いて突然走

り出すと、何人かが殺されり、行方不明になり、それっきりだった。ある日誌では、まるで、旅の小槌のように、毎日、毎日、通り過ぎた墓の数を数え上げていた。ある歴史家はその数を数えていたが、インデペンデンスからオレゴンまで、この街道の80ヤードごとに墓があるといっている。

事故よりももっと最悪だったものがある：病気だ。事故は、神の仕業であり、また、防ぎうるものであったし、また、それは多分、他人事であった。しかし、一端病気が一団のなかに発生すると、それは、まるで、肉食動物がしずかに忍び寄るように、広がっていった。そして、オレゴン街道には、助けてくれるものはるか遠くにしかなかった。



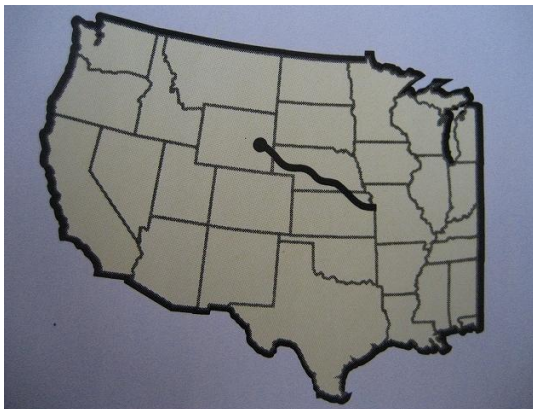
Scotts Bluff のこの塔のような崖は、谷のそこから、800 フィートほど立ち上がっている。オレゴン街道でのこの堂々とした道標は、1919 年の 12 月 12 日に、オレゴンへの苦難の旅の途中で、開拓者たちがキャンプを張り、そして、休息をした場所も含め、ナショナル・モニュメントとして布告された。



ワイオミングの Register Cliff の近くの石灰石に掘り込まれたオレゴン街道のわだち。大平原をでて、“街道”は、時々まさしくその地域という状況になった。幌馬車隊は、御者達が“口に入る埃”を避けるため広がったときなどは、20 台分が横一列になって進んだ。ここは、丘と川の間で、岩にこうしたわだちを刻み込みながら、馬車が一列になって進むことを強いられた場所である。Register Cliff の近くは、こうした人たちが進んだ形跡が岩の刻み込まれている良く知られた幾つかの場所のうちのひとつであった。

“Platte River の川沿いにコレラが大流行した・・・沿道は、いたるところ墓場となった；殆ど一日中、どこかで埋葬が行われていた；あるところでは、一列に五つも六つも、名前が掘り込まれた墓標のついた墓が並んでいた。それはもう、悲しい光景以外の何者でもない；誰もその情景を生々しく語ることは出来ない・・・”

Jane Davies Kellogg, 新婚の移住者 1852.



コレラが恐怖であった。1830 年代の前半に、カナダやニューオーリンズでむちゃくちゃに流行し、それが、一世代かちょっとの間に、合衆国のあちこちで突然発生し、1849 年には、西の地域に広がって行った。コレラは、過言が移動にとっても特別のものではなかった；Scotts Bluff や Ash Hollow と同じように、St. Louis や Sandusky までも廃墟と化した。

街道での日々の接触、そして、粗野な料理、水、ならびに、ゴミくずなどの状況が、一度、コレラが流行すると、それがたちまち広がり、どうにも手を付けられないような状態になった。まさしく、それが実際なのだ。最初の症状は、強烈な胃痛があり、そのあと、どうしようもない下痢をおこし、そして、激しい吐き気を催す。と直ぐに喉の乾きがやってきて、そして、大体は、一日と持たず死に至った。

家族の中に死人がでて、不幸にみまわれると、一団がその家族を元気付け、支援をしながら、一緒に引っ張っていくなんてことも殆どなかった。事実、かれらには何のすべもなかったのだ。故人の巻き寝具や持ち物など、しばしば、街道の脇に捨てていかれたが、それは、誰かがそこで死んだということを他の人に知らせる手段でもあった。

たとえば、家族が家宝のようにして使っていたテーブルの板を引き裂いて作った墓標などという痛ましい例、よくあったのは、毛布を使うというものであったが、中には、馬車の側板を使って棺おけを飾っているものもあった。大体は、死体は直ぐに街道に埋葬されて、その上をわざと馬車が走っていくようなことが行われた。これは、決して礼を失したのではなく、肉食動物などから墓を隠すために取られたやり方であった。また、それは、インディアンから隠す目的でもあった。というのは、インディアン達は、このコレラについての知識を得るまで、死体から衣服を取ったり、埋葬品を取るために墓を掘り起こしていたからである。

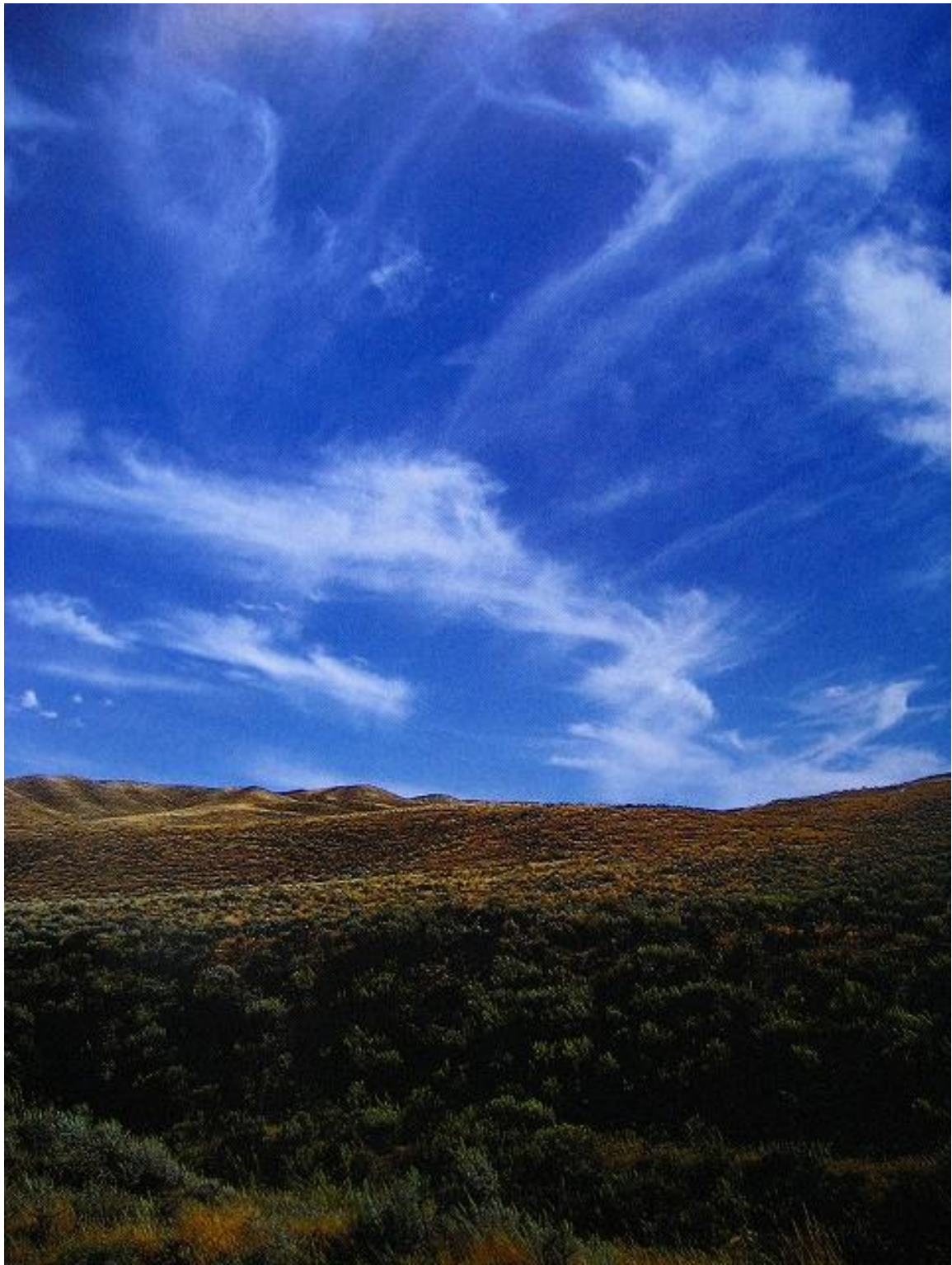
ある者が、街道筋の死者の数を、西に向かって旅をしていた人たちの 10 パーセントに

も昇るだろうと推定していた。そして、何年かの間に、その数字は現実のものになった一言の本当の感覚で“殺された”のである。それぞれの死は、— そして、多分街道を進んだ人と動物は、30,000 以上の仲間達だったのかも知れないが、一残された人々にとっても、そこには壊滅的な状況だけが残っていた。このまま、前進するのか？ それでも、故郷に帰るか？ どうすればよいのか？ 誰か他の人たちと一緒にでもなるか？ それは、日誌を読むことは痛ましい限りである。子供達は両親から見捨てられ、女は立て続けに、自分の亭主と子供を失うなんていうことがしばしば起こった。そんな状況からどうやって立ち直るのだろうか？ 振るものは、打ち砕けたが、しかし、それでも沢山の人々は、とにかく、なんとか荷物を一緒にまとめ、再び、オレゴン街道の旅人となった。

Scotts Bluff を過ぎ、60 マイルほど砂地の道を進む間、移住者達は Fort Laramie をしきりに楽しみにしていた。と言うのは、ここには、比較的信頼の出来る毎月の郵便サービスがあったからだ。この砦は、昔から毛皮の取引の行われていたところであった。1849 年に、ゴールドラッシュがオレゴン街道を滅茶苦茶にしたときに、政府がこの砦を買収し、そこに、街道を保護するために騎兵隊を駐屯させた。のちにオレゴン街道が貫通し、インディアン戦争が勃発したときに、Laramie 砦は一躍、有名になった。移住者達は、この砦を、一休みするのにとても素晴らしいところだったと思い出しているが、かれらはここで、修理をし、“合衆国”で何が起きているのかとすることを知ることが出来たし、また、オレゴンについての噂がどんなものであるかを学んだ。牛達や小道具が点検された；ここは、もう大平原を横断したのだ、が、まだ、旅の苦難が彼らを待っていたのだ。



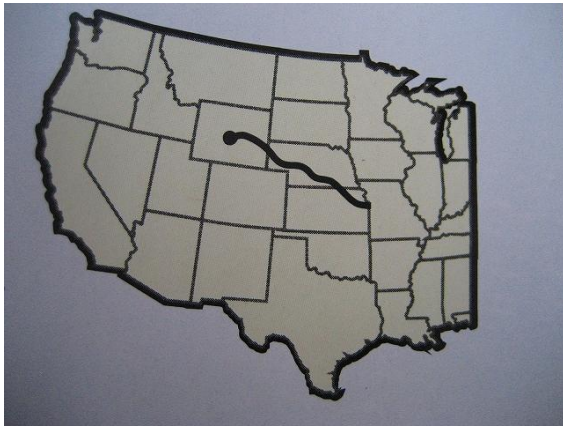
Fort Laramie の事務官の建物である Old Bedlam. この砦は、移住者の数が膨れ上がったときに多いに発展した。もともとは、毛皮の取引基地であったが、やがて、移住者達の補給基地、そして、インディアン戦争が勃発したときには、その中心的な対策基地となった。



Wyoming の Willow Spring の東部にある、Rugged 地方は、ワゴンの通ったところである。街道が平原を後にし、山に向かったおり、すでに疲れきった人々と家畜にはいらいらがつのるばかりであった。かつては、価値があると思われていた荷物が山越えの荷を軽くするために捨てられ始めた。ここは、旅の大体半分ほどのところであり、精神的な疲弊が見え始めた場所である。

“牛達が熱く、砂地と、石のごつごつした道で足が傷つき、効かなくなっている・・・私は道端の死んだ牛からに身のかけらを切り取り、・・・そして、この切り取った小片を牛の傷ついたところにあてがい、それが足から外れないように紐でしっかりと固定してあげた。これで万事うまくいくのだ。傷が治るのに二日もこうしておけば、十分だった。”

Enoch Conyers, 1852.



あちこちで、重い砂地を引っ張っていきながら、オレゴン街道が、あらゆる対応策を必要とすることが現実のものとなってきた。この旅の終わりに待っている新しい生活の約束は、歳功の代価を要求していた；誰もアイオアとオレゴンで同じようにして生活することは出来なかった。勿論、多くの人たちは、犠牲というものが完全である必要がないと期待していた。多分、ほ

んのちょっとした古い生活での家財道具が、新しい土地で快適に生活するために必要とされるに違いない：貴重な鉤爪のついたテーブル、家族の写真、ある程度のぜいたく品が新しい生活を始めるときに役立つだろうと思っていた。しかし、大地の傾斜は、何処までも登りで、家畜も、また、人々も一晩の眠りだけではとても回復できないほど骨の芯まで疲れ切っていたし、馬車は重すぎた。中西部の故郷の農場からもってきたものは、街道に沿って次第に投げ出され始めた。

J.Goldsborough Bruff は、われわれが今手にしているもっともよく書かれた沢山の旅の記録の中の一つに、1849 年に彼が見たものを次のように書いている：“ここに見捨てられ、そして、壊れたままのものは、中途半端なものではない；事実、扱いの重いもの、面倒な荷物、役に立たない絵画：水中で使う装備一式や様々な装備、重いかなとこ、鉄や金属、加熱炉、ふいご、鉛、そして、そのほかの設備 — 沢山の紐状になったベーコンの束 — これは素晴らしい食料なのだ。 マメの入った袋、塩、大きな箱、いろいろな用途の道具類、衣類、テント、テント用の柱、馬の引き具・・・小さな樽、手桶、ストーブ、トランク、・・・かなりの量の牛をつなぐ鎖や横木などなど。”

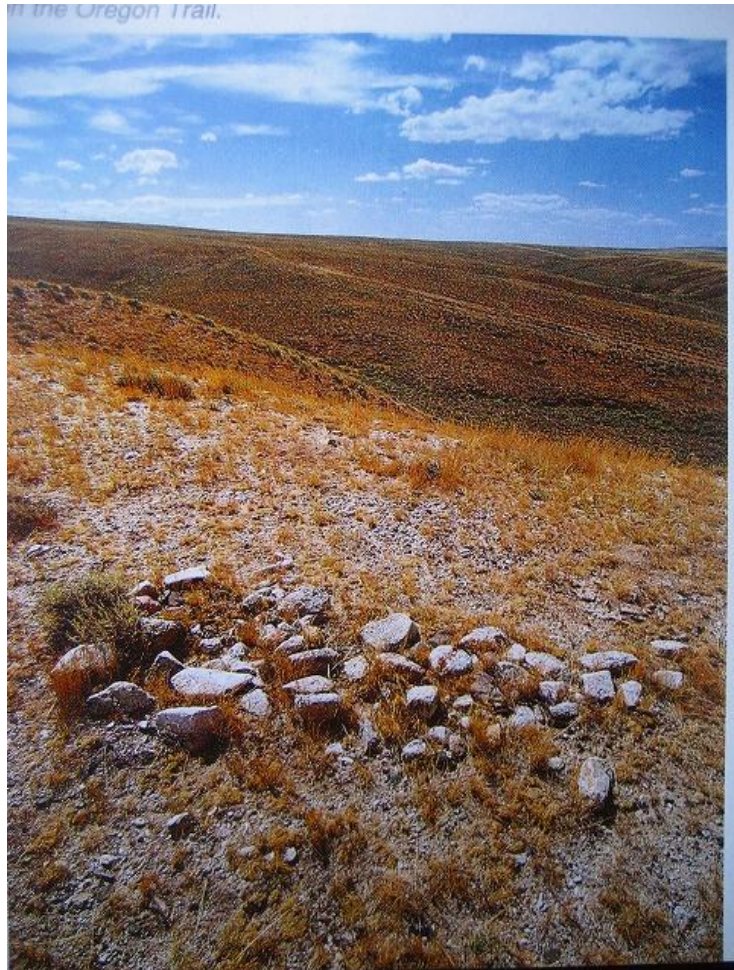
まさにそれは失望そのものであった。まさしく、そこには財産があったのだ。数トンにも及ぶ財産が、街道の脇にあるときは乱雑に散らかり、なかには、キッチンと整理された形のものもあり、それを拾っていくのは自由であった。誰もがこうしたものが、後で何がしか必要になるということを知ってはいたのだが、しかし、彼らは、ここに見捨てた人た

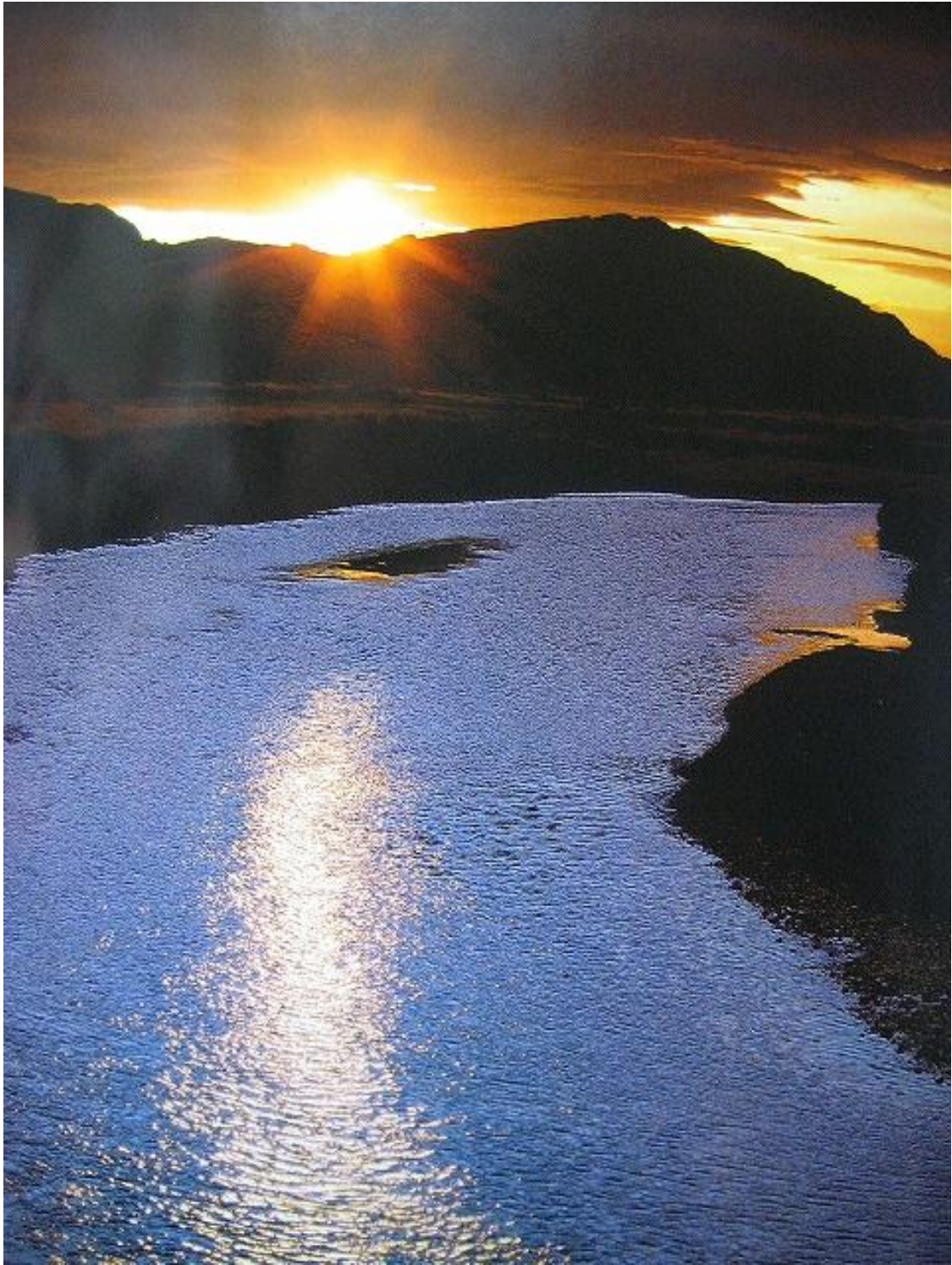
ち以上に、もはやこうしたものをオレゴンまでもっていくことは出来なかった。交換取引というのは、一番いい方法だった。御者達は、彼ら自身の馬車の壊れたり、すり減ったりしたものと取り替えるために捨てられた馬車の金属製の締め具と仕切りとむしり取っていた。ある開拓者が、駄目になった 300 ポンドのベーコンを捨て、それを彼が道路の脇で見つけた新しいベーコンと取り替えたと報告していた；こうした取引は日常茶飯事だったのである。

動物達に、精を出して働けという言葉が掛けられ始めた。牽引する動物として、ミュールと牛とどちらが都合がよいかという議論が以前になされていたが、ある人は、結局、それぞれの一匹ずつをチームの中につれて行き、一匹がくたばったら、次を使うというようなことをしていた。しかし、Fort Laramie からの西の荒れた街道の時には、牛を連れてきた人たちは、自分たちのほうがいい選択をしたと思っていた。いい道の時には、そして、距離が短いときには、ミュールは、明らかに速かった。しかし、牛のほうは、道が良くない場合には、着実により長い距離を持続していたし、また、インディアンの家畜泥棒たちには、ミュールほど魅力的ではなかった。そして、ミュールよりもちょっとだけおいしく食べることができたのだ。

牛にしても、また、ミュールにしても牽引する動物は、とりわけ、遠方まで馬車を引っ張っていくときには非常に貴重なものであった。よく、質の悪い水を飲んで、沢山の動物達が死んだ。そして、必要以上の数の動物が死んだときには、馬車そのものを見捨てなければならなかった。馬車を人たちが自ら引っ張らなければならなかったというようなこともあったし、また、このほか、動物や馬車も見捨てなければならぬようなときには、人々は、もてるだけの荷物を自分たちで運ばなければならなかった — オレゴンに向かって。

Wyoming の prospect Hill に残るわだちの跡。こうした石が墓なのかどうかは良くわからないが、しかし、何処に行っても、街道筋には墓らしきものが直ぐにわかる。





Wyoming の Independence Rock と Sweetwater River。ここは、もう一つの憩いの場所であった。移住者たちは、よく、夜には、膨大な数の馬車が円陣を組んでいるなど、そんな光景を見るためにこの岩に登っていた。そして、ここの岩に彼らの名前を彫りこんでいた。この キャンプは、そのまわりに沢山の財産が捨てられていることが知られているが、これは、ここが、旅の行程のなかでも非常に厳しいところだったことの証拠でもある。あるときなどは、“新しいゴシック調の本のカバー” が、コーヒー沸かしのために犠牲となったほどである。

“朝、早く経ち、昼までに、Independence Rock に到着した・・・・一団は、非常によい精神状態だった。Independence Rock は、遠くから見ると、まるで巨大なクジラのように見えた。そこは、あちこちにいろんなやり方で、名前が、日付が、イニシャルが、Ec.[原文のまま] 書き込まれ、印がされていた — あまりにも沢山のものがかかれていたので、私は自分の場所が見つからないほどだったが、何とか、

- THE WASHINGTON CITY COMPAN- July 26, 1849 と書いた。”

J. Goldsborough Bruff, 1849.



大平原は通り過ぎた。そして、移住者達は、山岳部に突入した。ここを通るルートは幾つかあったが、一つは、全く話にならず、そのほかのルートは典型的な山の厳しさをもったものであった。山は標高が高くなるにしたがい、条件はますます悪くなり、彼らが、6 ないし 7,000 フィートの高さまで来ると、なるでも夜は冷え冷えとしていた。多分、こうした状況の中で最悪だったのは、アルカリだった。Bruff が、'49

年に記録しているのは、：“こうした山々の麓には、‘アルカリの湿地や泉’があった。ここの水は、強いアルカリ性で、コーヒーのような色をしていた。そして、そのまわりには、死んだ動物達の山が、主に牛であるが、それは、数百頭にも達していた。”いくら悪臭を放っている死んだ牛の山がそばにあったにしても、喉の渴いた牛達を水の見えるそばをそのまま通り過ぎさせるのは、とてもできたことではなかった。不思議なことに、その後、数年して、この地に入植した人達は、移住者達の馬車を引っ張って居る喉の渴いた家畜がこの泉のところで死んでいるときに、自分たちの所有している牛を放牧したり、甘んじて水を飲ませたりしている。

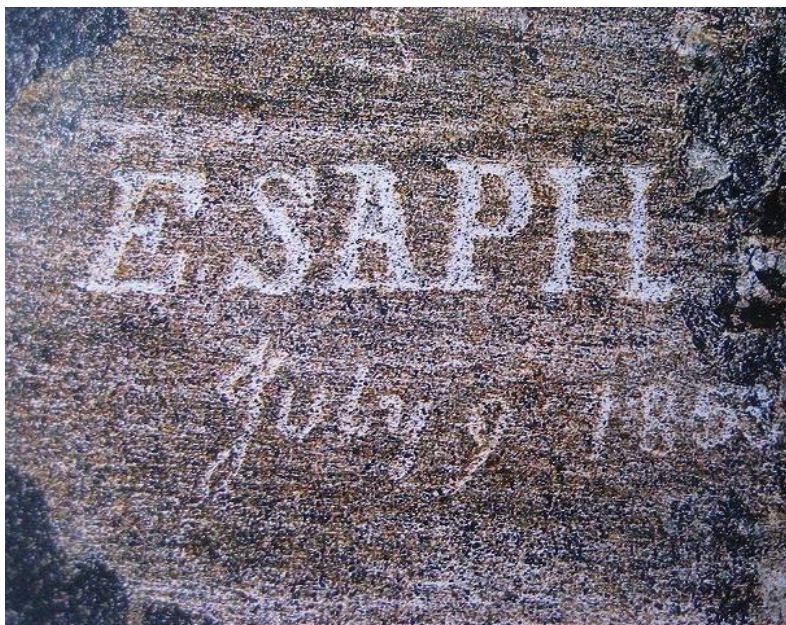
幌馬車隊は、Ash Hollows を出て以来、North Platte に入り、そして、今、彼らは、ついにそれを乗り越え、そこを後にする場所に来た。そこは、Bessemer Bend である。1847 年以前は、移住者達は、普通、この深い川を渡るのにいかだを作らなければならなかった。1847 年に、モルモン教の指導者である Brigham Young が、ここに職人達を残し、そして、移住者達がここを、有料で渡ることができるように、フェリーの製造を指示した。そして、9 人の男達が 8 艘の掘りカヌーを作り、その上に横木を渡し、馬車、一台当たり、一ドルで渡しをした。この料金は後に 3 ドルに上げられた。殆どの移住者達は、不満であったが、

仕方なく、支払いを選択した。フェリーにより、ここでは、当たり前であった溺死者の数が激減した。が、しかし、ここは、旅の渋滞場所となった。一年で一番移住者の数が多いときなどは、一週間も待たなければならないようなこともあった。1859年には、フェリーに代わり、有料の橋が建築された。

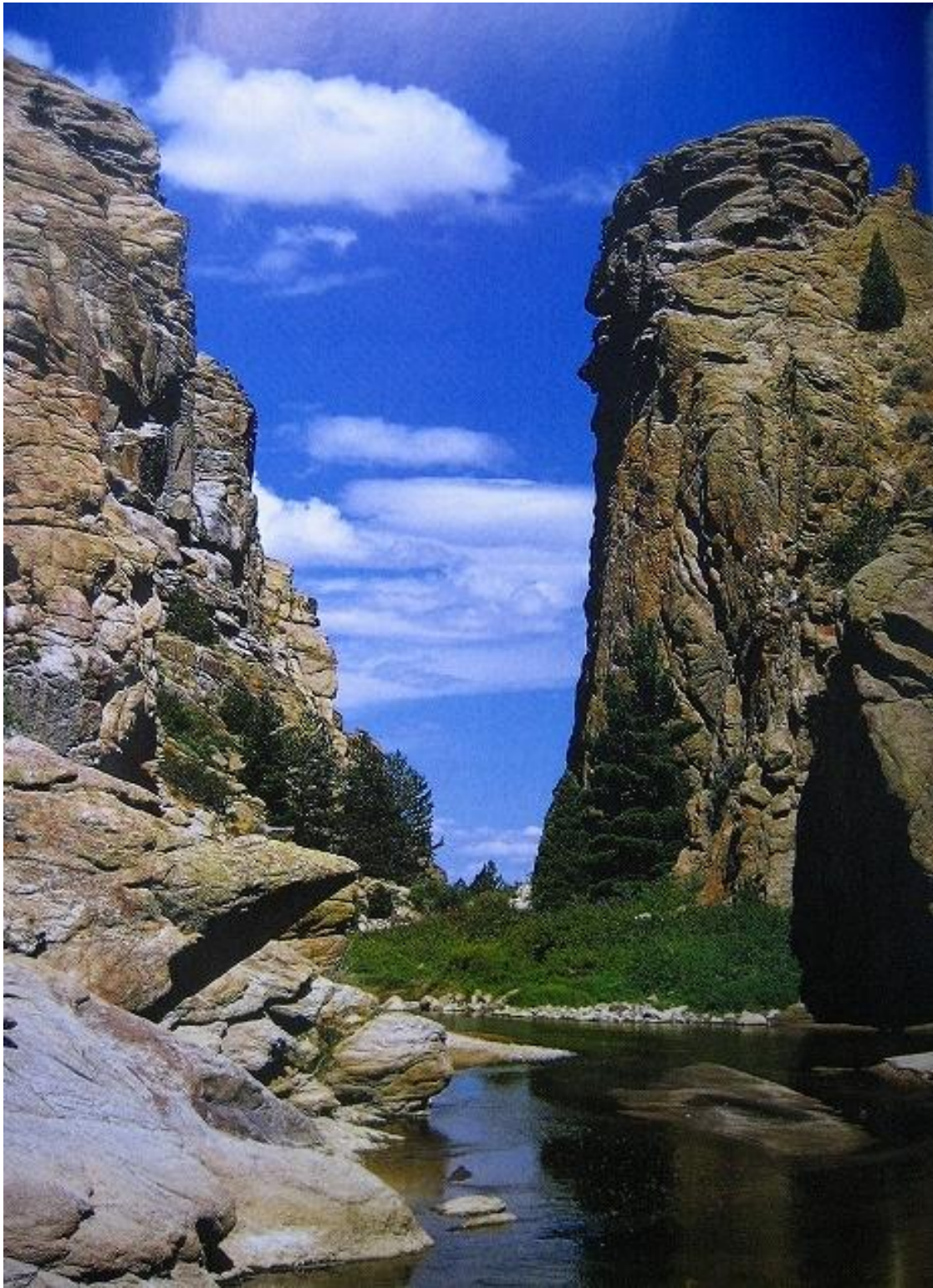
次に待ち構えていた川は、綺麗に澄み切った川であった。が、ここに来るには、厳しい試練があった。50マイルほどのひどくあれた、不真面目な地域で、ワタリガラスが飛び交い、そして、坂はとても不安定な場所で、しかも、乾燥しきった道が続いた。日誌には、ガラガラヘビと書かれていたが、まさしく、これがここにぴったりの表現ではないか。その日誌には、あちこちに言い争いの状況が出てきている。

しかし、そのあと、**Sweetwater River** に到達した。この **Sweetwater River** は、彼らがすでに通り過ぎてきた **North Platte** 川に合流するところで、溪谷が、真っ直ぐ彼らの進むべき方角に導いてくれていた。フランス人のわな猟師が、荷物を積んだミュールがあるとき、積荷の砂糖の袋を川に落としたためにこの名がついたという話しをしていた。移住者たちは、この冷たい、甘い水を飲み、そして、喉の渇きで苦しんだ平原の横断と、アルカリから解放されて疲れた心を癒されていた。

彼らは、**Independence Rock** が姿を現すことをずっと楽しみにし、そして、それが視界のなかで次第にゆっくりゆっくりと大きくなっていき、今まさに、“あたかも巨大なクジラのように” それを見ることができた。誰でも簡単に登ることのできるその岩の頂上に立つと壮大な光景を見ることが出来た。移住者たちは、空いた時間がありこれに昇る機会が得られると、ここで、岩の割れ目に弾薬を注ぎ、それを爆破させて、7月4日を祝い、楽しいひと時を過ごした。そして、ありとあらゆるアメリカ人は、ここに彼らの名前を残したのだ。



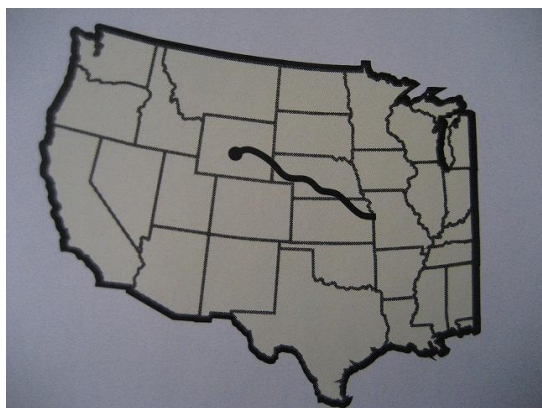
Independence Rock は、この偉大なる街道の証明書の一つでもある。しかしながら、この岩は、非常に硬く、殆どの名前は、薄く引っかかれた程度で、今では殆ど判読できなくなっている。日誌では、馬車のグリースを使って名前書いたということである。移住者たちは、時に、自分たちよりも先を行く知人の名を見つけることもあった。



Devil's Gate は、Sweetwater River が硬い花崗岩の丘を峡谷に削り取って出来たものだ。勿論、馬車はここを通り過ぎることは出来なかったが、しかし、移住者たちは、歩いてここを通っていた。後に、インディアンが、抵抗して彼らの領地に不法侵入し始めたときに、たまたま、この近くで、待ちぶちをした。峡谷は、ゆうに 300 フィートの高さがあるが、幅は、一番狭いところでは、わずか 30 フィートあるだけである。

“なんとも壮大な感じのする ‘Devils Gate’ まで、5 1/4 マイルのところまできた。この岩は、川の両側に高さが、400 フィートほどの塔の形をした花崗岩が垂直に立ち上がった岩で、その間を、幅が 130 フィートほどの **Sweetwater River** が流れている。この悪魔の関門を通り抜けたあと、哀れな老 **Dick** 、これは、われわれがミズーリで手に入れた牛の一匹なのであるが、—この牛が死んでしまった。”

Enoch Conyers, 1852.



Sweetwater River は、移住者たちにいろいろなと不思議な印象を刻み込んでいた。**Independence Rock** から 2・3 マイルほど過ぎると、**Devil's Gate** にたどり着くが、ここは、川が、花崗岩の山の背を非常に狭く刻み込んだところである。この割れ目を馬車がうまく乗り越えることは不可能で、そのために幌馬車隊は、半マイルほど南のちょっとした小さな山の背に昇り、迂回しなければならなかった。勿論、誰もがこの

峡谷を見にいった。その頂上からの光景は、壮観そのものであったが、しかし、なんと、18 歳になる 1 人の旅人の娘さんがここから滑落し、死んでしまった。彼女の墓標は、神学的な言葉と、しゃれ、そして、リズムのものと言う、とても奇妙な取り合わせのものであった：“ここに、**Caroline Todd** が眠る・・・彼女の魂は、つい最近、神の元に行った・・・**Era** の救いはあまりにも遅すぎた。・・・彼女は、**Devil's Gate** で、償われた。”

オレゴンに向って、したたかに旅を続ける人たちにとって、街道は、いつも変わらず、そして、“そばを通り抜ける” 場所であった：**Alcove Spring, ash Hollow, Windlass Hill, Fort Laramie** などなど。しかし、**Devil's Gate** が移住者たちを見つめているときに、彼らはどんな風な感じていたのであろうか？

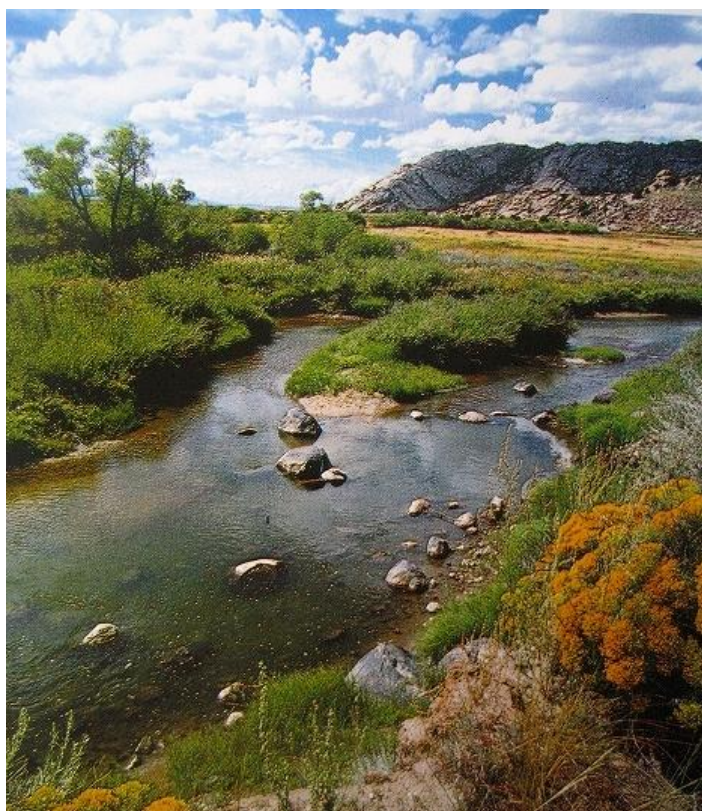
一年間に、移住していく人たちの数は、ちょうど、大きな鐘のような形の分布をしているに違いなかった。冬にすこしだけ冷えてくると、雪が街道を覆い、それが風に吹かれて、冬の食料確保のために狩猟をしている、この辺りに住んでいるインディアン達の足跡をそのまま白く残していた。一年のこの時期は、インディアン達にとって、すべてことが悪夢に思われたのであった。前の夏の間中、ここを通り過ぎていったがやがやとして群集が、とにかくどこかに行ってくれ、そして今、ようやく、ここが彼らの昔の状態になったのだ。しかし、実はそうではなかった。合衆国に戻って状況を見てみると、人々は、帳簿を作り、そして、馬車の準備をしていた。そして、未だ春なのに、強烈な願望をもち、む

ちやくちやな連中が、緑の草の兆しの時期に大平原にどっと押し寄せて来たが、しかし、この Devil's Gate だけは、その時期、未だ閑散としていた。

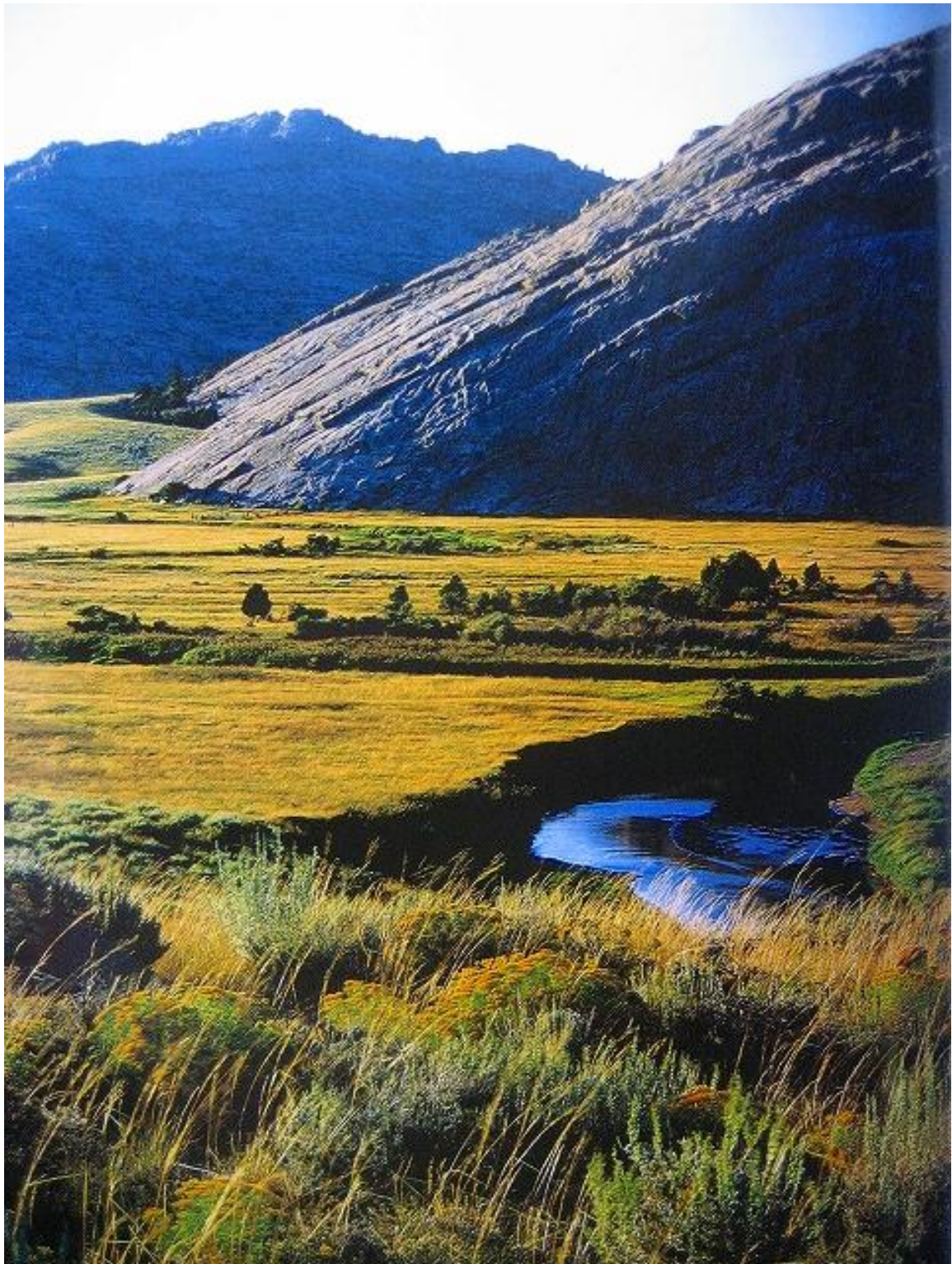
この頃は、Alcove Spring にまで来ていた人たちは、最初に Independence を出発した、ほんのわずかのの人たちで、それから次第に Independence を後にする人々が日に日に増えていくような状態だった。6 月のはじめ頃のある日、最初の馬車が、Devil's Gate に姿を現し、Independence Rock の周りには彼ら名前を刻むために小休止をしている人の数は、未だ、極々わずかであった。が、それから、幌馬車隊が、Sweetwater を遡って、移住者たちがその前の年の人たちが持ったのと同じように奇妙な岩の印象を受けていた。すると、その後から続々と幌馬車隊がやってきたのだ。そして、一ヶ月のあつと言う間に、途切れない幌馬車が、Devil's Gate の脇を通り過ぎていくようになった。

ある 1 人の旅人が、1852 年、この年は大きな転換期の年であったが、こんな解説をしていた。その年に、最初にここに来た馬車から、最後に通り過ぎていった馬車まで、間違いなく、それは街道を 500 マイル埋め尽くしていた。そして、どこの場所を通り過ぎるにしてもその行列は一ヶ月の歳月を費やしていた。Fort Kearny から、Reuben Knox が次のように報告していた。一日に一千台もの馬車が通り過ぎていった。移住のうねりがそばを掃き出しているようだった。

Devil's Gate で、7 月の中ごろを過ぎると、最後の遅れをとった人たちになるまで、数はどんどん減ってゆき、雪が行く手を阻む前に山を乗り越えられるか冷静に判断して、彼らは、オレゴンに向かい、Sweetwater の川を遡り、姿を消していった。



移住者たちが Sweetwater に対して抱いていた愛着の要素は、その場所であった。それまでの行程は非常にきつかったが、彼らは、まだその先にもっと厳しい試練の来ることを知っていた。しかし、ここは、綺麗な水があるし、英気を養い、そして、次の準備をするには比較的、気の休まる場所であった。

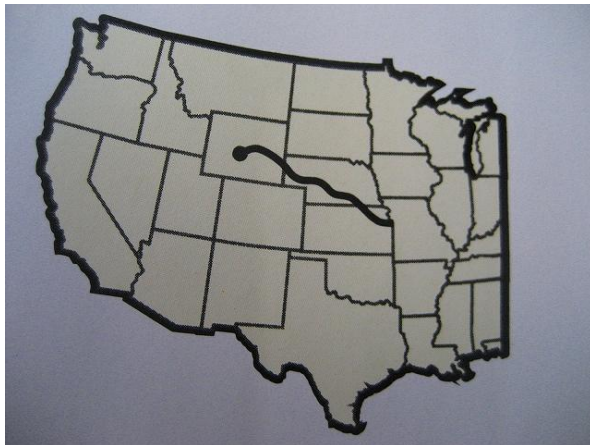


Sweetwater River の川沿いにある Martin の洞穴

この洞穴は、1856年の十月の遅く、早めの雪と厳しい悪天候により、ここで悲惨な目にあったモルモン教の“手押し車の一団”の指導者であった **Edward Martin** 隊長にちなんでこの名前が付けられた。**Salt Lake City** からの救助隊が到着したが、すでに、手押し車の仲間の半分は息絶えていた。当初、この街道を進む一つの教訓は、とにかく、押して、押して、押し捲ること；カンザスの春の満開の花のなかで一日ブラブラすることは、間違いなく、あとで、三ヶ月をふいにすることを意味した。

“旅の一団は疲れ気っていた……中には、馬車を引っ張り、時々、病気の妻や子供達を背負って悪戦苦闘している年老いた男も居た。女が病気の夫の横で、泥沼や雪でもがいている子供達を引っ張っている。夜になると、ぬかるみが、着物や足までも凍りつかせていた。われわれが出来るだけの手助けをすることは、お互い様のことであった。”

Daniel Jones, モルモン教救済運動の指導者 1856.



移住者たちの中に、オレゴンの終点まで行かなかった、と言うより、彼らは、そうしようとおもわなかったのだが、ある一つの集団があった。しかも、彼らの物語は歴史の物語を綾なすとても重大な糸の一つでもある。

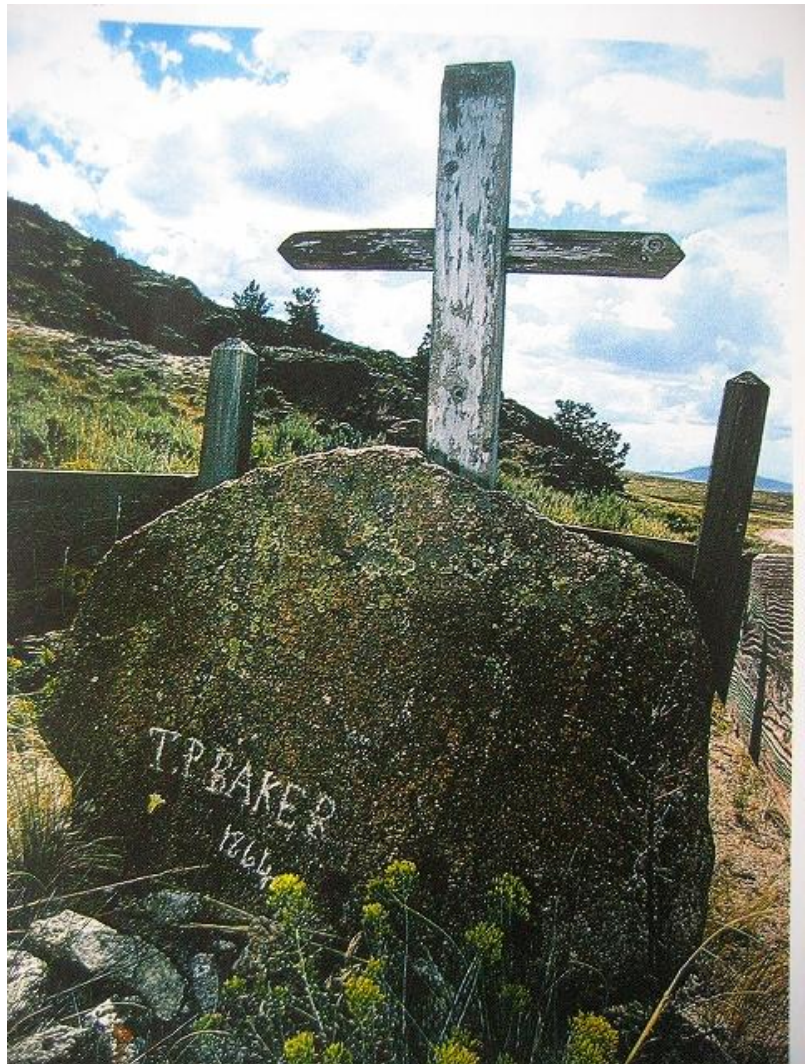
1844 年に、イリノイで、ある宗教、モルモン教であるが、その指導者が、長い反目が頂点に達し、非モルモン教徒により殺害された。そこで、新しい指導者の

Brigham Young は、教会から、見込みある信者、たくわえ、そして、小教区民すべてを引き連れて、彼らの自由となる天国を築くために西に移住することを決断した。(それは、事実、あちらこちらで個々の農民達がしたのと同じ決断だった。;西部が誘惑し、そして、その場所がそこにあったのだ。)

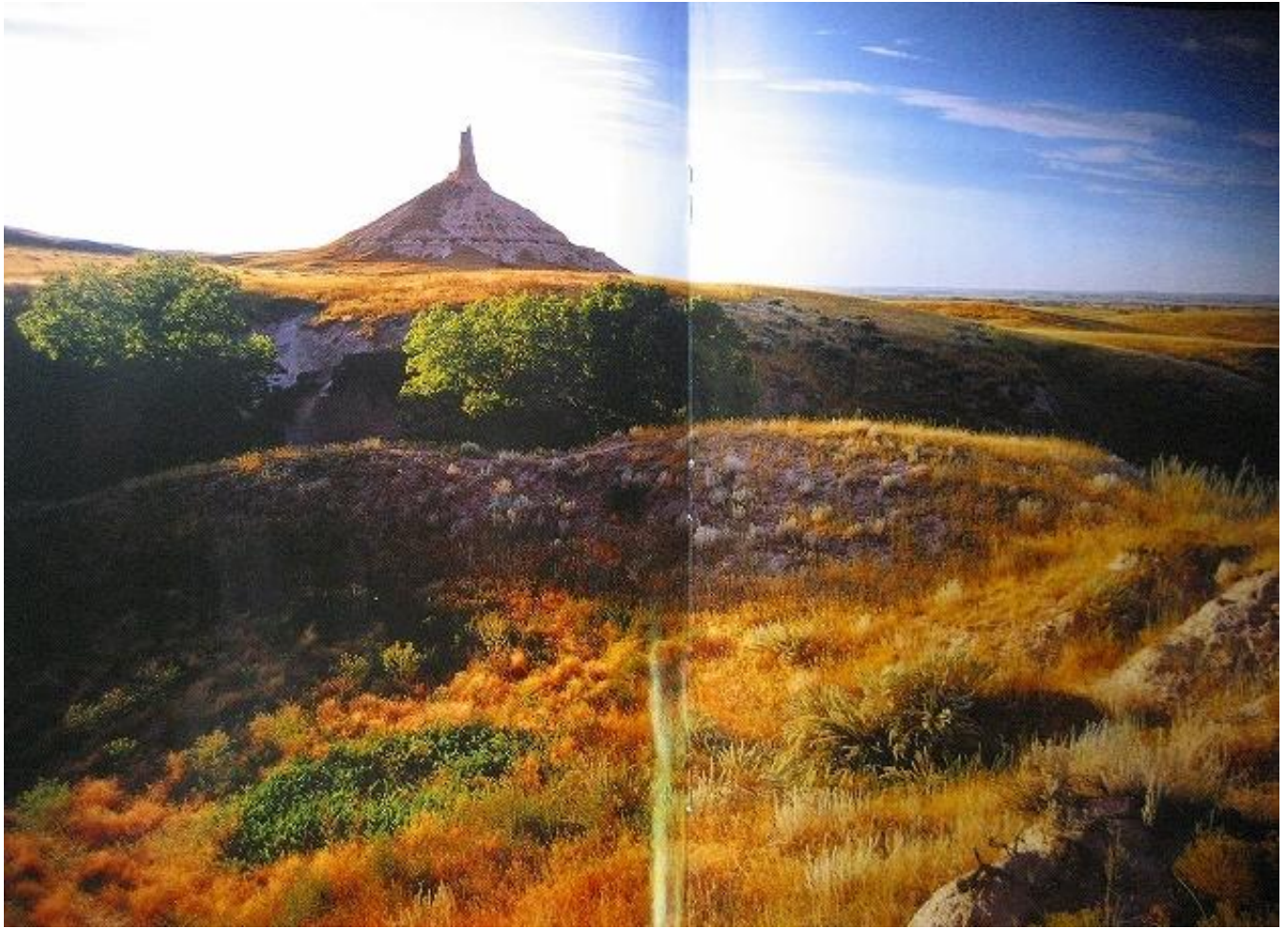
1846 年以後、モルモン教徒は、Fort Bridger から分かれて Salt Lake City に下っていく、オレゴン街道を旅する非常に行いの素晴らしい集団であった。旅の途中では、彼らは非常に統制の良く取れた移住者の集団だったのだ。言い争いをする幌馬車の一団は、あとから来る人たちのためここで穀物を育てたり、橋を作ったりすることが目的で、後に残る人たちには、少々民主主義が過ぎていた; が、しかし、彼らモルモン教徒は、実際、それを実行した。勿論、オレゴン街道は、すべてのひとに平等に、砂地で、熱射が強く、そして、その道則は遠かった。

当時、モルモン教は、栄えていて、沢山のヨーロッパ人の改宗者達が、新しい天地を求めてアメリカにやってきた。が、しかし、彼らは、直ぐに、大平原を横断することがどれほど大変なことかに気付いた。こうして、西に向かう移住者の話しのなかで、最もよく知られた事件が起こった。彼らは、手押しの車を作り、そして、自分たちのありとあらゆる持ち物を携えて、大平原を横切り、ソールト・レイク・シティーを目指したのだ! 大体は、この目論見はうまくいったが、しかし、それは、ほんの一回か、二回で、その後は第三次が待ち受けていた。それが、ここで話す Martin の洞穴の事件だ。

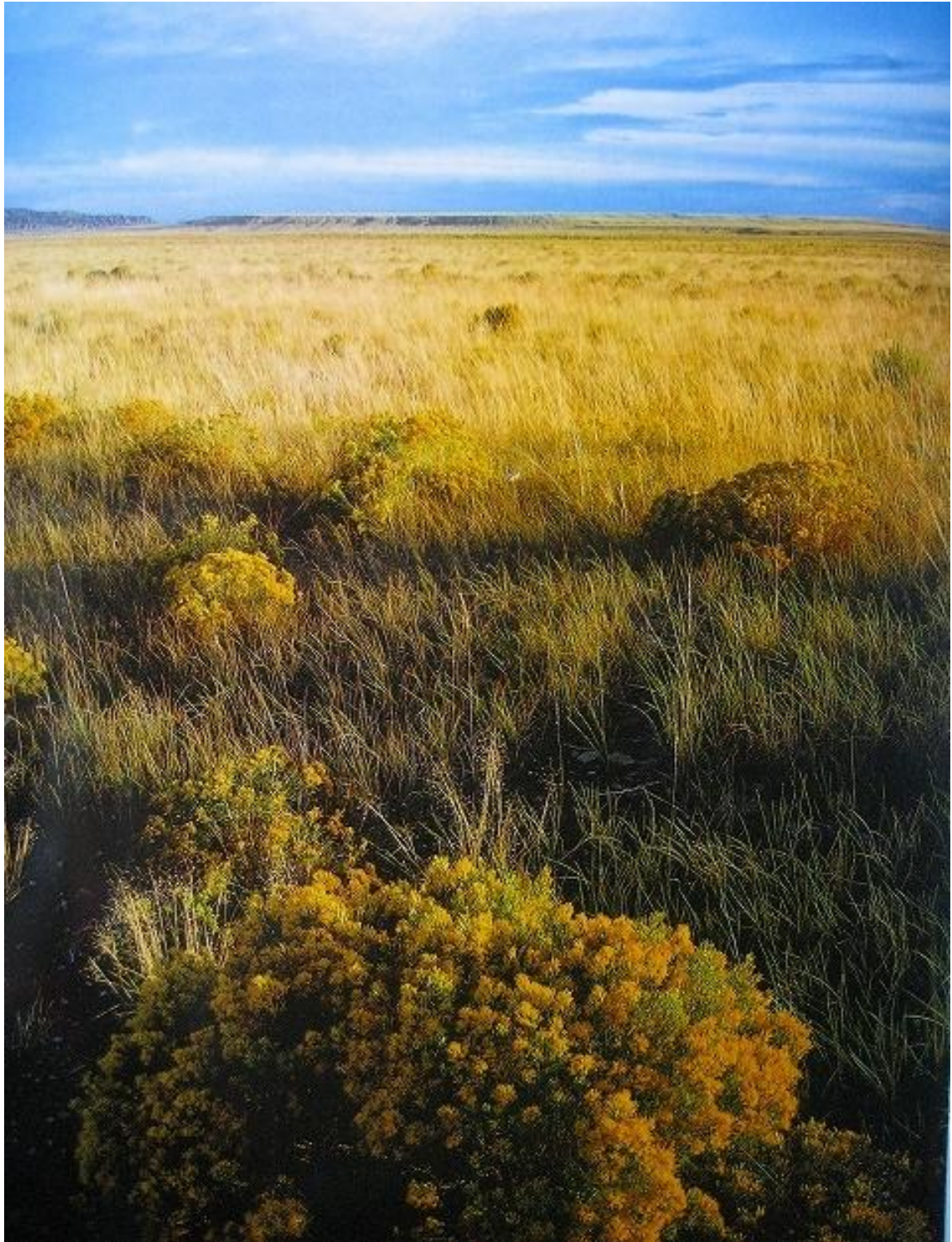
1856年に、およそ、1,200人のモルモン教徒が、Edward Martin 隊長に率いられてオレゴン街道の旅に出発した。半分は馬が馬車を引き、そして、残りは、手押し車の一団だった。彼らの出発はすこし遅くなり、そのために、彼らの進行はやや遅れ、Independence Rock に到着する前に雪に見舞われた。彼らは悪戦苦闘をしたが、しかし、街道を 100 マイル進んだところで、疲弊しきってしまった。そして、後続からの助けを得ることができず、立ち往生した。救助隊が、ソールト・レイク・シティから派遣された。何人かは救出されたが、残りは、Devil's Gate の近くの Martin の洞穴に入り、さらに次の救援物質が届くまで待つことにした。こうして、何人かは、ソールト・レイク・シティに辿りつくことが出来たが、しかし、Devil's Gate の近くでの厳しい九日間のうちに、145 人の信者が命を落とした。天国もしまかり — ちょうど、オレゴン街道のように、それだけの価値を持っていたのだ。



この街道のたびの苦難は東部では良く知られていた。誰も、この旅を簡単だなどという幻惑からはじめたものはいない。天国を求めたモルモン教徒にしても、また、靈魂を捜し求めた宣教師にしても、或いはまた、オレゴンを求めた農民達にしても、その終点での報酬は、それだけの価値のあるものに思われた。



Chimney Rock オレゴン街道の道標。ここで、移住者たちは、自分たちの進んでいる道が“西に向かう”正しい道であることを確認することができた。



Wyoming の South Pass の近く、秋には、Chamisa の満開が見られる。South Pass は、標高が 8,000 フィート近くであるが、移住者たちは、思いのほか簡単に越えることができた。いた。毛皮商人たちが、1812 年にここを発見し、幌馬車隊が 1832 年にここを乗り越えていた。ここは、まさしく、太平洋にたどり着く馬車ルートの要所であった。この South Pass は、Independence から 915 マイルの距離にあったが、しかし、移住者たちにとっては、ここは彼らの旅のゴールからは、まだ、同じだけの距離が残されていた。

“山々の雪の線がわれわれの前に壮観な姿で広がっていた。白い頂は、太陽のもとで、光り輝やき……上り坂が延々と続いていたが、17年間にわたりこの地を自分の家として開拓していた[Kit] Carson によってもたらされたあらゆる詳しい情報で、われわれは、最高地点に到達する道を直ぐ近くに垣間見ることができ、とても感謝した……”

John Charles Fremont, 1842.

Sweetwater は、相変わらずその奇妙な姿を見せ付けていた。Devil's Gate を過ぎて、移住者たちは、ちょうど Devil's Gate のようではあるが、その山の上は、川の形跡はなく、割れても居ない、Split Rock を目の当たりにした。ここは、彼らが、Ice Slough と言う、7月でも、その泥沼に入るとそこが凍っている！のに気付くような沼のある低湿地帯で、こ



ここに彼らが来ても、殆ど、それを話題にするようなことのない場所だった。熱い雛かを歩いてきた旅人達は、次の日からは、ここに氷がある間は、冷たい飲み物にありつけた。そして、Sweet water の流れは、彼らの目の姿を見せていた山々のすべてを乗り越えつつ、South Pass に導いてくれたのだ。

South Pass は、西部の地理と歴史のきわめて重要な地点である。South Pass こそ、すべての旅人達が、この峠を越え、そして、アメリカ大陸の太平洋岸にたどり着くということが、その旅の終点であった。この South Pass は、時々、旅人達が気づかずに、すでにそこを通り過ぎているような場所だった。

問題は、South Pass が、それほど、感激するような場所ではなかったことだ。猛烈な印象を与える峰峰の狭い通路と言うのではなく、“峠”は、むしろ、広く、大陸の分水嶺をまたがっている緑の草の生い茂る谷のようなところで、平坦であるために、旅人達は、一方の側から、反対側に越えているのにも気付かず、何時越えたのか分からなかったのだ。

Fremont でさえも、上に引用したようにわざとらしく、30 マイルほど広がった茶色の谷が、片方の東の外れまでなだらかな斜面で広がっており、それが、西にも同じように広がっていると、派手に付け加えているほどなのだ。(後で、彼が大統領に立候補したとき、彼は、South Pass を“発見した”とうっかり言ってしまったが、しかし、人々は、毛皮商人たちがすでにこの場所のことを良く知っていたのは、分かっていた。) いずれにしても、その谷の一つの終点から大地を流れている水は、紛れもなく Sweetwater に注ぎ、Platte 川、Missouri 川、Mississippi 川と流れて、Gulf of Mexico に注ぎ、大西洋にと、— そして、

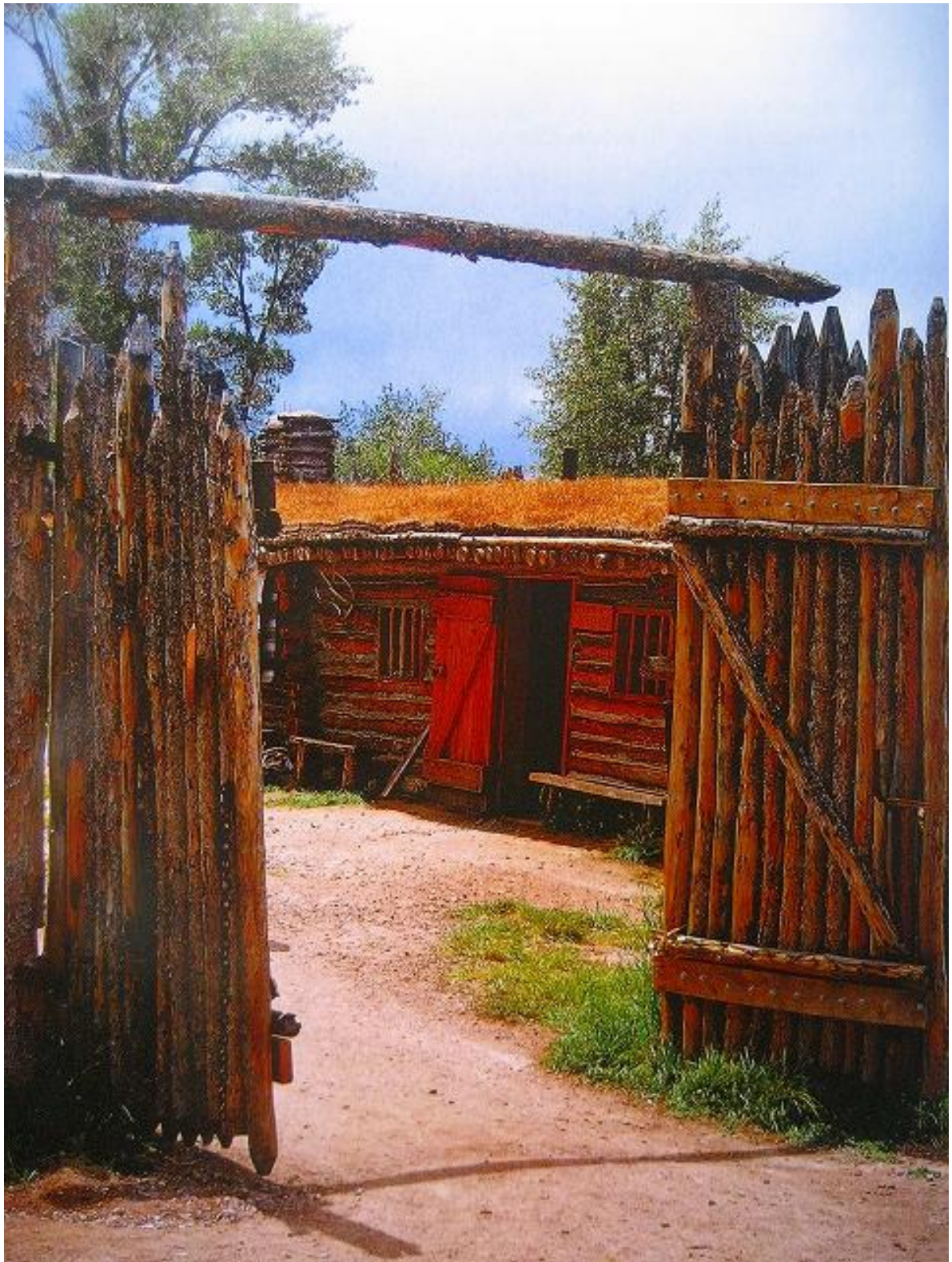
もう一方の側に流れている水は、太平洋よとたどり着いているのだろう。ここは、まさしく、旅人達がアメリカ大陸の西側に足を踏み入れた場所なのであった。

延々と連なる山脈、砂漠、そして、川などなど、大陸として与えられた北アメリカの大きさからすると、びっくりすることは、大陸を乗り越えるための、基本的に未だ開発されていない道で馬車を使うことは難しいと考えていたことではない。驚くべきことはそれがことごとく実現していたということである。South Pass は、この街道の要所であった。毛皮の商人たちは、彼らの仲間の一人が、ここを見つけたときに、そのことをよく知っていて、自分たちの移動のためにここをよく使っていたのだ。Dr. `Marcus Whitman、彼は宣教師であるが、1836 年に、彼が、国旗とバイブルを持って膝ま付き、西部のことを祈ったときに、そのことを知った。(彼は、引き続き、彼の妻 Narcissa と Mrs. Spalding 師とともに旅を続けた。そして、これらの婦人達をオレゴンまで連れて行き、そこで、Narcissa が、故郷に宛てた手紙を書いた。多分、そこには、彼の言いたかった祈りの言葉に満ち溢れていたことであろう。)

普通、移住者たちの幌馬車隊は、この South Pass にとどまるようなことはなく、そのまま、太平洋に流れる泉の在る西の斜面をどんどん下っていった。そこには、また、苦難を伴う山が残っていたが、しかし、彼らはすでに、分水嶺を越えたのだった。



7月ら雪を被った Wind River 山脈。ちょうど、South Pass の来たに位置していて、ここは、South Pass の優しさとは対照的に非常に険しい山である。

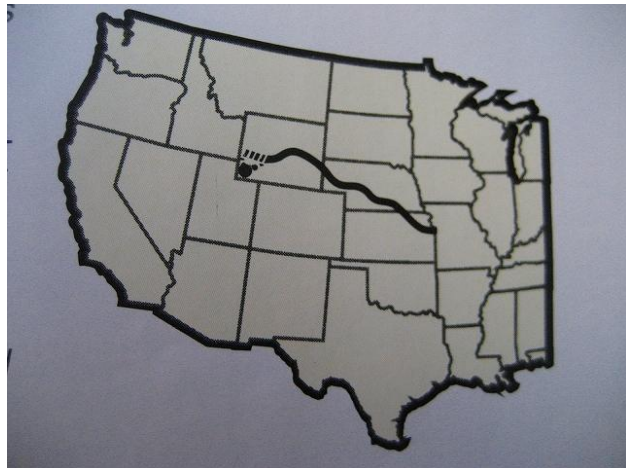


Wyoming の Fort Bridger 伝説的な山男である Jim Bridger は、たいした建築家ではなかった。そして、普段は、あちこちに使い走りをしていた。しかし、彼は、西部がどういうものかをよく知っており、率直にアドバイスをしていた。そして、彼の丸太と土で作った取引所は、沢山のカリフォルニアを目指し、金探鉱をする者達が、オレゴン街道から別れていくまさに、その分岐点にあった。1859 年には、政府がこの管理をするようになり、1890 年まで、軍の基地として活用した。

“私は、**Green River** の **Blacks Fork** の川岸に移住者たちのために鍛冶屋との店と鉄製品を提供する小さな砦を作ったが、これがなかなか繁盛している。こうしたものを店に並べると、これがだんだんいい金になっているが、しかし、それらが金になるまでにも、ほかにも沢山のものが求められている…馬、日用生活品、鍛冶屋の仕事、などなど……”

Jim Bridger , Ex-Mountain man.

移住者たちは、Pacific Springs で、太平洋に注ぐ水を儀式的に飲み、そのあと、うまく、Little Sandy Creek に向けて、丘を下っていった。ここで彼らには選択の余地があった。砂漠のほうに向かって真っ直ぐ進むと、50マイルほどの“水が滑らかにしたような場所”で、ここは、動物にも、また、移住者たちにもきつかったが、しかし、夜、涼しいときに行進すれば、それは可能



なものだった。水もあり、安全であったが、しかし、7日ほど余分な行程であったこの経路は、Fort Bridger のほうに迂回して、Wyoming 砂漠の南のはずれを回り、そして、再び、オレゴンにたどり着くというものであった。そして、もし、運がよければ、そして、迷うことがなければ、西部の代表的な人間の1人とも言える、Jim Bridger に、会うことだろう。

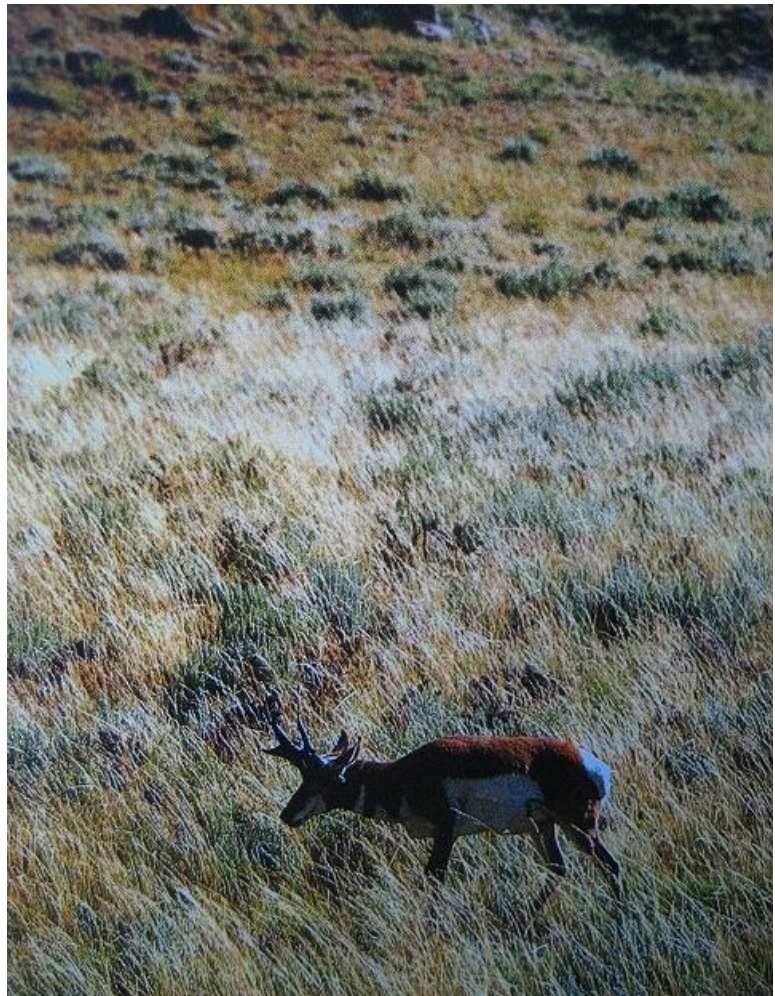
“Old Gabe” は、それらのすべてを見通していた。彼は、'20年代に遡るが、ビジネスを初めて以来、ずっとわな猟師を続けていた。後の歴史家が書いていたが、彼は“32番目の山男”であった。彼はインディアンと戦い、そして、少なくとも三度ほどインディアンと結婚していたが、彼が、グレート・ソールト・レイクを発見し、そして、彼の頭のなかには、大陸の半分の地図が描きこまれていた。Bridger が、この西部の地図が白紙のときに来て、そして、西部の探検家達の手助けをし、そして、今、こうして、東部から来た農民に会い、薬屋として、馬車に一杯の荷物を積み込み、案内書を持って、夏にはオレゴンに行くのだ。毛皮の商取引が成立しなくなったときに、Jim は、上に引用したような手紙を書き、彼の商売の店、Fort Bridger をはじめた。

その商売は、はじめは小さなものであった。1830年代に何人かの宣教師達が、Jim の友達のをわな猟師と一緒にオレゴンに行き、そして、そのルートをはっきりとした。そして、オレゴンへの入植が始まった:1840年には12人、次の年には、この数が倍になり、'43年には125人に、— この数は、山男達を神経質にするに十分な数だった。そして、それは、オレゴンの統治権を主張していたイギリスをも十分すぎるほどの神経質にさせた。1846年

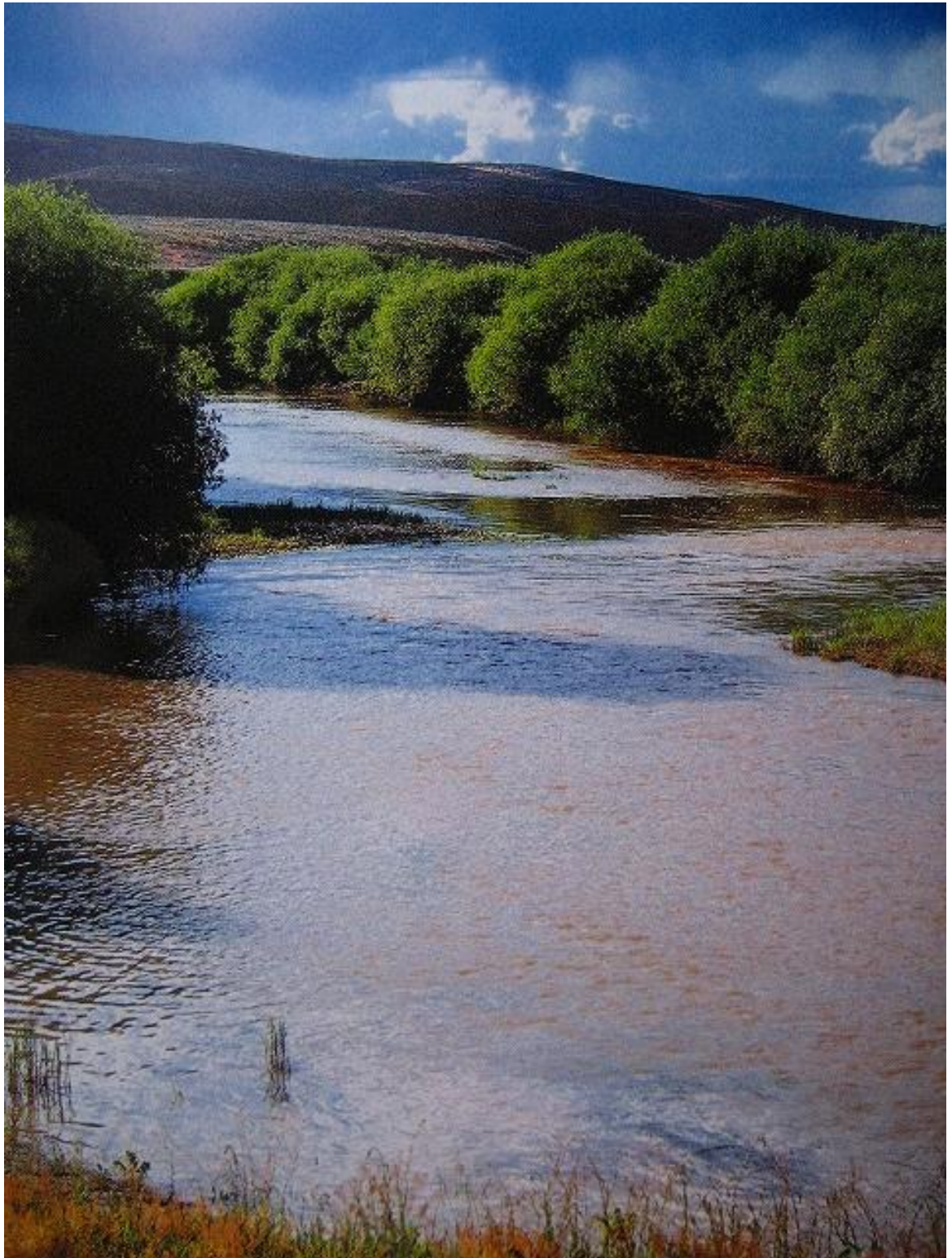
になり、全体の駆け引きは全く変わってしまった。アメリカの新しい大統領、James Polk が、彼が、合衆国のためにメキシコから南西部(カリフォルニアも含め) を、そして、イギリスからオレゴンを手に入れるという、政策綱領で選挙に勝ったのだ。メキシコとの戦争と、戦争の恐怖、そして、イギリスとの政治的な合意により、彼は、それを現実のものにした。こうして、道が開かれたばかりでなく、1848 年にカリフォルニアで、何某かが、金を発見した。これが、歴史のなかでの最大のゴールドラッシュとなった。そして、その半分は、オレゴン街道を通るというものであった。

そうしたことが、Jim の交易所に多大の影響を与えた。Fort Bridger は、一方はオレゴンに向かう街道、そして、もう一つは、カリフォルニアに行く街道と、その格好の分岐点だったわけである。1849 年には、約 450 人ほどのひとがオレゴンに向かい、25,000 人の人がカリフォルニアに向かった。その後、1850 年には、約 65,000 人の人がオレゴン街道を進んだのだ。この街道が、大混乱を招いたときには、非常な長いあいだフェリーの順番待ちをしなければならなかったし、キャンプ場は、家畜で食い尽くされ、薪が姿を消してしまったし、泉は汚れ放題、そして、いつもコレラの心配があった。

Jim は、時には、そこに居たが、いないこともしばしばであった。お金に余裕の在る移住者たちは、ここで必要なものを再購入していた。そして、カリフォルニアに向って分かれていくもの、オレゴンに向かって来たに下っていくものが、別れの言葉を交ぜ合わせてした。



アンテロープ、遠くに鹿が見える。South Pass を過ぎると、移住者たちはめっきりバッファローを見ることがなくなった： おそらく、若い、石油探査の者達が楽しんだのだろう。しかし、ここには、水も あり、狩猟をするには事欠かない地域だった。



Idaho の Bear River. ここで、Bear River は、北の方角に大きく曲がっている。そして、再び、南に大きく湾曲し、最後には、Great Salt Lake に注ぎ込んでいる。熊を見つけ、そして、網に流れ込む川がないこの大平原を肌で感ずることが、^{*} 西部の地理を紐解く鍵なのであった。開拓者たちは熊を愛し、そして、日誌は、農民達がこの溪谷を見ることがどれだけ素晴らしいことであったかを記述している。それは紛れもないことで、沢山の農場がここに今でも開拓されている。

“この低地は、数マイルにわたり、生命の活力に溢れた光景だった……あちこちで牛の群れが草を食み、そして、そのなかの牝牛が、ベルを鳴らしている……灌木や草は、選択された服を着ているようだ;旅人達の一団の中の男達は、会話をしたり、本を読んだりしている;他の者達は、草原や丘をあちこちブラブラ散歩したり、; 中には、川で体を洗ったり、魚とりをしたり、猟をしたりしている。”

J. Goldshorough Bruff, 1849.

ここまで来ると、幌馬車隊は、うまく前進していた。そして、確かな足取りで、Fort Bridger を後にしていた。正しい方角の北西に向かっての行進は、とても素晴らしいものに思えた。間違った方角に馬車を引っ張っていくときの精神的な焦りが、まさに、そうして出来た道は、大きく曲りくねり、いろいろな横道や近道を作り出していた。そうしたなかで、あるものは改良されて、それが今度は主道路になることもあった。他の道は、その最初から曲りくねっており、いろいろと問題があった。それは大体が川であった。



幌馬車隊が Muddy Creek の溪谷に向かって出発すると、直ぐに、Bear River に出、そして、来たに向きを変え、川を下っていった。溪谷を 15 マイルほど下がると、そこで、右からやってくる幌馬車隊に出会った。その新参者たちは、Fort Bridger を跳ばしてきた人たちだった。その代わり彼らは、Big Sandy Creek で休息をとり、そこから、入れることの出来るものには、とにかく水を一杯入れて、Wyoming 砂漠を真っ直ぐ横断してきたのだ。これはかなりの強行軍で、かなり危険を伴うものであった。45 マイルほどの行進のあと、通常の下で、三日間ほど旅をし、彼らは、Fort Bridger を経由してきた馬車体とであったというわけである。ここには、そのほかにも近道があったが、しかし、強いて言うなら、やっぱり正規のルートを通るのが、より状況が良かった。

開拓者達は、Bear River のほうに歩いて下るときには、あのキーキーという聞きなれた馬車のきしむ音を聞きながら、周りの景色を見ていた。もし、天候の状況がよいのであれば、この辺りは、この街道の中でも一番素敵な場所の一つであった。よくなれた農民の目で見えていた開拓者達は、肥沃な土地で在ること、豊富な水が在ることに気がついていて。そして、心には、この次には故郷にあてた手紙を書こうと考えていた。慎重にか、或いは、

気軽にか、彼らは、次の年には、また別の場所に移住することを頭に描いていた。

このオレゴン街道では、事実、非常に沢山の苦難が伴った。コレラは、ある年には、10 パーセントほどの人々を殺したし、子供達は、馬車の車輪の下で大怪我をしたり、また、男達も、彼らの家族の見ている前で溺れたりしていた。しかし、また、多くの旅がうまく運んだことも事実であった。数千人の人たちにとって、この旅は、彼らの生涯の中での冒険であった。旅の間中書き綴られた、非常に沢山の日誌が、こうした人々が、それまでに経験をしたことのない様々な苦難に対処してきたかを物語っている。彼らが何処に居ようとも、通常的生活の平凡さが破られていたのだ。彼らは、終わることのなく延々と続く大平原を横切り、Chimney Rock を、そして、Devil's Gate を見てきた。故郷に居る誰が、それを想像することが出来るだろうか？ 彼らは、バッファローの群れが疾走するときに、大地が揺れ動いていると感じた。そして、文頭に書かれているBruffのようなキャンプの晩を長く思い出していた。この独特の宵は、他の晩と同じように、

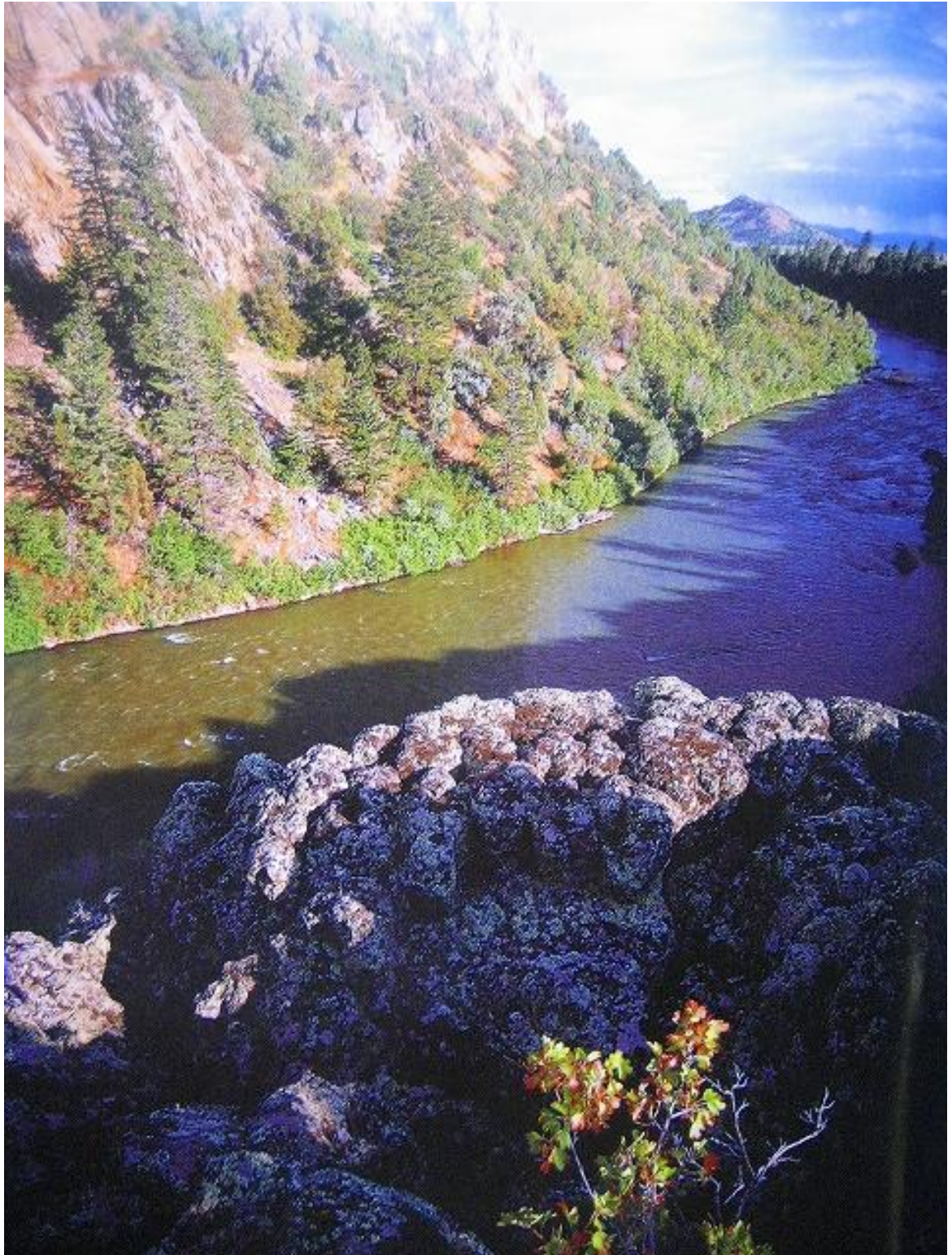


“楽器と、そして、気分をほぐす歌で”終わっていた。



Bear River 溪谷の花々

オレゴン街道には、悲劇ばかりがあったわけではない。確かに、この行程は簡単なものではなかったが：その行程の長さや風景からすれば、それは確かである。しかし、病気や、事故から解放されると、この困難な旅が、しばしば、開拓者達の生活の中でも素晴らしい時期だったと思われていることも事実だ。



Idaho の Sheep Rock 勤勉の Bear River。 Sheep Rock の忽然と現れた火山性の溶岩が、Bear River の流れを南に曲げ返している。開拓者達は、ここからしばらく Bear River 溪谷を楽しんだが、しかし、南に向きを変えるここでは、彼らは、ここをのぼり、北に向きを変えて、Fort Hall に向かった。かつては、開拓者達を興奮させ、そして、喜ばしていた炭酸ソーダの泉は、現在では、Soda Point Reservoir の地の地下深くに沈んでしまった；しかし、Steamboat のほうは、今でも活発に温泉を噴出している。

“Sody Srring は、非常に奇怪な場所で、そこには、沸騰水が大地から湧き上がっているところが沢山あり、この水に、砂糖をちょっとだけ、少量の水に溶かし、この水を蒸気のなくなる前に飲むが、それを全部呑むのはなかなかいらいらするものである。幾つもの噴水が出ていて、それが川に流れ込んでいる光景を沢山見ることが出来る。”

William J.J. Scott , 1846.

Bear River Valley を抜けて Fort Hall に行くには、10 日間ほどの行程だった。だいたい 5 日間ほど進むと、川は Sheep Rock、或いは、Soda Point と呼ばれている場所に出くわし、そこから南に向きを変えて、Great Salt Lake を目指した。ここで、開拓者達は、この街道の別の不思議なもの、つまり、温泉を楽しむために馬車を止めた。Mammoth Soda



Spring は、もっと 有名な Yellowstone National Park の Mammoth Hot Springs と殆ど同じ程度の大きさのものであった。より現実的には、多分、Beer Spring と呼ばれていたが、このことについては誰も確信できない。沢山の山男達は、その水を飲むと酔っ払うと明言していて― それ以来、彼らはそんな風に言うようになった。

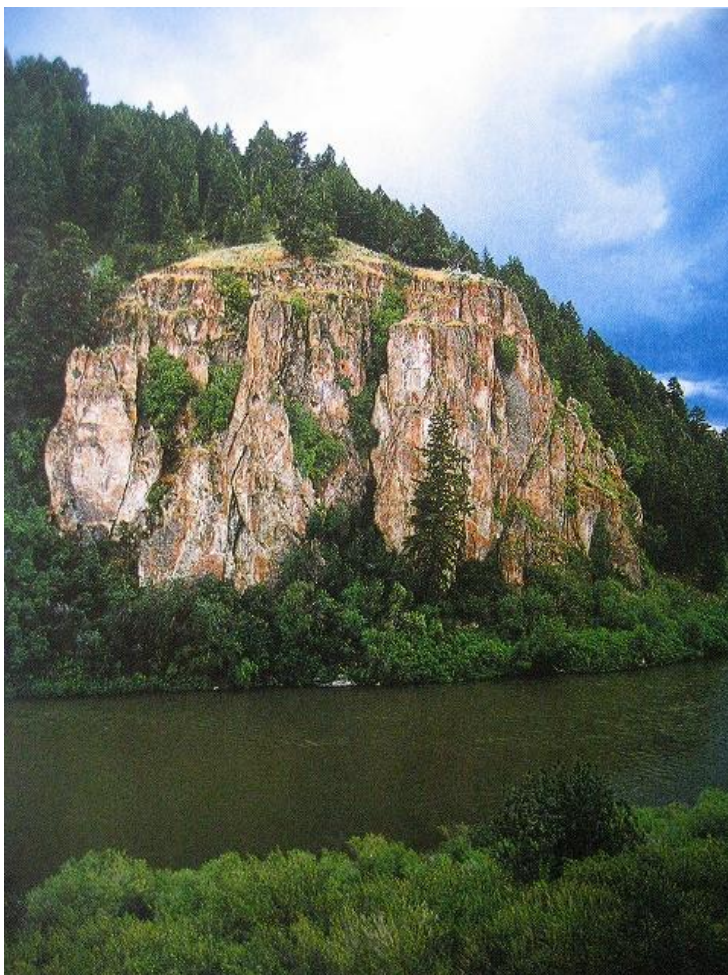
‘33 年に、Beer Spring の水はラガービールのような味がすると報告されていたが、殆どの開拓者達は、それはちょうど、硫黄分の多い硬水のような味がすると思っていた。彼らは、この炭酸塩の濃度の高い水を飲み水とするために、いろいろと香料を添加していた。ある手紙には、かんきつ類の汁と砂糖を加えるようにすればよいといていた。Hooper のような、他の温泉は、随分と大きくて、泳ぐことが出来るほどのものであった。そして、極めつけは、Steamboat Spring であった。Steamboat の地下水系は、定期的に噴出する“間欠泉”を作っていた。そして、近くの噴気孔では、1/4 マイルも離れた場所からでも聞くことが出来る、ちょうど、蒸気船が出すような音を響かせていた。

この温泉は、気晴らしを作ってくれていた。Enoch Conyers、彼は、1852 年に仲間達とともにオレゴンに向かっていたものであるが、彼は、自分たちの仲間の Doyle という名の男が、その噴き出している温泉の上に乗り Steamboat をとめることが出来るかどうか賭けをしたと言っていた。誰かが賭けたので、Doyle は、パンツを脱いで、その間欠泉の上に座った。すると、直ぐに、“Doyle が、猛烈な勢いであがったり下がったり揺れ動いた。”のだ。彼の友達が手助けをして彼をしたに降ろそうとしたが、しかし、Doyle にもっと体

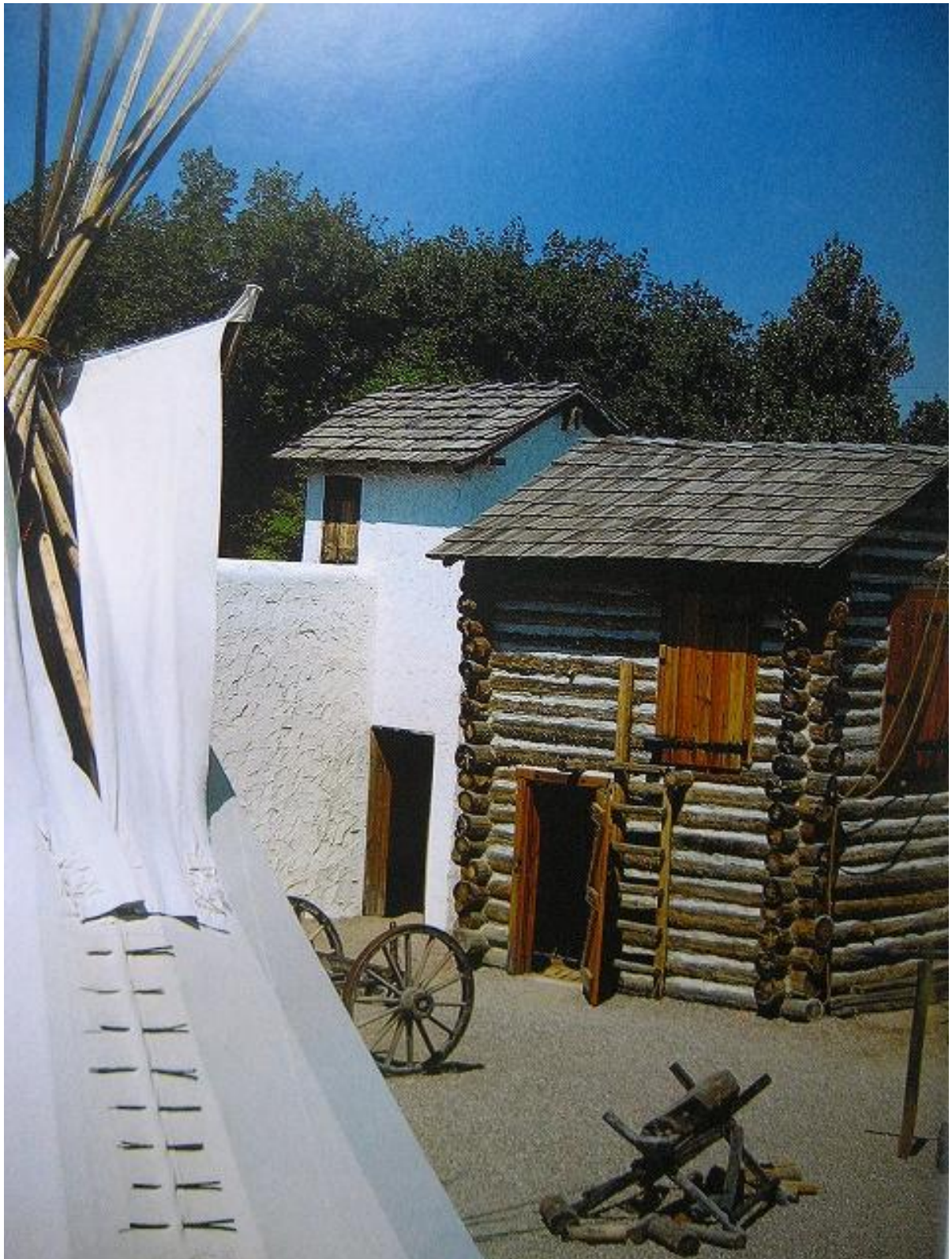
重がかかったような形になり、間欠泉の勢いがますます強くなった。そして、Doyle はまるでコルク栓のように軽々とあがったり下がったりし続けた。Doyle は賭けに負けた。“少年達よ、悪魔を地下に閉じ込めようとしたって何の役にもたたないよ。そうしようと思って力をいれれば入れるほど、悪魔は、激しく跳ね除けてくるから、そんなことはしちゃいけないことだ。私は、今、ビーフステーキのように粉々にされてしまう。”

Soda Springs は、経験的につくられた別の近道の出発点であった。開拓者の Bartleson-Bidwell の幌馬車隊が 1841 年にここから離れていったときにこの近道が出来た。オレゴンに向かう人たちは、Fort Hall を目指して北に進路をとったが、一方、ミズーリのウェストンの Hohn Bidwell と、彼の仲間の 32 人ほどの一行は、カリフォルニアを目指した。Bidwell の一行は、Bear に沿って川を南に下って行った。彼らは、カリフォルニアに辿りついたが、しかし、Great Salt Lake の北にある砂漠でとても難儀をし、さらに、Sierra Nevada を越えるときには、もっと苦難の時間を体験した。このため、南の近道は、それ以後は現実のものではなかった。後に、49 ナーズの Hudspeth のグループは、この場所を西に向かう地点として選択した。そこは、ただ、長いということより、ちょっとだけ荒れ道と言うだけだった。そして、25 マイルを節約できたので、後に、

“Hudspeth 近道”として、一般的なルートとなった。しかし、この初期の頃には、幌馬車隊は、Fort Hall を目指して、北に進路を取っていた。



Idaho の Sheep Rock と Bear River 1842 年に、探検家であり、意気軒昂な情報提供者だった John C. Fremont は、ここで、マウンテン・シープを見、それにちなんで、ここを“**Sheep Rock**”と名づけた。Fremont の報告書は、オレゴンの開拓者達により、案内書として広く遣われていた。

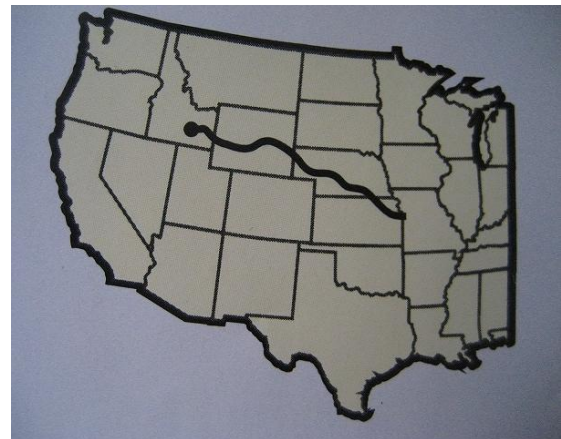


再建された Idaho の Fur Hall ここは、1834年に交易所として、ボストンのビジネスマン Nathaniel Wyeth により開設されたものである。Wyeth は、毛皮商人としては新参者であった。彼は、手際よく要領を身につけたが、しかし、すでに活動していたイギリスやアメリカの毛皮取引の会社に対抗することが出来なかった。1837年に、この会社をイギリスに売却し、この会社がこの地を非常に繁盛させた。毛皮の取引が終了すると、この地では、オレゴンに向かう人たちに物資の供給をする場所となった。そして、1855年には、放棄をされた。

“……沢山の傷のついていない布を使い、わずかの赤い縁と、2・3の青い切れ端を使って堂々たる国旗を作った；そして、それに駄目になった火薬とそれをひどい酒に浸して、敬意を表して敬礼をした……この要塞は、隠れてこそそやってくるインディアンに対する恐怖と、逃亡した猟師達に対する安全のしるしとして建っていた。

Nathaniel Wyeth, 1834.

街道は、Bear River から北に進路をとり、Portneuf River に、ここに沿っていけば Fort Hall に辿りつくが、この行程は険しいものであった。しかし、それまでに、道は固められ、沢山の旅人達は、この道を主として選んでいた。九日、ないし、十日で、彼らは、当時、野生生活におけるヤンキーの企業家魂の目立った前哨基地である Fort Hall に着いた。



Nathaniel Wyeth は、彼が毛皮の取引で、機会を見つけたと思っていた時に設立されたニュー・イングランドの氷商人であった。商売に長けた人たちが彼をだまし、彼は、1834 年に、最後に、自分の持っている、3,000 ドルほどの価値の在る商品をまとめて毛皮商との取引に行ったが、そこには、誰も相手が居なかった。やけくそになって、彼は、ここ、Snake Riverにとどまり、そして、積荷を降ろし、持っていた商品を売りさばくために取引所を作った。そして、ここを Fort Hall と呼んだ。彼は、イギリス人とアメリカ人の両方と張り合った。この冒険はうまくいかず、1838 年に彼は、ここを、British Hudson's Bay 会社 — これは、U.S.とイギリスとのこの領域における合弁会社のときであったが、ここに売却した。こういうわけで、ここは、Independence から 1,200 マイル離れた場所であったが、オレゴン地域に向かうアメリカ人の新開拓者達に歓迎され、彼らに物資を供給するイギリスの交易所と言うことになった。

この砦に來た最初の車は、宣教師の Marcus Whitman 師と Narcissa が 1836 年に、Marcus が、彼の馬車が動かなくなり、二輪車を押して來たものだった。後に、この砦では、1840 年にここにやっけてきて、自分たちの荷物を馬に載せて運び、車をこの砦に残していった旅人がいたことから、その時以来、独自の車を持っていた。しかし、1840 年代の、移住者が増えていったときには、次第に、やはり、馬車が主要なものとなっていた。このとりでにやっけてきた、沢山の訪問者の中には、別の野心家達もいた：カリフォルニアからやっけて來た書売人達である。彼らは、この砦に滞在し、そして、カリフォルニアのことを自慢しながら、オレゴンに向かう移住者たちといろいろな話題の話しを始めた。中に、カ

リフォルニアで成功したものもいたのだ。

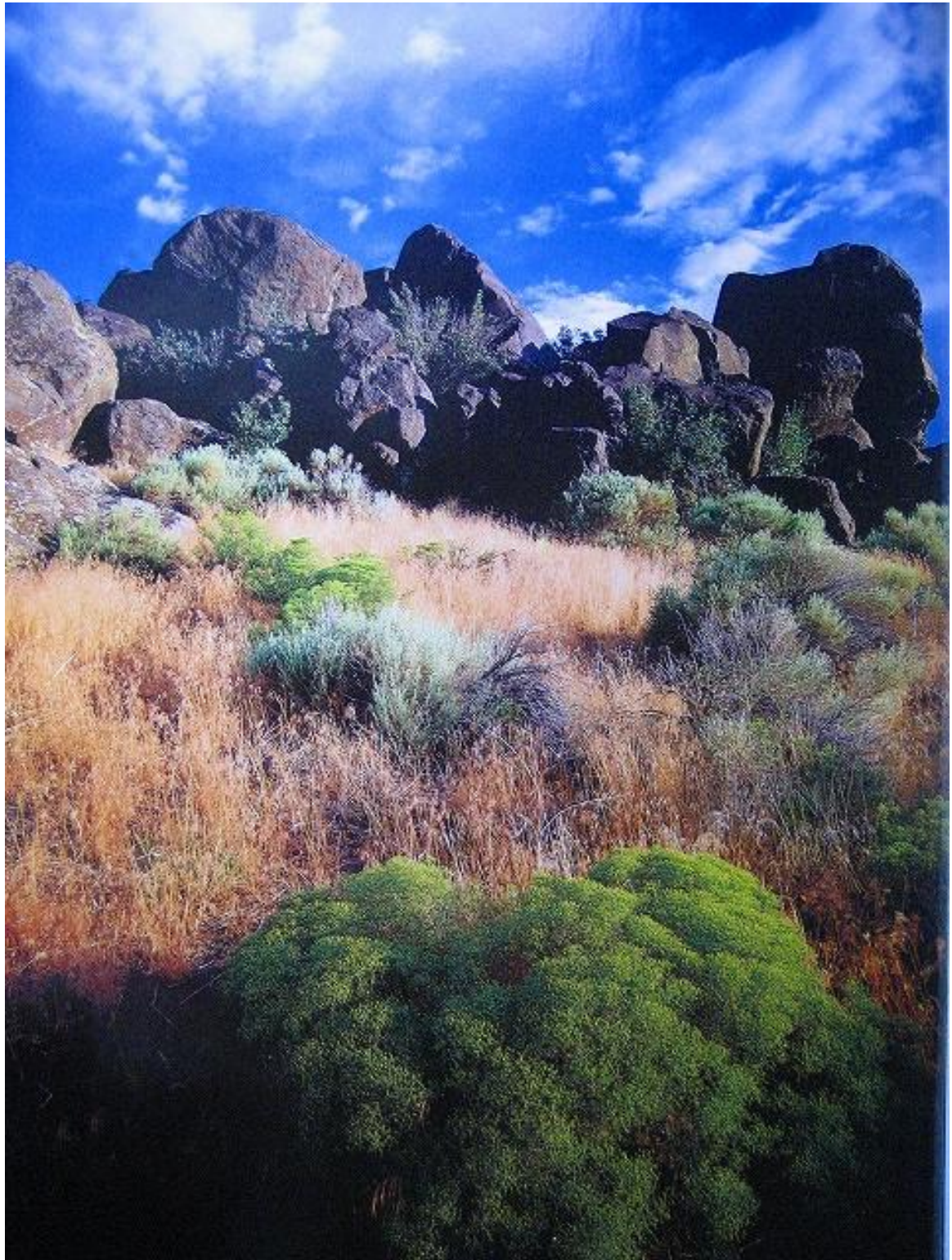
砦は、1855 年には、放棄されてしまったが、それでも移住者たちはこの放置された建物を使ったり、周りの牧草地で備蓄されていた草を食べさせたりして、1863 年まで、ここを利用してキャンプをしていた。その年に、とてつもない洪水が発生して、残っていた建物やそのほかのものを流し去ってしまった;しかし、その時までは、幌馬車の大部分は、Hudspeth Cutoff を使い、ここ以上は遠くに行かなかった。

Fort Hall から、オレゴン街道は、西に向かいつつ再び、少しだけ南にうねっていた;そして、再び、山々が回りを取り囲むようになった。ここで、人々は、Snake River に沿って旅をし、その後、300 マイルほどの行程になった。そして、なんとと言う川だ！ 移住者たちも誰もいままですんな川を見たことがなかった。彼らは、一マイルほども幅のある Platte 川を、幌馬車を引っ張って渡ってきた。しかし、この川は、なんと、溶岩でできた溪谷の割れた岩壁に激しくぶつかりながら流れるという恐怖に満ちたものなのだ。それは、“幌馬車には、きつい、まさに、岩だらけの道であり、……川は、岩が垂直に 200 フィートも切り立った断崖の土手になっていた。” 彼らは、まさに、急流で、彼らがそれまで見た滝の中でもおそらく一番騒々しい、American Fall を通過し、そして、ここは、この流れにのまれ、そして、溺れた沢山のアメリカ人のわな猟師達にちなんでこの名前が付けられたという話を繰り返していた。

滝を過ぎ 2・3 マイルほど行くと、道は、大きな岩の中にできた割れ目を通り過ぎた。初期の頃の旅人達は、この場所に気がつかなかったと思われる。しかし、1862 年は、ここに、Massacre Rocks という名前が付けられた。



Idaho の Fort Hall に再建された鍛冶屋　　沢山の幌馬車隊は、自分たちのなかに鍛冶屋が居たが、大事な修理は、街道筋に在る用品屋でむ、もっとしっかりと治すことが出来た。Fort Hall にある鍛冶屋もその一つである。

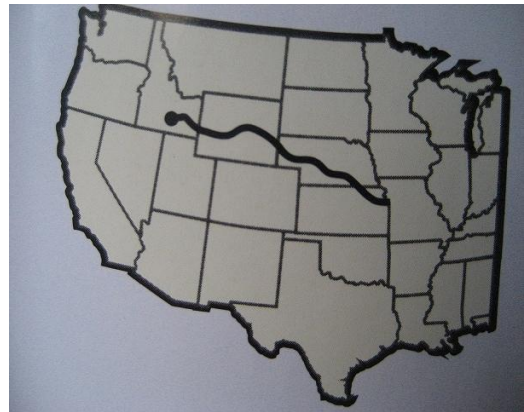


Idaha の Massacre Rocks 幌馬車隊が、1862 年 8 月 9 日に、インディアンの待ち伏せにあった場所。 引き続き、小競り合いがあり、七人の移住者が殺害され、そして、少なくとも、六人が重傷を負った。インディアン側にも、被害があったが、その数ははっきりしていない。幌馬車隊の全体を襲撃することは稀なことで、円陣を組んだ幌馬車を、ただ、一度だけ襲撃するというものである。ここで起こったような襲撃事件は、Snake River に沿った、この街道筋では、度々起こっていた。

“なんたることだ、John、インディアンが幌馬車隊を虐殺し、彼らの持ち物を略奪した。彼らは、われわれからほんの少し離れたところにいるのだ。”

Massacre Rocks での事件を報告する移住者、 1862.

1862 年の 8 月 9 日に、一群の幌馬車隊が、Snake River に沿って、岩だらけの道を進んでいた。11 台の雄牛に引かれた馬車に 25 の家族が乗っていた。Fort Hall からの旅は、熱く、乾燥し、そして、歩みはゆったりとしたものだった。そして、Raft River に到達するには、まだ、何日かの旅をしなければならなかった。どうして、この幌馬車隊が、そんな運命になったのかを知る人は誰もいないが、この幌馬車隊が、黒い大きな巨石が街道にゴロゴロしているところで、インディアンの待ちぶちが泉のごとく出てきた。多分、それは、数分の出来事ではなかったかと思われる。何故なら、津語の幌馬車隊が、すでにそれほど遠くないところまで来ていたからである。三人の移住者が殺され、1 人の婦人が傷を負ったが、この人は後に死んでいた。そして、他の人たちはひどく傷つけられていた。



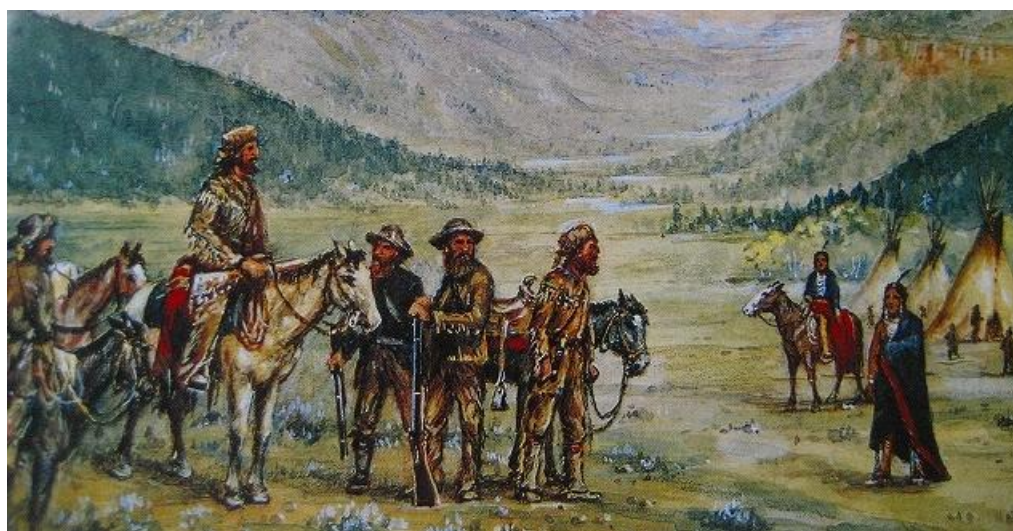
インディアン達は、荷車から、自分たちの持てるものを略奪し、連れていた動物、実は、これが彼らの実利であったが、これを持ち去り、どこかに姿を消した。一方、衝撃を受けながらも、生き残ったものが、何とか気を取り戻し、そして、1 人で馬に乗ってやって来た。彼は、自分を仲間に入れてくれる別の幌馬車隊探していたが、いまや、次の幌馬車隊に、インディアンの襲撃が起こったこと、そして、近くにインディアンがいることを告げるために、馬を飛ばして走り出した。

次の幌馬車隊は直ぐ近くまで来ており、馬車を注意深く、しっかりとつなぎ、そして、移住者たちが一緒になり、みんなで話し合った。まず必要なものは、水と、牛に与える草であった;旅にどうしても必要なものは、不幸に備えて、そのままにしておくわけにはいかなかった。立ち往生している幌馬車隊を助けるために、散らばってしまった家畜を集め、一方で、他の人たちは、衝撃を受けたひと、そして、なくなった人たちの気持ちをやわらげ、移住者たちは、それぞれ、旅をともにすることにした。そして、水と草が見つかる直ちにそこに立寄った。気の休まる夜を迎えることはできなかった。

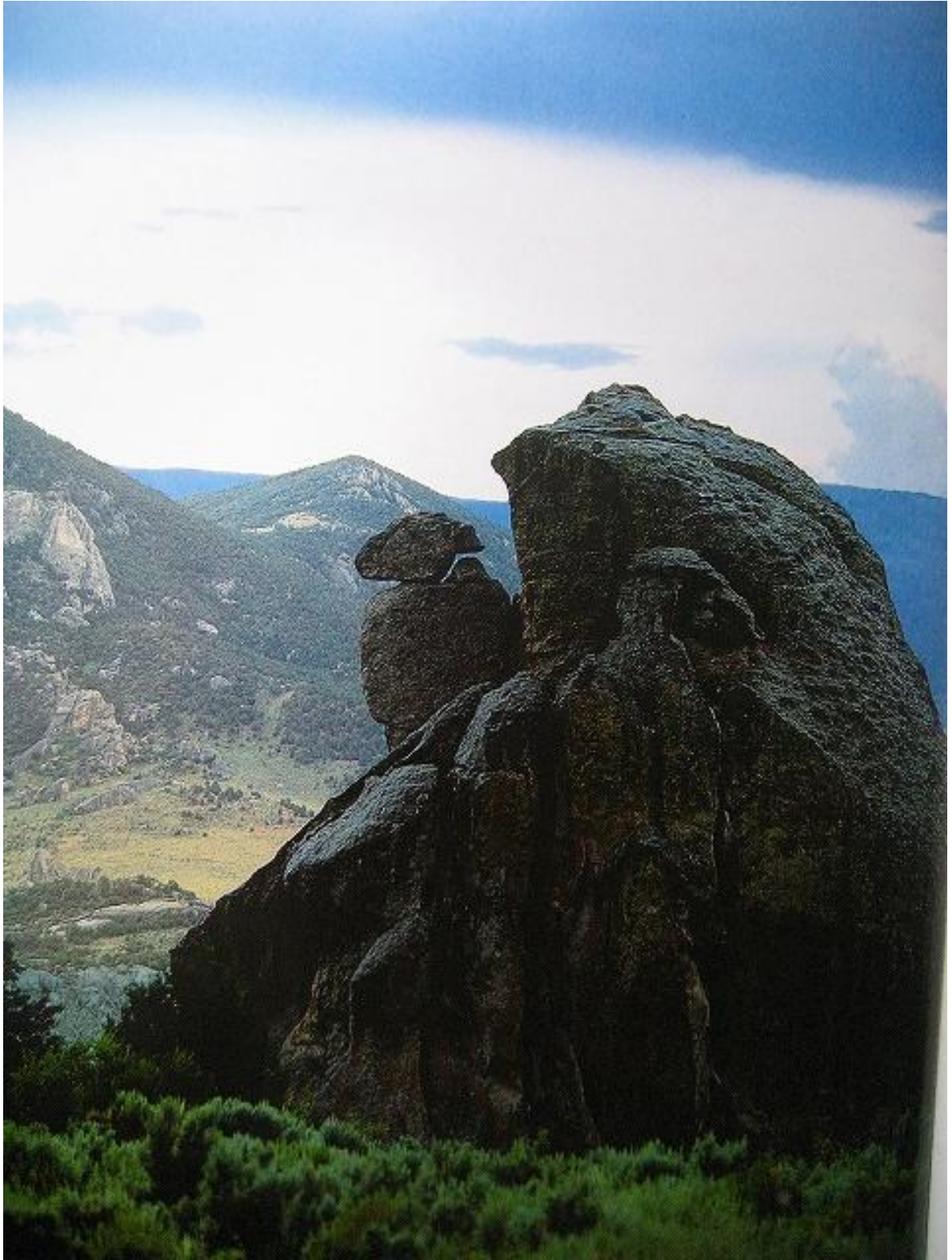
次の日、別の幌馬車隊がやって来た。彼らは、すでに、生き残った移住者からの話で、インディアンの待ち伏せのことを知っていた。そして、事件の起こった血と、残骸の残る場所を通り過ぎていった。話し合いの結果、3 つの幌馬車隊から、30 人ほどの人たちが集められ、一緒になって、襲撃したものたちの跡を追跡した。そして、7 マイルほど離れ

た場所で、彼らは、未だ沢山の戦闘能力を余したインディアンを発見した。インディアン達は直ちに襲撃をしてきた。移住者たちの戦闘隊が、3 マイルほど、後退したところで、インディアン達は、何処かに消えた。動揺した移住者たちは、インディアンが立ち去ったことを確信したあと、戦闘で犠牲になったものを回収した。彼らは、二人を確認したが、そのうちのひとは、頭皮が剥がされており、そして、三人目の行方不明になった男は、その後もどうなったのか確認できなかった。この時まで、さらに他の二つの幌馬車隊が、キャンプにやってきた。今や、全体の数、200 の幌馬車と 700 人もの人に膨れ上がり、彼らは、一緒になって、さらに 13 マイルほどの Raft River までの道のりを、無事、旅することができた。

待ち伏せのニュースは、噂と一緒に、そのごっちゃになったものが区別のつかなくなるまで、驚くべき速さで広まっていった。こうした戦いが起きたことは確かであるが、しかし、それは、その話しの中のほんの一部に過ぎない。白人とインディアンとの遭遇は、混乱されたものであり、かつ、複雑なものであった。インディアン達は、幌馬車隊を案内して、草原に導いていた；インディアンは雄牛を盗むこともあった。インディアンは、危険な渡河では、幌馬車隊を導き、安全に川を渡ることができるように手伝っていた；インディアン達は、極めて侮辱的な安売りの商売を強いていた。彼らは、生活に必要な食料をかすとしていた；インディアン達は、砂漠の横断で立ち往生をしていた移住者たちに、水を持ってきてくれた。移住者たちは、わけもなくインディアン達を撃ち殺した；インディアン達は、また、いわれもなく移住者たちを撃ち殺していた。真実は、両方の言い分を聞くことが一番良い方法だ；しかし、残念ながら不幸にも、インディアン達のオレゴン街道についての物語は、いまだ何も報告されていない。



William H. Jackson によって描かれたインディアンと山男達との遭遇の場面。ヨーロッパ人とアメリカ原住民達との出会いは、何処でも複雑なものであった。そして、とりわけ、オレゴン街道では、その傾向があった。日誌では、インディアン達から助けを受けた困惑状態の開拓者達から、大陸を横断している移住者たちに物乞いをしているインディアン達まで、両方の側での野蛮な残虐行為を赤裸々に描いている。

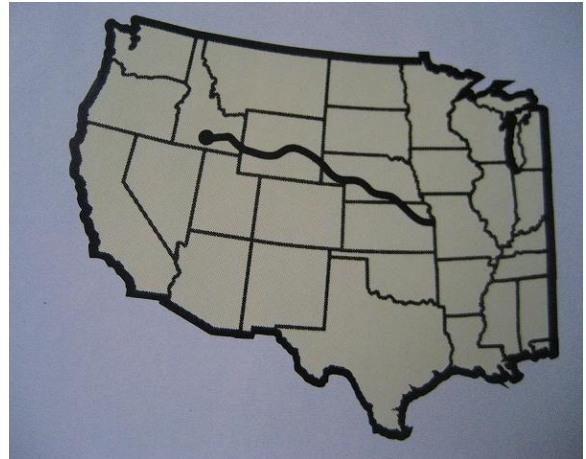


Idaho の City Rock このあと、カリフォルニアに行く道は、オレゴン街道から分岐していく。その異様な形から、カリフォルニアに向かう探鉱者や移住者により、想像的な名前が付けられた。幾つかの、よく使われた近道や、わき道がここで合流していた。そして、移住者たちは、ここに近づいてくる幌馬車隊の待ち上げる土埃を見ることが出来た。

“この辺りは、**Fort Bridger** の街道に近いところで、この道に沿って何マイルも空に誇りが立ち上っているのを見ることができた。金鉱の在るところに通じる道は、どの道も偉大なるエルドラドを夢見る旅人達でごった返していた。今日は、非常に荒れた道を通り、水もなく昼を迎えた。

Bennett C. Clark, 1849.

Snake River を 2・3 マイル下ると、Raft River が南から合流してくる。ここは、それほど目だつような場所ではないが、— 多くの移住者たちは、この川が、いかだを浮かべるほど、そんなに大きくないので、その名前に由来に不思議に思った。— しかし、この川は、別の意味で非常に重要な決断をする場所であった。この Raft の川を遡っていけば、カリフォルニアに行くし、川を渡れば、オレゴンに行くことになっていた。



最初、東部の新聞の編集者が“約束された運命”と言明した魅力は、“西部”であった。合衆国の誰もが、そこは、かなり不確かなものはあるにしても、広大な領地で、豊かな場所であると考えた。1800 年に、大行事が行われたときには、オレゴンがまず注目を浴びた。その理由の一つは、オレゴンがとても都合が良かったからだ。イギリスとの領地の共同所有という契約は古くなり、それが、アメリカ人の移住に引き金を引いた —

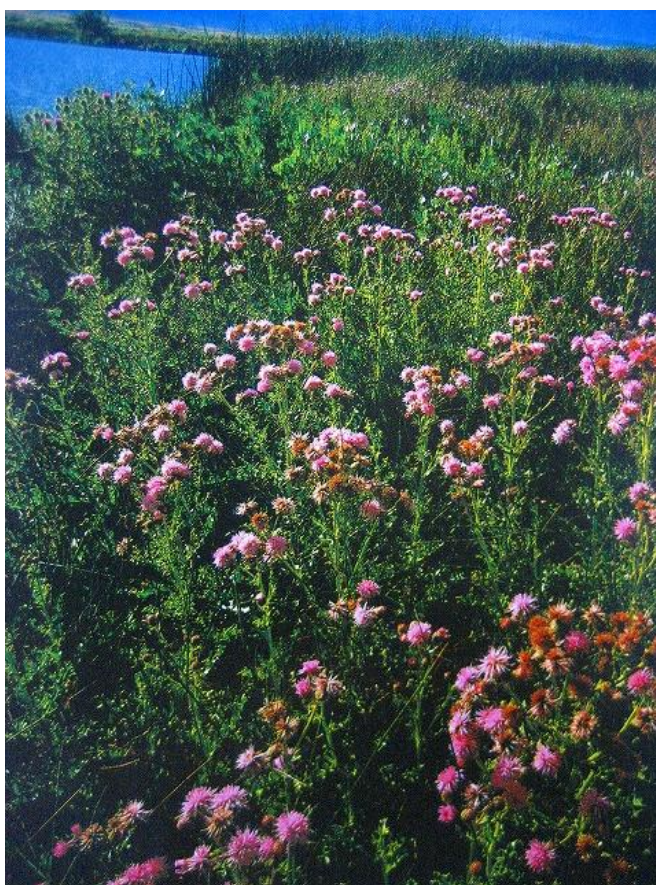
カリフォルニアは外国だったのだ。合衆国でさえも、カリフォルニアがスペイン領、そして、後には、メキシコ領となったのだが、これに異議を唱えていなかった。事実、そこは、大きな空白地帯であった。多分、うっかり誤りをしてしまうかもしれないが、しかし、そこは、オレゴンに行くよりももっと厄介なところだったのだ。

カリフォルニアの気候も、また、違っていた。東部の人たちのこの両方の地域に関する考え方は、オレゴン、もしくは、カリフォルニアにしても、それは、大雑把なものに過ぎなかった。それでも、人々は、カリフォルニアは砂漠で(暑く、そして、砂地と考えていた)、一方、オレゴンは、ずっと親しみやすく、ましだ(高い木があり、気候は穏やかで、土地は肥えていると考えていた。)と言うことをなんとなく学んでいた。次のような数を見れば、このことが良く分かる。1842 年には、13 人に移住者がオレゴンに向かったが、この時、カリフォルニアに向かったものは居なかった。1842 年には、125 人がオレゴンに行ったが、この時もやはり、カリフォルニアに行く人はいなかった。そして、1845 年になり、2,500 人がオレゴンに、260 人がカリフォルニアに向かった。ところが、1849 年に異変がおこった。450 人がオレゴンに行ったのに対し、なんと 26,500 人がカリフォルニアへ！

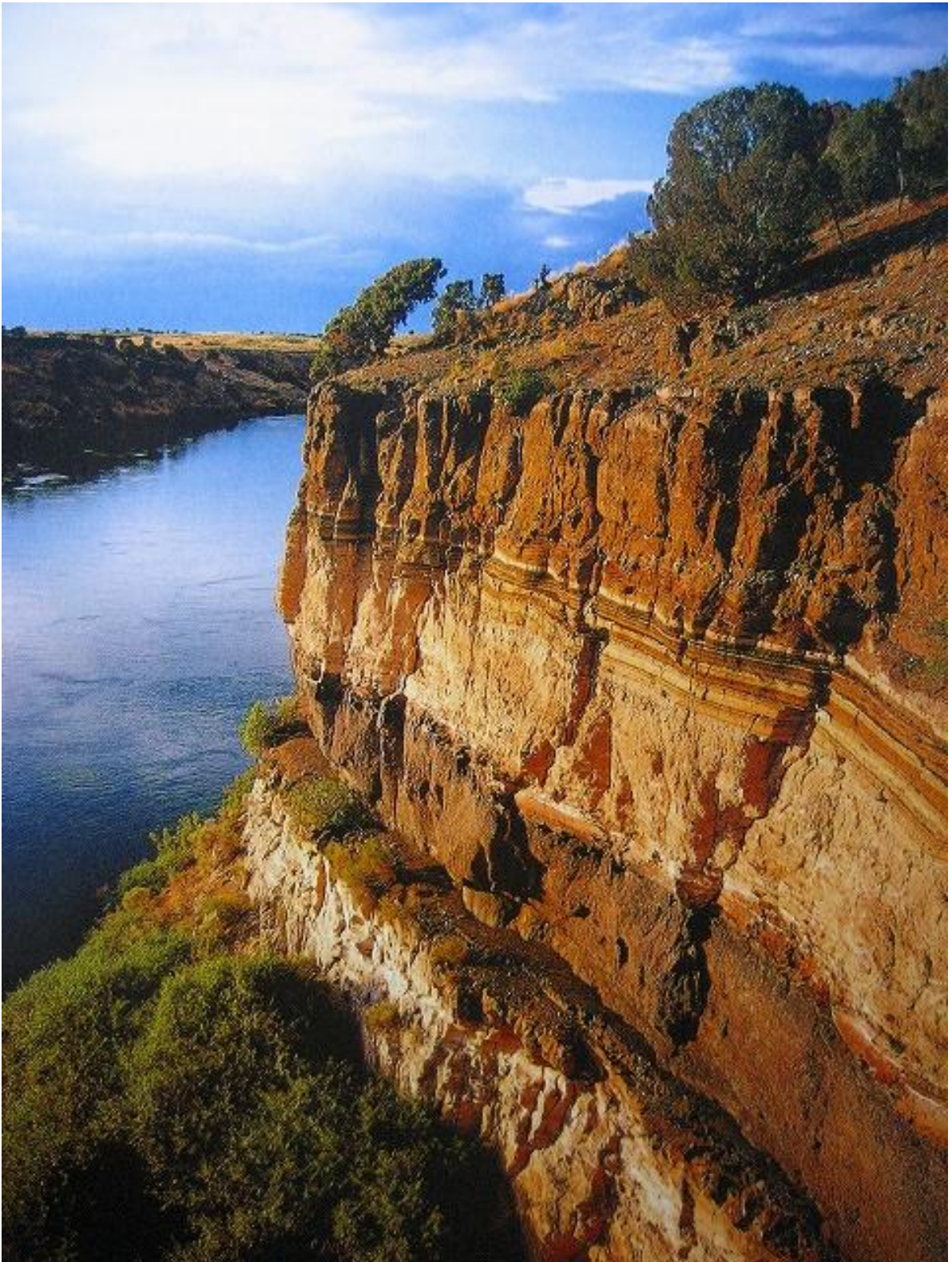
これが世に言う 49 ナーズだ。彼らは Sutter's Mill に降りる虹の端に金を求めて押し寄せた人たちだった。

Raft River は、カリフォルニアに向かう最後の絶好のチャンスで在った。そして、ゴールドラッシュが起こると、沢山の人がこの選択をした。彼らは、Raft River に沿って旅をし、その支流の適当なところでキャンプを張った。ここが、幻覚の“City of Rocks”と言うわけだ。非常に危険なくだり道を過ぎると、Goose Creek にたどり着き、ここで、Humboldt River に、“流れが飛んでいる”のだ。Wyoming にあった Sweetwater のように、Humboldt は、アメリカの西部開拓の発展を手助けするように設計されていたように思われる。この川は、砂漠地帯を流れ、そして、魅力的ではないにしても、そこには、水があり、間違いなく、350 マイルの道を正しくガイドしてくれていた。そして、それが突然と消えているのだ。

開拓者達は、こうした、大きな川が忽然と沼地や、塩でできた池“Humboldt Sink”と呼ばれているが、そこで、忽然と姿がなくなってしまうというような、西部の地域における不思議な現象を度々体験しなければならなかった。しかし、幸運にも、そのあとに砂漠を横断しなければならないのに、こうした姿をなくした水が草木を育ててくれていたのだ。ある移住者は、彼の靴に牛に食べさせるための草を一杯詰め込み、水を汲んでいた。そして、この砂漠の横断は決して楽ではなかったが、やがて、Truckee River、この川は、移住者たちを大いに喜ばせてくれたが、この川にたどり着くことが出来た。いまや、Sierras の山々に登るところまで来ていた。彼らは、Donner 砂漠の脇をとおって、自分たちの牛を殺してしまう独特の野生のサトウニンジン（Sagebrush）のことを心配していた。そして、すばらしい、Bear Valley へと下っていったのだ。そこに、商人たちの選択が横たわっていた；“発掘地”がいたるところにあり、彼らは、ショベルを手にしたのだった。



Raft River が、現在の Snake 地域の Lake Walcott Reservoir で、Snake River と合流している。ここは、カリフォルニアに向かう人たちが、オレゴン街道と分れて南に行く、最後の別れの場所であった。初期の頃は、あまりこの道を行く人はいなかったが、ゴールドラッシュの後、様相は一変した。ここから、黄金郷までは、40 マイルの砂漠の辛苦の横断と、シエラ山脈越えをふくめ、約二ヶ月の旅であった。



Idaho の Snake River Raft River のこの近くあたりで、カリフォルニアへ向かう移住者が別れて行った。ここからあとは、オレゴンに定住しようと言う人たちだけとなった。移住者も家畜も疲れ切っており、Snake 川に沿った道は、岩がごつごつし、乾ききり、そして、大変な苦勞を強いた。川は、谷間がとても厳しく、水は、数百フィートも、その崖の下を流れており、人も、家畜も、この苦難の行進の間は、喉が渇ききっていた。そして、さらに心配であったのは、インディアン達の問題であった。こうしたことは、ともに、現実と想像の問題であったが、それは、ますます増大して言った。

“15 マイルほどの行程は、それまでと似たような貧相な土地であった;土は砂のような汚泥と汚い粘土のようなもので、それが乾燥するとまるで石灰のように舞い上がり、また、時によっては、ヤマヨモギのような感じになっていた。ここから 50 マイルほど先で、インディアンと移住者たちの間で戦闘があり、82 人の白人と 400 人のインディアンが亡くなったと聞いた。

John T.Kerns, 1852.

カリフォルニアに向かう最後は、移住者たちは、Raft River を離れる。そして、沢山の人たちが移住した年には、この道はたいした問題はなかった：移住者が殆どないときには、キャンプサイトは余分になり、水場もそれほど混んでは居なかった。しかし、Snake River に沿った道は、状況が悪かった。岩だらけの道で、見ず場は見えていてもそこに行き着くのに難儀した。そして、男達も、道具も、家畜も、まるで夏場の労働のように疲労困憊した。しかし、まだ、旅の三分の一は残っていたのだ。彼らは、まだ、苦勞しなければならなかった。



オレゴン街道でのインディアン達についての実際は、一世紀前のオレゴンの開拓者達が目の当たりにしたものと同じように、今日でも、かなり厳しいものがある。西部劇の映画は、ふっくらと膨らみ、円陣を組んだ幌馬車の周りを、その幌の上に火のついた矢を射ちながら、喚声を上げている野蛮なインディアンの固定的なイメージを焼き残した。問題は、それらのすべてが間違っていることだ。幌馬車も間違っている。羽のついた頭飾りも間違っている。そして、総攻撃を賭けているのも間違っている。問題は、現代のものではない。開拓者達は、映画など見る事がなかった。が、しかし、西に行くという考え方が出てきたばかりの頃、その当時の Horace Greeley の Daily Tribune は、インディアンは、移住たちが旅をする間、“殆ど、一マイルごとに”に攻撃をしてくるだろうと、明言していた。

実際のインディアン達の略奪の状況の想像は、陸路で大陸を横断する者達がインディアン達との遭遇を、或いは、様々な噂話なども含め、なにか劇的なことのように記述していたので、そうした日誌からかき集めてきていたものに違いない。そんな日誌からはっきりしていることは、1841 年には、移住者たちが 1 人のインディアンを殺害した;しかし、移住者たちの犠牲者はなかった。移住者達が 1 人のインディアンを殺し、インディアン達

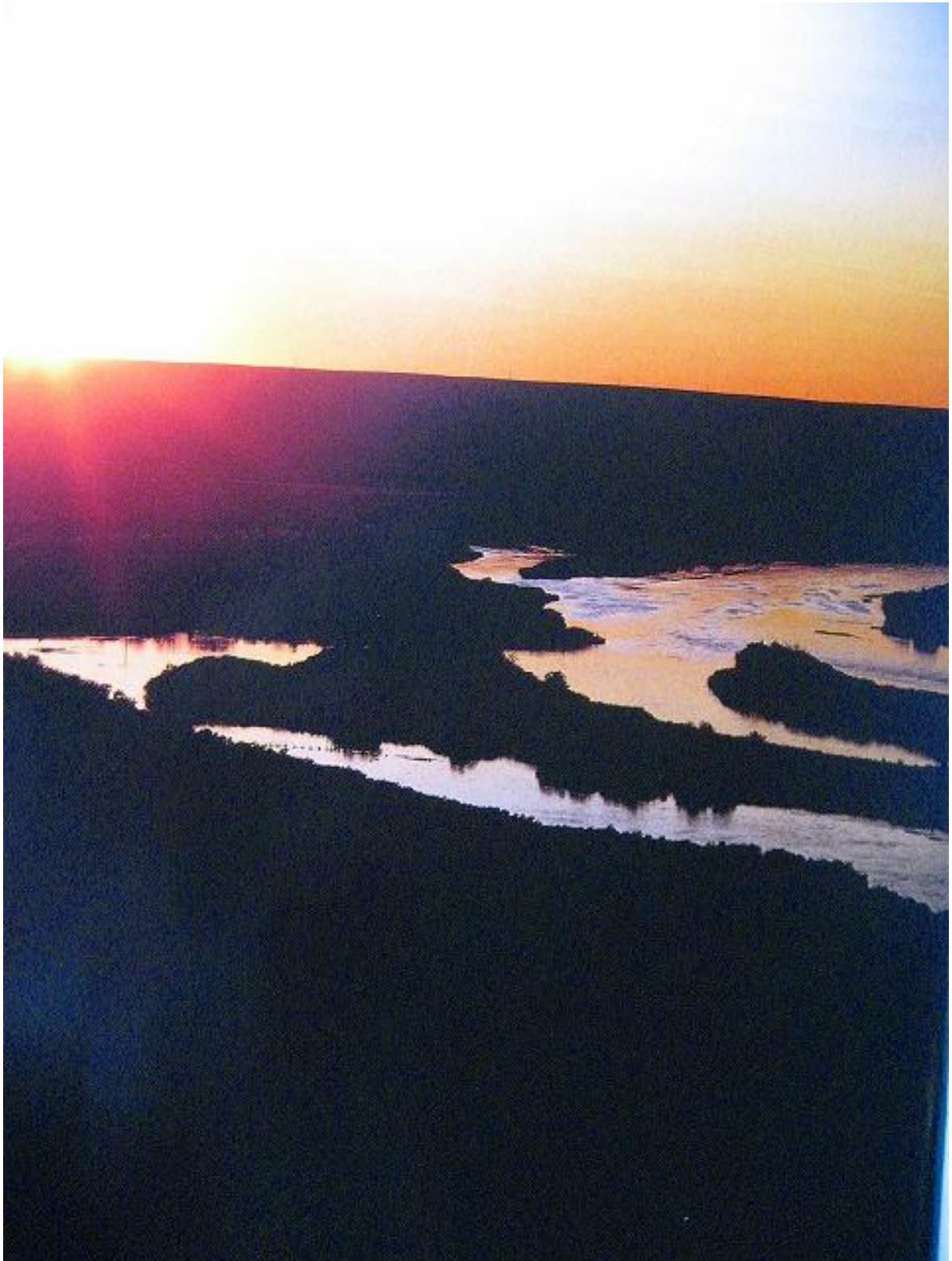
が4人の移住者を殺した1845年までは、殺害の記録は残されていない。しかし、つぎの年には、移住者たちは、20人のインディアンを殺し、一方、インディアン達も4人の移住者を殺した。そして、その数は、ゴールドラッシュで最大となった；1850年には、48人の移住者の犠牲に対し、インディアンは76人が死んだ；次の年には、インディアンが70人、移住者が60人の犠牲であった。南北戦争までの合計をみると、426人のインディアン達が、大陸を横断してくる移住者に殺害され、一方、移住者たちは、326人が犠牲となった。この間に、50万人近くの人たちが西部を目指した。

最も日常的にインディアン達との接触が行われていたのは、彼らが物乞いにキャンプに来るときだった。最初の頃は、誰物が鉄砲を仕切りに所望するという形で起こった。しかし、それがだんだん多くなると、子供達が物乞いの者達を払いのけるようになった。ここにある種の矛盾が潜んでいた；インディアンは、腰に自分たちの敵の頭皮を見せびらかして、つまらないものをほしがるのである。このことは、もはや救いようのない物乞い者たちは、何処にもいなかったということだ。多分、“物乞い”というのは、インディアン達には、もっと別の意味があっただ。

トラブルが現実となったのは、大平原のことではなく、その殆どは、いつも、サウス・パスを超えたところで起きていた。そして、Snake River にそったこの街道筋が、最も状況は悪かった。総攻撃という規模のものは、殆ど稀であったが、しかし、もし、幌馬車がのろのろと進んでいるようなときには、幌馬車隊は囲まれて、そして、攻撃を受け、必要以上に抵抗をするとき、それは、大殺戮を引き起こした。同じことは、幌馬車から離れて、一人で、インディアンに捕まったときなどは、誰にとっても同じような状況だった。インディアン達も同じようなことを感じていたのではないか、そして、インディアンは、いつでも、移住者たちの近くで注意を払っていたのであった。彼は、一目見るなり、銃撃されるインディアン達の現実を知っていた。



Snake River の川辺のマスクラット 西部の毛皮は、罾獵師たちを、狩獵を中心とした野生生活に直ぐに導いていった。そして、人々は、まるでパイプのなかを流れる水のごとく、この領域になだれ込んでいた。変化のときがやってきたのだった。



Idaho の Three Islands Crossing. Snake 川は何処を渡るにしてもとても危険な川であった。しかし、たまたまあった島が、この川渡りを少し楽にしていた。インディアン達が時々、ここで幌馬車隊を困らせ、渡り終わったら馬車が半分だったこともあった。また、川の両岸で適当に分れてキャブをするのは、その両方を守ることが難しく、問題があった。

“私達は、**Snake River** を横切って行っただが、この川は、流れが速く、そのために御者達は、その流れに流されないように、牛のくびきをしっかりと固定していなければならなかった。水が馬車の積荷の箱の中にまで入り込んできた。そして、箱を一箇所に積み上げて、島を作ったあと、インディアンの案内人を雇い、二列にして、無事に向こう岸にたどり着くことができた。

Elizabeth Wood, 1851.

この場所は、二重に焼けた地域であった。一つは、下層の古代の火事による溶岩台地と、上層は、太陽の照りつけにより焼けたものであった。“これは、おそらく、合衆国の西の外れと太平洋の海岸との間の最も荒れた、砂漠化した、そして、荒涼とした土地ではないかと思われる。”と、'43年に **Overton Johnson** が書き残していた。“ここには、荒れ果てた土地と、岩がむき出しになり不毛の、そして、破壊され、放置されたままの自然、火山性の荒地以外のなにものでもない。” **Snake** 川は、シューと音を立てながら、曲がりくねり、そして、溪谷の牢獄とも言うべきところから逃げ出そうとしているようだったが、こんな中で、馬車は、その上の石のごつごつした道をがたがた言いながら進んでいった。

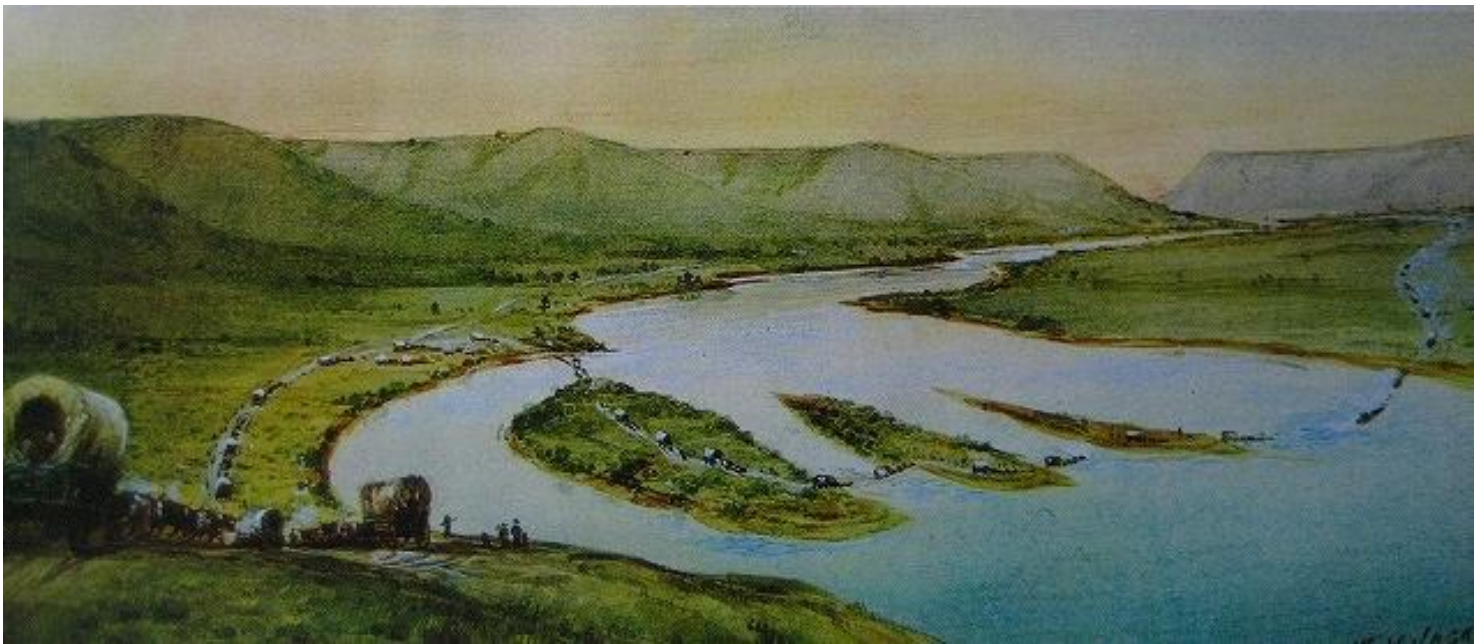


流れに抵抗して岩が滝を作っていた。**Fort Hall** をでて直ぐに、旅人達は、**American Fall** を過ぎた。そして、次に、**Twin Fall**、ここは、**Snake** 川が巨大な岩により流れが分割され、まるで、二つの唇の上に注ぎこんでいるかのようだった。2・3日後に、低いという音が、**Shoshone Falls** を教えてくれた。この音は、時により、馬車はその場所から、まだ、3マイルも離れているのに聞くことができた。この **Snake** 川が 212 フィートも落ち込んでいるのは、ちょっとわき道により一見する価値があった。そして、**Snake River** 溪谷を見渡し、滝を見ることが出来る場所に出たが、しかし、溪谷を作っている壁を越えてはいなかった。水は、崖の上に注ぎ込んでいるというよりも — 地下水が出てきているのだった。移住者たちは、まるで魔法でも見ているようで、それを“千もある泉”と呼んでいた。

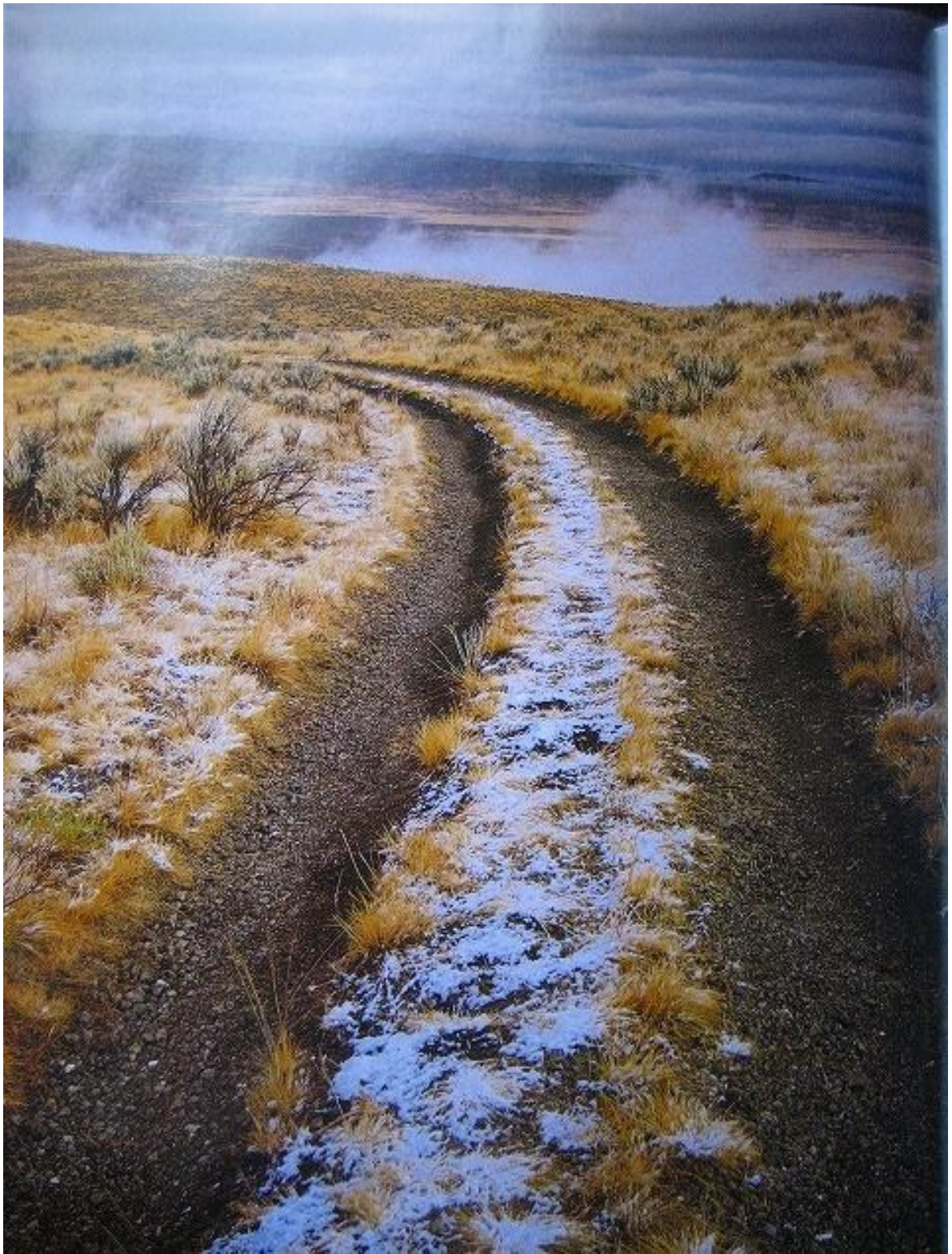
旅人達は、この滝で無為な時間を費やすことは得策ではないと知っていた。とにかく、まだこの先には長い道のりがあった。そして、前方にある山々の雪で時間をとることは、命にかかわることであった。もし、この **Snake** 川を 8 月のはじめに通り過ぎれば、多分、これは、何事もなく収まるが、もし、少しでも遅れるようなことがあれば、重大な危険を

ともなうことになるのだ。旅人は、馬車を休めることなく行進し、そして、**Three Islands Crossing**、三つの島の渡しにやってきた。

Snake 川は、**Platte** 川と全く異なっていた。水嵩は深く、流れは速く、そして、水温が冷たいのだ。幸いにも、ここには、危険はあるが、何とか渡ることが出来る浅瀬があった。川をさえぎるように三つの島が踏み石状にあった、ここで、川は、流れが分割されていた。岸と最初の島との間が最も狭い流れになっているところに、牛、馬車を押し出し、ち川を横切った。そのあと、その島の一番先まで行き、こんな形で渡川を完遂した・



Willam H. Jackson によって描かれた、**Three Island Crossing** **Jackson** は、流れの一番狭い場所の土手に馬車が集まり、それから、ちょうど踏み石のように島伝いに川を渡っているのを示した。



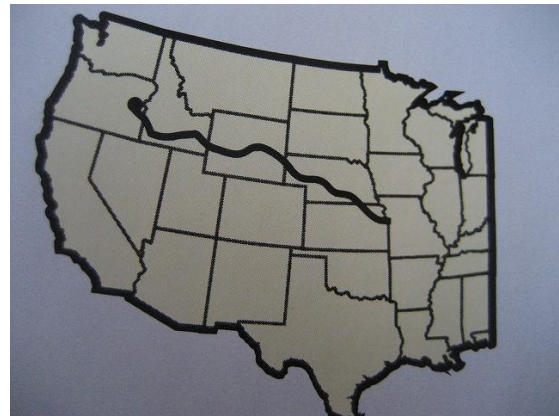
Oregon ,Baker の Flagstaff Hill の光景

Flagstaff Hill は、疲れきったオレゴンへの移住者たちのために、英気を取り戻す場所でもあった。旅の終点には、まだ、少なくとも数週間が必要と予測はしていたが、よく見える場所にたつと、彼らが信じていたオレゴンがそこにあることを確認することができた。Blue Mountains は、ぼんやりと見えており、かれらは、その先を懸念していたけれども、しかし、彼らは、自分たちが目指してきたオレゴンにすでに入ったのだ。壮大で、果敢な挑戦の褒章として。

“どうして、あの人たちはすべてを危険に曝すようなことをしたのだろう
か……死をもものともせず、自分たちの無力な家族を虐殺や飢餓状態の可能性が
ある状態に曝すのだ — それは、一体、何のためなのだろうか？ 私は、こ
うした疑問にたいして、将来、どんな合理的な答えがされるのか、それを確信
することが全くできない。”

James Nesmith, 1843.

新天地を求めてオレゴンに向かった人々
の多くは、Three Island Crossing で、
Snake 川を渡ったが、川の水嵩が多いとき
には、或いは、その前に渡った人たちが用心
をするようにと教えてくれたようなときは、
彼らは、Snake 川の南側を、Boise River
の河口に向かって Sinker Creek Flats を少
しずつ横断していく、すこし苦労の要する、
長いルートを選んだ。この地はなかなかきつ



かった。J.T. Kerns が'52 年に書いているが、“この道はとても埃だらけで、不毛地帯、ま
るで、死ぬまで焼き尽くされた荒地のような地域であった。少女達には、私の感じでは、
一まるで、こんな場所でさえも逃げ隠れしなければならないような罪びとにさえも不運と
思わせるような、そんな場所に思わせていたようだ。” その厳しい苦難の道は、まさに弓の
ようなものであった； 弓の弦が、水の量が少ないときには、Tree Island で Snake 川
を渡るという道で、ここを渡ると、真っ直ぐに、Boise River に辿りつくというものであつ
た。この道には、何某かの泉はあつたけれども、移住者たちは、それを乾きの時として扱
わなければならなかった。というのは、そうした泉の水には毒が含まれていたからであつ
た。

Boise 溪谷は、それまで、Snake 川に沿って、350 マイルほど、岩のごつごつした火山の
あとの風景ばかり見ることを強いられていた目には、慰みのあるものであつた。そこには、
木々が生い茂り、そして、日陰と、薪が約束されていた。そして、何よりも鮭がいた！ こ
の地に住んでいたインディアン達がこうした移住者たちが必要とするものを知るようにな
ると、彼らは、しばしば、売りつけるつもりで鮭を持って、Boise にそって出来たキャンプ
地に姿を見せた。それは、一番の選択だった。日誌には、この道にそって沢山のウサギの
群れがいて、移住者たちはそれを捕獲して食料としていた。が、やっぱり、鮭のほうが味
は良かった。

Blue の山々のことを心配し、懸念をしていた移住者たちは、2 日かけて、Snake 川に
注いでいる Boise まで下っていった。ここで、彼らは、されにその先の長い行程にそなえ
て幌馬車の整備をしていた。Snake 川に沿って、再び、少しの間進むと、Fort Boise に到

着した。ここは、粗野なレンガ造りの砦で、（移住者たちは、ここを“焼いてないレンガ造りの建物”と呼んでいた）1834年に建てられたものであった。これは、Wyethが、Fort Hallを建てた同じ年であった。ここは、Wyethの挑戦に対する、Hudson's Bay 会社の対抗処置であった。商業的には、それは、引き分けと言うところであった；両方の砦とも、毛皮の取引のために、初期の移住者たちに対して、長いこと、便宜を働いており、その後、1855年には、ともに、閉鎖された。そこから2・3マイル進むと、幌馬車隊は、必要なものを求めて Snake 川を離れることになった；そこで、彼らは、この場所を“分れの曲がり角”と呼んでいて、その名前が今日まで残っているのである。

この道に沿って、丁度、文頭の Nesmith の文章に見られるように、移住者たちに衝撃を与えた気分の中には、何か矛盾するようなものがあった。ここには、膨大な努力がまもなく成就されるというだろうという歓喜の気持ちがあった一方、前方に立ちはだかる Blue Mountains のあまりの大きさに対する、幻滅的な心配ごとがあったのだ。こうした山々の標高の高いところを覆っている雪が見事であったにしても、それは、一方では、恐怖そのものでもあった。しかし、彼らは、もう直ぐそこまで来ていたのだ。

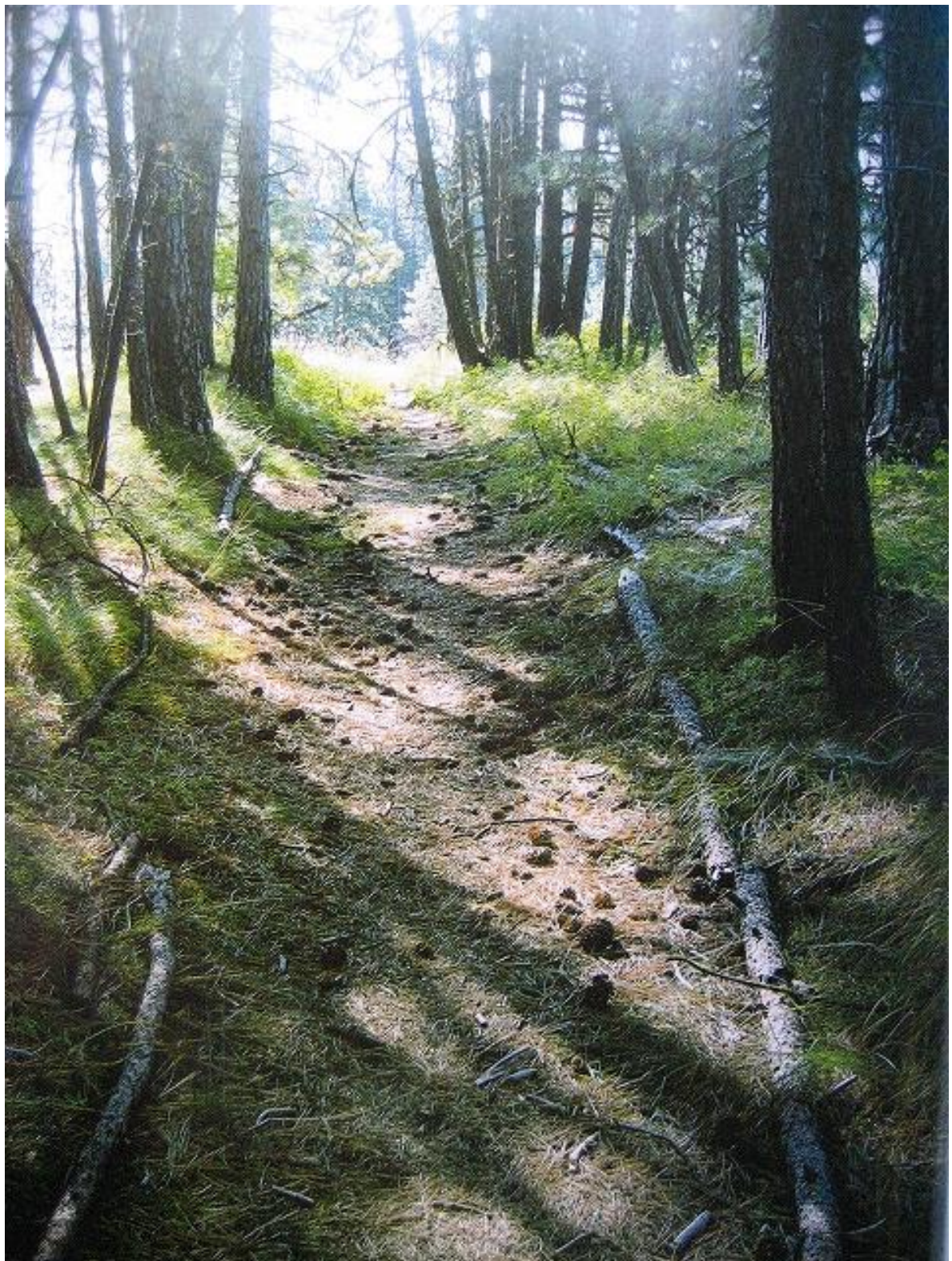
Flagstaff Hill は、そうしたことの序章であった。移住者たちは、ぼろぼろになった、

修繕だらけの幌馬車を、この丘のがけっぷちの周りを引っ張っていった。そこには、彼らが想像していたオレゴンがあったのだ：うねるような大地、森、そして、神が牧草地のために創造してくれたような場所であった。

“合衆国の”小屋の中でみた、夢の世界であった。そして、馬鹿でかい Blues の山々。ここは、横切るには畏怖を覚えさせるもう一つの領域だったのだ。



Baker City, Oregon に在る記念碑。 オレゴン街道は、彼らが移住した後も、ここを横断してきた人々にとっては、決して忘れられるものではなかった。それは、彼らの生活を変えたように、彼らをも変えた。そして、彼らの子孫達は、その努力の印を、西部に配置してきた。



Blue の山の中のオレゴン街道。Blues の山々は、壮観そのものであった。移住者達は、季節の後半に、ここにたどり着くと、初頭の雪に閉ざされ、物資が不足することを非常に恐れていた。しかし、こうした山々は、彼らがそれまで東部では見たこともなかったような樹林があり、彼らが、すでに新しい世界にたどりついたことを示す象徴でもあった。移住者達は、土壌が肥沃で、そのためにこんな風に樹木が生長し、ここならどんなものでもよく育つであろうということを率直に感じていた。

“……歩いて、歩いて、もっと歩くのだー あなた以外に、旅の終点にあなたを連れて行ってくれるものなど何もない； あなたを助けてくれない知恵など、ないはずだ；少しでも遅れを作るようなもので、いいものなど何もない。”

Marcus Whitman, M.D., 1843.

Blues の山々は、大変きつい場所だった。そして、そこは、早雪の来る前に越えていなければならなかった。しかし、移住者達が、汗をにじませ、悪戦苦闘しているように、そこには、膨大な樹林があった。彼らは、その頂上まで上り、そして、自分たちの眼前に、Blues の山々の真ん中辺りに、山に囲まれた呆然とするほど大きな溪谷が広がっているのを目にした。それは、Grande Ronde で在った。彼らはまさしく、この時新しい世界に足を踏み込んでいたのであった。



この街道の初期の頃には、この Grande Ronde から、Waiilatpu の Whitman 布教施設までいくわき道があった。オレゴン街道は、まさしく、人々の移動の後を意味するものであった。それを、“整理した”人は誰もいなかった。合衆国中のここに離れた農場の家族が、単純に彼らの決断をし、荷物をまとめて、そして、故郷を後にした。しかし、もし、そこに、トランペットを吹く 1 人の男が居たと言うなら、それは、Marcus Whitman 師だった。’35 年まで遡り、この街道の旅が始まる前、Whitman は、セント・ルイスにやって来た 4 人のインディアンたちの“要請”に呼応した宣教師達の中の 1 人であった。1836 年の記念すべき旅で、彼は、彼の妻の Narcissa と、そして、旅が完全に終了する前に手押し車に置き換えなければならなかったけれども、一台の馬車を伴っていった。妻もそして、居押し車もともに一級品であった。ただ、どちらがこの旅で余計に貢献したかは言い難いけれども、Narcissa の故郷にあてた手紙の中に、家族も、そして、馬車も、よく働いたと、そして、東部の人たちは荷造りを始めたと書いていた

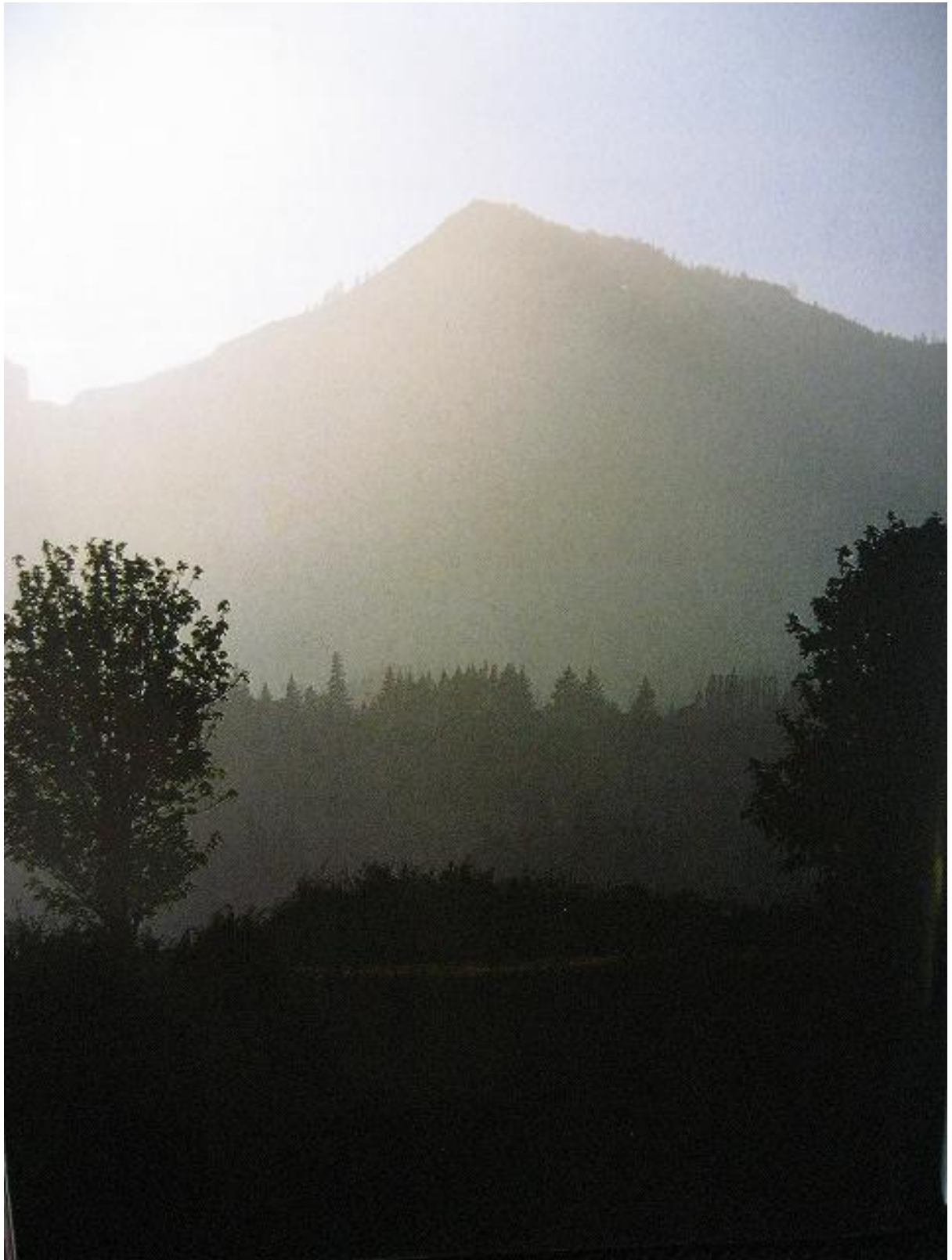
Whitman 達は、Waiilatpu に布教のための施設を計画したが、どうしたものか、オレゴン街道での出来事が、その布教施設の努力を影の薄いものにしてしまった。さらに、Cayuse インディアン達は、その新しいやり方に目立つような抵抗を示した。そこで、Marcus は、1843 年に、別の旅を実行した。この時には、幌馬車がコロンビアまで、行ったことがはっきりしている。幌馬車隊が、そして、沢山の幌馬車隊が旅をするようになり、また、彼らの啓蒙に喚起された確かな旅の流れが出てくると、布教施設は重要な旅の休息所となり、そして、街道での重要な物資の補給所となった。Narcissa は、この時から、未開の大自然の中の理想の女性となった。そして、Marcus は、オレゴンに定住をしよう

という言う人たちを大いに力づけたので、彼らにとって、彼は、少なくとも、教祖であった。

1847年に、移住者達の最後の人たちが、立ち去ったあと、この布教施設は、冬籠りの準備をしていたが、その時に、恐ろしい麻疹がこの布教施設の狭い社会を襲った。それでも、白人達は、何某かの免疫をもっていたが、インディアン達は全くの無防備であった。そして、11月の29日に、Cayuse族の残虐な氾濫が起こって、ことは終結したが、Marcus & Narcissaをはじめ、Whitmanの家族が街道での悲劇に見舞われていたのを救ってつれてきた子供達も含め、さらに13人もの人々が殺された。しかし、たとえ死に至ろうとも、Whitmannsは、街道での奉仕に貢献した。虐殺という言葉が東部に着くと、爆発的に起こった社会の叫びが、その時、すでにイギリスから、領土として明け渡すとされていたオレゴン州を、明確に譲渡を受けるとする形にするための圧力を議会にかけた。まさしく、移住というのは、その過程にあったわけである



Walla Walla, Washington に在る、Whitman の布教施設の跡。Marcus Whitman は、オレゴン街道の開設を助け、そして、この布教施設は、この街道の初期の段階での重要な拠点となった。1847年のWhitmansの虐殺が、オレゴン領域の確立という結果をもたらした。

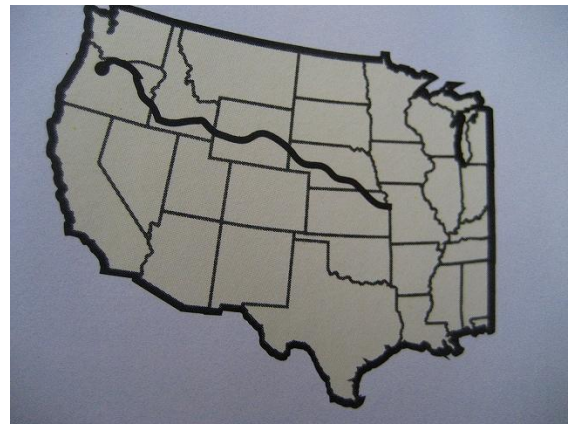


Columbia River Gorge を取り囲んでいるうっそうと茂った山々。川を下るのは、危険で、この周りの地域は、は、馬車で通ることはまず出来なかった。しかしながら、1845 年になり、1 人の移住者の Samuel K. Barlow が、決して楽ではないが、川の南側の Cascades を通り抜ける馬車の道を何とか切り開いた。それまでの厳しい試練に疲れきってはいたが、大陸の横断を目指した人たちは、それでも、すでに自分たちはもうすでに終着点の近くに居るのだという思いで元気付けられた。

“役に立つ沢山のものを投げ出し、馬車の底板を殆ど取り出して、これを燃やして、薪にし、来る日も来る日も、洗濯をしたり、料理をしたりした。二つほど[川の]支流を渡河して、**Cascade Mountains**（ここで、わたしは、洗濯と仕事がきつかったので、一晩中、体の調子が良くなかった。）の入口近くでキャンプを張った。

Amelia Stewart Knight, 1853 — この11日後に彼女は子供を産んだ

地理学的をみると、オレゴン街道は、叙事詩のように筋書きされていると断言することができる。誰も異論がないように、この偉大なる街道は、丁度、褒美が眼前に目に見える形になって来る。**Whitman** の布教施設から、コロンビア川にいく行程はなんら問題がなかった。**Whitman** の施設を訪ねた移住者たちは、藪あと、よく、**Walla Walla** を右に折れて、コロンビアに向かったが、中には、この施設に立寄らず、



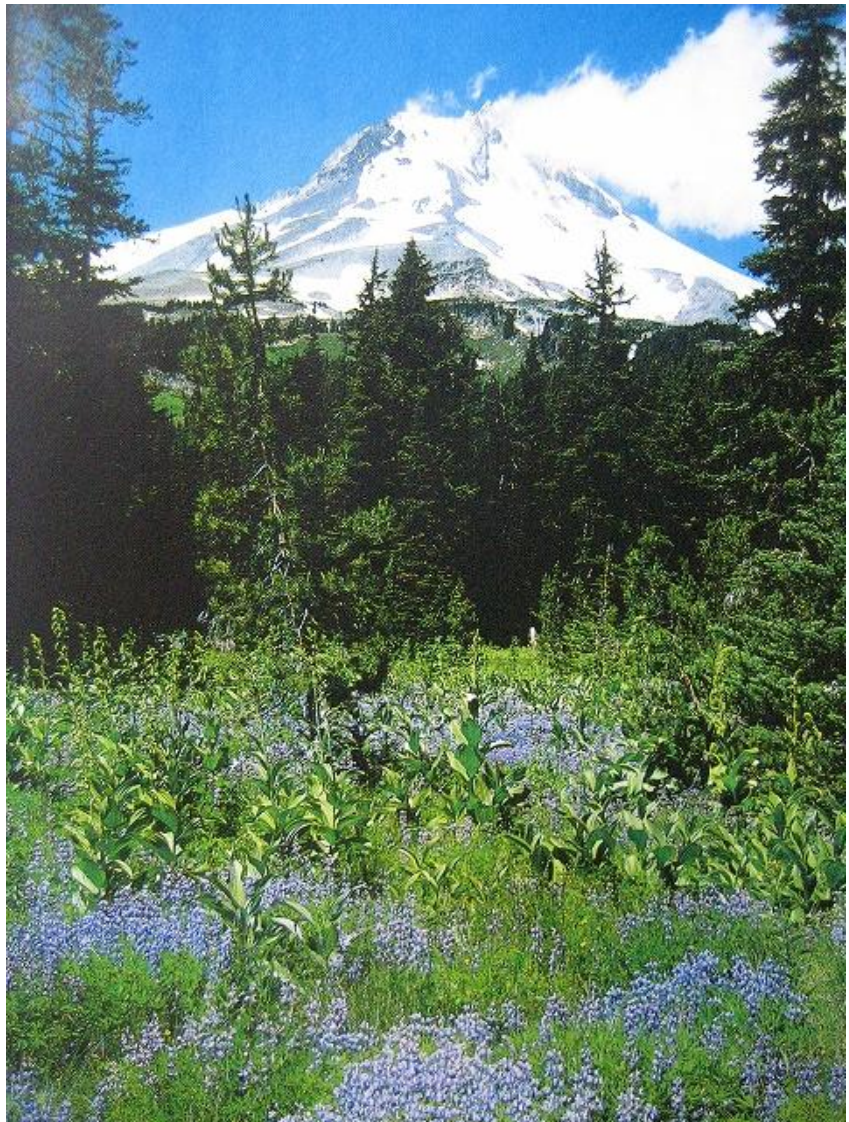
Umatilla に行く道を選んだものも居た。しかし、それから何が起こったのだろうか？ 彼らは、ボートやいかだを、また他のものは、インディアン達を彼らが持っている大きなカヌーごと雇い入れた。しかしながら、ここは、彼らがすでに渡河してきた沢山の川、そのすべてが注ぎ込んでいるコロンビア川だった。川の流れはとりわけ速く、そして、水量が多かった。あまりにも沢山の日記のあちこちから、自分の家族全員を見張るその恐怖がにじみ出ていることがわかる。

幌馬車をもう一度丁寧に注意深く修理し、コロンビア川の土手を引っ張っていった。しかし、彼らは直ぐに、二つの大きな岩が川の流れさえも全くその行く手を阻んでいる **Dalles** というところにでた。そこは、**Columbia River Gorge** を作り出している **Cascades** を通り過ぎていけるはずだったので、川の土手を下り続ける道はなかった。**Dalles** で、沢山の移住者たちは、自分たちの持ち物を担って、滝を迂回し、連れてきた牛は、インディアン達と川を下るために必要なカヌーに交換した。もし、こんな具合で、ことがうまく運んでいたのなら、この行程は丁度、二日間の川旅であった。**Ezra Meeker** は、’52年に、疲れ果てた開拓者鷹がボートにしゃがみこんでいるとき、そして、誰かが、“**Home, Sweet Home**” と歌い出したときの信じられないような光景を報告している。次第に、周りのものがみんなその輪に加わり； 誰もが思っていることを容易に想像することが出来る。

1845年以降、川に出るには別のルートが開拓されたが、しかし、その道は容易なものではなかった。その年、**Samuel K. Barlow**、彼は、イリノイの出身で、最終的にオレゴンに行く決心をしたもので、彼は、**Cascades** を通り抜ける恐れ多い道を強引に突き進み、そ

して、川くだりの危険 — そして、費用 — を避け、Mu. Hood の肩を乗り越えていった。移住者たちに、まるで、“テーブルの上の虫のようだ” と、思わせ続けた、青空のもと、大草原の中の数ヶ月の旅のあと、幌馬車隊は、移住者たちがそれまで見たこともないような樹木の中に這いつくばっていった。日誌に葉、彼らの恐怖が読み取れる。馬車を引っ張っていくことでさえ、もみ消されそうに思われた；森は、まるで大聖堂のようであった。大きくそびえる木々の幹は支柱のように見え、屋根のようにおいしげる葉っぱは、びっくりするほど高いところにあった。

栄冠の賞金は、馬車が通ることが出来るほど硬い道であった。在る場所、ここは Laurel Hill であるが、このオレゴン街道全体の中で、唯一、最低の道だと報告された。が、この最低という意味は、人間も動物も、とにかく疲れ切っていたという意味であった。しかし、ここは、最後のゴールの前に直線コースだった。彼らは、馬車をあちこちぶつけ、車輪を引っ張り、道からは、倒れた丸太を引き抜き、そして、疲れきった牛には、何とか、もう一マイル引っ張ってくれるように願っていた。



オレゴン街道の終点の栄冠を称える道標の、対照的な円錐状の形をした Mt. Hood 人々を苦しめ続けた Barlow Road は、この山の肩の周りを通り越してゆくものだった。

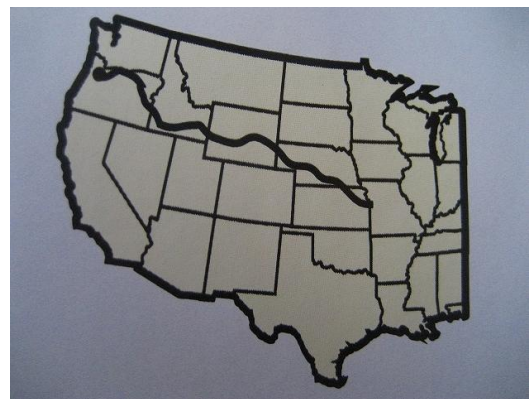


Fort Vancouver, Washington に再建された National Park Service の台所。 この砦は、イギリスの Hudson's Bay Company の毛皮取引所であった。そして、有名な Dr. John McLoughlin の管理の下で、農民、製粉所、製材所、そして、貯蔵用の納屋などでにぎわった。— ここは、時に、街道にどうしても必要品さえ捨てて来なければならないような状況で、“大平原”を横断してきた人たちには、とても助けになる場所だった。

“2・3日して、私には八番目の子供が生まれた。その後、荷物をまとめ、**Columbia River** を渡りました…全部が終了するまで、三日がかかった。ここで、私の主人は、ジャガイモを植えるために、土地の一画の半分の 1/2 エーカーと交換に、そして、小さな丸太小屋と窓のついていない差し掛け小屋のために、牛を繋いでいた二本の横木を手放した。そして、これが、この旅の終わりを告げるものだった。

Amelia Stewart Knight, 1853

当初、“オレゴン”は、“Willamette River 渓谷”を意味していた。そして、幌馬車を引っ張っての六ヶ月半の後、彼らは、ここにいた。開け野原での巻き寝具での六ヶ月の睡眠、そして、今、彼らは窓のある大きな家を目の当たりにしていた。がたがたになった馬車を紐で修理をしながら、岩との戦いと、そして、幸運の六ヶ月のあと、今、彼らは、製材用ののこぎりの音を聞くことが出来た。彼らは、それまで、**Snake River** 沿いで、ウサギの肉を食べ、バッファローの切れ肉を料理してきた；そして、今は、彼らは鉄製のストーブの上で料理して食事をし、そして、時には、ゆっくりと寝ることさえすることができた。最初の数年間は、ここはど



こに行っても、大英帝国のユニオンジャックと、そして、イギリスの最も価値のある通商用のサーベルの旗、**Hudson's Bay Company** の旗がはためいていた。

アメリカ人が大量に流れ込んでくるのを歓迎していたのは、イギリス人の、この領域統治していた **Hudson's Bay Company** の運営を管理していた **Dr. John McLoughlin** であった。入植地は、12 ダースほどの建物からなる、彼の本社であった。そして、彼は、大量な開拓者達の生活習慣についての規則を定めた。もし、この卓越した男が、アメリカ人に移住者たちの流れについて政治的な気の咎めをもっていたとしても、それは、彼により表に示されることはなかったであろう。次から次にと、彼は、取り残された幌馬車隊のことを耳にすると、救援のための救助隊を送ったり、**Dalles** で苦難にあえいでいた人たちを運ぶために、ボートを送り出していた。

とりわけ、ここに住むアメリカ人の比重が高くなり、イギリスが合衆国に対して、所有権全部を取得するというのは、イギリスにとってこの領域での負担が重くなってくる。しかし、彼らにできることは何か？こうした、疲れきった人々、ときに、極貧状態の人々は、六ヶ月間にわたる危険な旅をして来たあとであり、**McLoughlin** は、その彼らを助けた。その物語は、よい結末だった。そして、この領域がアメリカのものとなったときに、**Dr. McLoughlin** は、アメリカの市民権を要請した。彼は、今でも残っている、とても素晴

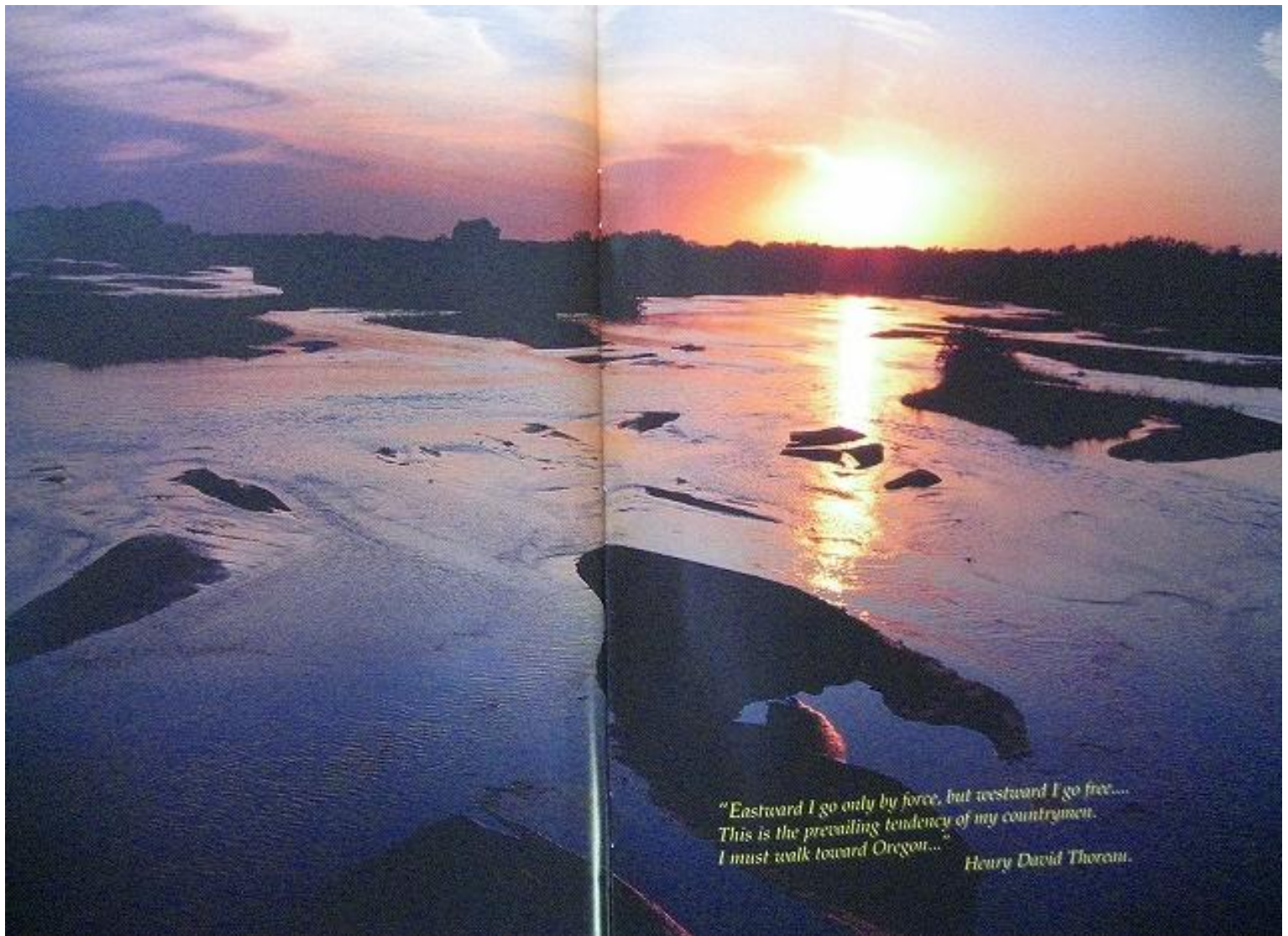
らしいカシ板材の家を建て、自分が助けた人たちの尊敬を受けながらそこに住んでいた。彼にはそれだけのことをされるに足ることをしていた。

毎年ここに到達してきた幌馬車隊は、旅の終わりのオレゴン市で、沢山の仲間を見つけた。6年間ほども経たないうちに、あちこちに店が立ち、製粉所ができ、印刷屋が、そして、法律家さえも店を構えた。

数十万人の人を象徴して、文頭に引用されているような、1 人のアメリカ人、**Amelia Stewart Knight** を見てみよう。**Knight** は、七人の子供を持つ、アイオワから来た農民で、大変な苦難の後、オレゴン街道を横断した。しかし、殆どの人たちと同じように、その苦難を転じたのだ。子供達は、大平原のなかで行方不明になったが、それを見つけることができた;命にかかわるような、大きな怪我も、幸運により、それを乗り越えることが出来た。彼らは、馬車で **Blue Mountains** を乗り越えるときに、或いは、**Cascades** を抜け、**Barlow Road** を越える時には、まさに恐怖の時を味わった。**Amelia** は、ぬかるんだ **Barlow Road** を進むときには、低木の倒木のなかを一番下の子供を背負って歩いた。彼女の日誌のなかには、彼女の置かれた条件について、なんら、これはという手かかりはないけれども、**Oregon City** に到着する一日前に、**Amelia** は、八人目の子供を産んだ。その子供も、そして、オレゴンそのものも、将来、うまくいく運命にあった。



これは、オレゴンにやってきたアメリカ人の移住者を歓迎する Union Jack であった。そして、**British Hudson's Bay Company** の支配人で在る、**Dr. John McLoughlin** の心からの歓待の意を表するものであった。



*"Eastward I go only by force, but westward I go free....
This is the prevailing tendency of my countrymen.
I must walk toward Oregon..."*
Henry David Thoreau.

東に行くには、やむを得ずという状況だが、西に行くには、自由だ……
これが、田舎の人たちに広まっていた風潮であった。
私は、オレゴンに行かなくちゃならない。

Henry David Thoreau

あとがき

牛追いであり、絵描きで、写真家でもあった William H. Jackson の絵は、まさに、オレゴン街道の当時を覗き見ることが出来る窓のようなものである。彼は、まさにその場にいたので、ありのままの姿が描かれているのである。

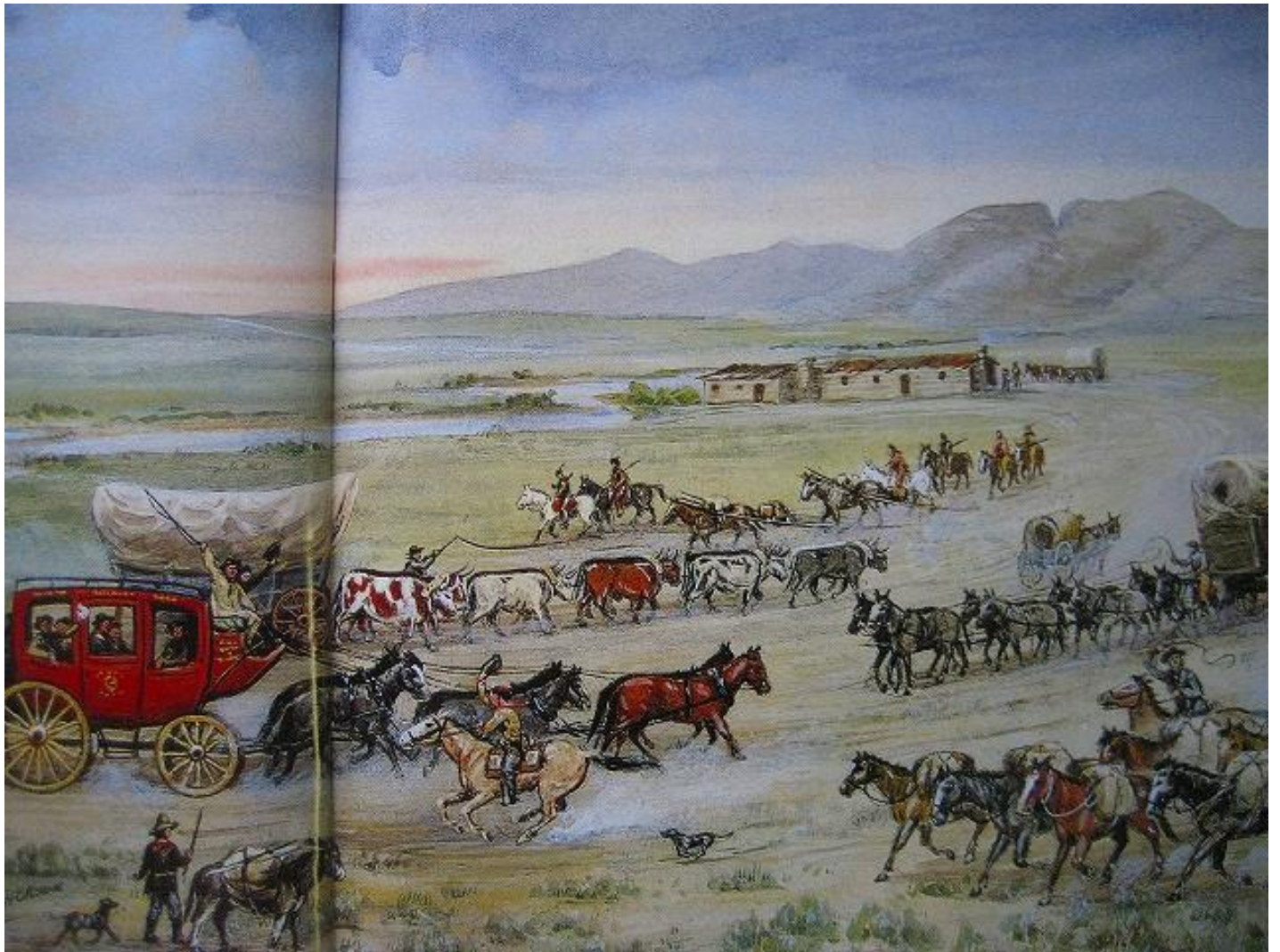
Jackson は、1843 年にニュー・イングランドで生まれた。その夏、Marcus Whitman は、200 台の馬車を連ねて、大平原を遠く、まだ定かでないオレゴンの街道を進んでいた。一時は、まだ、オレゴン街道と呼ばれてさえいなかった。10 歳代になると、Jackson は、写真屋の手伝いを始め、そして、彼自身、絵を描くことを楽しむようになった。そして、南北戦争に出兵したあと、バーモントに戻り、写真店を開いた。当時、経済状況が非常に厳しく、そんな中での写真屋は決していい商売ではなかった。そんなわけで、数ヶ月の間は、写真屋は廃業同然であったが、何とか続けていた。

これとは対照的に、Jackson や彼の友達が、西部について聞いていた話しでは、そこには、ぜひとも行ってみるべきだということだった。それは、古い物語であった。南北戦争以前にも、Jackson が知っていた人たちは、西部のことについていろいろと知っていた。罾猟師たちの話し、宣教師への呼びかけ、オレゴンという素晴らしい農地の話し、カリフォルニアの Sutter's の製粉所での発見の雷鳴、ありとあらゆる金の誘惑こうしたものが、たまらない魅力となり、ある日、彼らは荷物をまとめ、そして、出発したのだ。戦争は、忌まわしい回り道であったが、しかし、今、西に向かうという流れは、まさに絶頂に達していた。バーモントにもやって来た実話と作り話の入り混じったものが引き金となり、1866 年に、Jackson と二人の仲間は、荷物をまとめ、旅立った。

オレゴンの街道が開発されるであろうということは、必然的なものであったにしろ、その変化には目を見張るものがあつた。

Jackson がオレゴン街道で体験したものは、一世代前にそこにあつたものとは格段の違いがあつた。時計を質にいれ、蒸気船(そこには、非常に沢山のモルモン教徒と、街道の様々なものと一緒であつたが)、ミズーリの St. Joseph にやって来た。そして、彼は、モンタナの金鉱に向かう雄牛車の隊の牛追いとしての仕事を得た。彼は、定住を目指すものとしてではなく、商業会社の雇われ人として、彼の腕をたよりにしている沢山の大陸横断を志す人々とともに、このオレゴン街道のたび慣れた牛追いの指揮のもとで、よく踏みならされた道を旅していた。かれは、1866 年のオレゴン街道の旅人となっていたのである。

オレゴン街道が開発されるというのは必然的なものであつたが、しかし、その変化には目を見張るものがあつた。そうした変化というのは、街道につたわる武勇伝からは失われたものが沢山ある。かの街道に沿って移住していった開拓者達は、潜在的な消費者であつた。企業家達、彼らもまた西部に移住してきた人たちが在つたが、彼らは、そうしたチャンスが、オレゴンで始まったというわけではなかった。そのきっかけはすでに、オレゴン



の街道の途中で始まっていたというわけである。

1846 年までに、ララミー砦で夢中で必需品の再調達していた移住者たちは、移住者たちの取引のための砦の 8 マイルほど前で、その砦と競合している、新しい取引所を見つけた。この競合ビジネスは、お互いのためにだけでなく、移住者たちにとっても、殆どありがたいものではなかった。そこにいた Fremont が、次のように記述していた：“[移住者たち] は、情け容赦なく、略奪され、そして、騙し取られていた。私がいたときに実施されたある大安売りでは、私が砦側にたまった利益を計算したところ、それは、少なく見積もっても 1800 パーセント以上ではなかったかと思われる。”

とても信じられないような Forty-Niner のブームが起きたときに、開発が急速に進んだ。成功を夢見る人たちは、自分たちの家財道具一切を携えてきた農民達ではなかった。彼らは、向こう見ずに黄金郷を目指す風来坊達であった。2・3 年後の Jackson のように、彼らは、時計を質にいれ、或いは、小さな貯金箱を壊し、幌馬車隊の一員にもぐりこんで、西部に向かう者達だった。彼らは、通常、十分な準備どころか、なんの準備もしていなかった。道端での商売は、まさしく売り手市場であり、売り手は、まるで、蠅のように増えて行った：“2・3 日、進むごとに、幌を被せた小屋があり、そこには、‘Gambling Hall’ と

いう看板がついていたが、取引所という名前をつけて、その用途についてのもっと適切な表現をしていた。”

Fort Kearny のように、まず最初に生家活用品の調達場所として、“酒屋”に沿って合法的なお店が出来、それがどんどん広がっていった。鍛冶屋の店は、天の賜物であった。移住者たちは、ここで、蹄鉄のついた家畜、或いは、修理された鉄製品を、手に入れることが出来た。そして、もし技術があれば、店から道具を借りて自分で修理などもすることができた。雄牛とミュールを交換できる取引所もでき、ここで、移住者たちは、疲れきった自分の家畜を元気なものと、3対1の比率で交換することもできた。彼らが残した家畜は、ここで休息を取り、英気を養い、そして、後から来た幌馬車隊に再度取引されていた。これは、かなりいい商売で、“雄牛の再利用”ということで、一つの幌馬車だけでなく沢山の幌馬車に貢献していた。

モルモン教により操業されていることが多かったが、商業的なフェリーが、主要な川の渡河場所に現れた。最初のころのフェリーは、カヌーの上に厚板を乗せただけのような簡単なものだったが、商売がだんだん大きくなると、がっちりとしたものが出てくるようになった。渡し賃は、水の嵩によって上がったり、下がったりしていた。そして、移住者たちが、自分たちで流れのなかの浅瀬を渡ることを選択するようときには安かったが、水嵩が増し、浅瀬を渡ることが出来ないようになると、これが渡し賃に跳ね返ってきた。そして、にぎわうシーズンのときには、頭の良い幌馬車隊のボスは、何人かの騎手を先に送り、予約を取るようにしていた。こうして沢山の渡河の人たちが来るようになると、フェリーにかわり、有料の端がどんどん出てくるようになった。

街道筋で、進むのが難儀の場所には、うまいことをしようとする男達が現れて、それまで、誰も通らなかったような道を開き、通行料を取った。街道筋に沿ってどこにも、近道の商売が競争するようになり、移住者どの道を選ぶのかを決めるときの交渉に交渉するものを送った。そして、自分たちの特別の近道を移住者たちに進めたというわけである。こうした代替の道は、確かにオレゴンに行くことは間違いなかったが、それが出来たにしても、危険を伴うものであった。

この雑然とした経済の活力は、常識を逸するものではなかった。むしろ、それは、現実の手に負えない状況にある **United State** を象徴するものであった。これは、政府が主体となった集団移住ではなかったし、また、計画的なものでも、そして、命令されたものでもなかった。それは、なんとなく統治された人々の解放された活力であった。沢山の人たちが、目覚め、そして、旅立ったのだ；他のひとたちは、彼らにそこで必要とするものを売り、そして、提供していた。それは渾然としており、ある者は、大事な機会を手にし、買い手に注意を促していたことなど、予測のできないことであった；それは、体系のなかの部分的なものであった。それは、非常に厳しいものであり、そして、みすばらしいものであり、済んだ仕事をするものであり、そして、それは、どんな小さな経済的な機会でも見逃さなかった。政府が推進した移住は、**Independence Rock**、ここは、すべての移住者たち

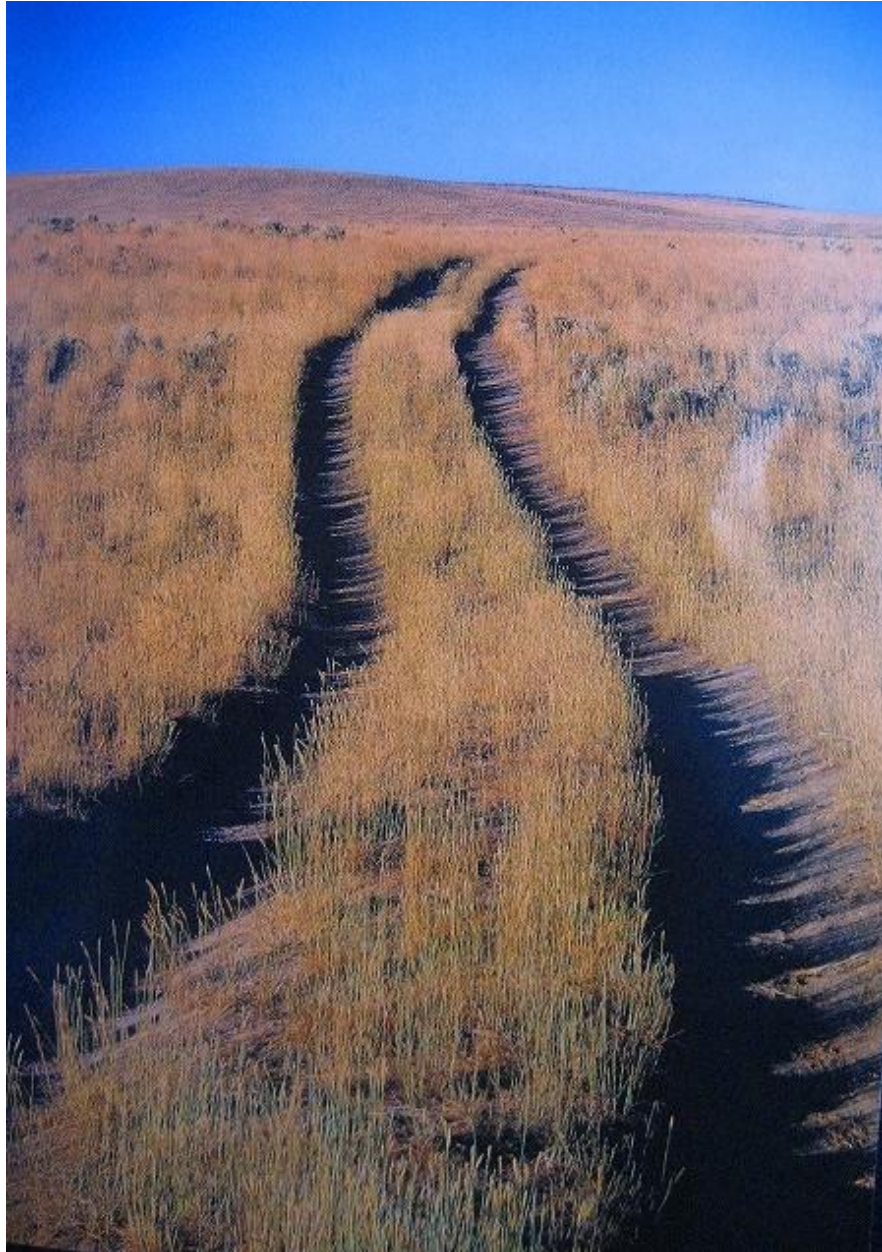
がすでにそこに刻まれていた数千人もの人の名前に自分の名前を加えたいと願っていたところであるが、そこでのビジネスについて、何を考えていたのであろうか？ しかも、その道路脇には、男が、金を取り名前を刻み込むためのノミを持っているビジネスがあったのだ。

Jackson は、西部に人々が溢れた、その一部に過ぎなかった。かれは、西部でのあらゆる出来事に興味を持つことの有利さを手にしようと、オマハに写真店を開いた。彼の西部に関する写真家としての評判がだんだん大きくなり、1870 年に、**F.J. Hayden** が **Jackson** に、**Hayden** が編集長となっていた公式な政府の西部に関する総覧のための写真家となるよう要請した。

Jackson の政府とともにした最終的な仕事は、街道についての象徴的なものでもあった。政府は、市民が成し遂げたことを把握しようと懸命であった。オレゴンに自らの意思で行こうと決断したのは、殆どが、極々普通の人であったし、その道を見つけ出したのも、極々普通の人達だったし、そこに、政府がチョコチョコと動いて、公式のものとしようとしていたものは、すでに出来上がったものばかりであった；そして、1842 年に政府は、**John Charles Fremont** にそのルートを調査させた。（彼は、そのルートを発見することは出来なかったが、**Fremont** による政府が作成したガイドブックは、重要なものであった。そこには、事実が記載されていたのだ。）

それまでは、移住者たちは、大きくて、よく統一された幌馬車隊のほうが、軍隊よりもインディアン達の攻撃を阻止するのに役に立つということで学んでいたが、政府に対しては、インディアンから保護をするという圧力があり、その結果として **Fort Kearny** が生まれた。最終的に、イギリスから合衆国に対してのオレゴンの譲渡と、合衆国の領土としてのその統治は、外交的な交渉がそうなるであろうということをしたには違いないが、それが国際的な合意の結果ではなかった。こうした合意は、単純に、断固とした開拓者達がすでにしたことを、確認したものに過ぎなかった。

その教本は正しいのだ。オレゴン街道は、1800 年代に合衆国から、西海岸に飛び越えていった移住の大爆発、そのものであった。そして、結果として、合衆国は、大陸を横断して領有することとなった。しかし、この教本は、疲れきり、時に気難しく、大平原のなかを、牛をせきたて困惑しきっていた移住者たちにとって最も重要な一つのことを忘れている。それは、前に進むということであった。それは、すべてのものを手に入れるために、すべてのものを他人に与えるという経験であった。それは、バッファーの小さな肉片を切り取ること、自分の尻までも、水に浸かりながら、恐れと戦い、川を渡りきること、或いは、自分の隣人を埋葬すること、**Flagstaff Hill** を乗り越え、情景を目の当たりにすることといった、なにもかも初めての経験であった。それが、オレゴンに行くということであった。



背表紙裏

“昼の間、私達、女の集団は、いつも、西のほうへ一時間くらい歩いて、馬車から馬車に、或いは、気のあった仲間を訪問して歩き、‘故郷’を思い起こしては、我が家のことを語り、残してきた愛する人たちのことを話した；まだまだずっと先の自分達の将来の希望を声に出して、そして、移住者達の生活の中のちょっとだけのゴシップなどをつぶやいたりしていた。”

Catherine Haun, 1849.

Idaho の three Island Crossing 近辺のオレゴン街道



裏表紙

“わたし達の馬車は、とても大きくて、そして、頑丈だった。また、分厚く、白い、孔の開いた布で覆われた、とても素敵な、丈夫な幌がかぶされていた……すべてが、清潔で、新鮮で、新しいものだった。

Nany Wilson 1849.

移住者達の馬車、Whitman Mission National Historic Site

馬車は、“清潔で、新鮮で、新しい”形で旅を始めた。